# デジモンアドベンチャー　ΩテイマーZERO

LAST ALLIANCE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
デジモンアドベンチャー　ΩテイマーＺＥＲＯ

【Ｎコード】
Ｎ７３０４Ｗ

【作者名】
ＬＡＳＴ　ＡＬＬＩＡＮＣＥ

【あらすじ】
デジモンペンデュラム　ｖｅｒ．ＺＥＲＯでオメガモンを育てている藤本秀人は、ある日デジモンの襲撃に遭い、瀕死の重傷を負った。しかし、オメガモンと融合することで復活した。その時に彼は様々なデジタルワールドで戦う運命を背負うことになってしまった。これは、聖騎士と融合した一人のテイマーが様々なデジタルワールドを旅しながら、時には問題を解決するために、時には敵と戦うためにその力を振るう物語である。

# 第1話　誕生の章　選ばれしテイマー（前書き）

この小説は前に書いた作品のリメイク版みたいな作品です。
一人でも多くの人に楽しんでもらえれば、嬉しいです。

# 第1話　誕生の章　選ばれしテイマー

雲が一つも無い青空の下で、１体の生物と、１人の人間が対峙している。
１体の生物は、背中に羽を生やし、頭部には角のようなものを二本備えて、顔の部分は単眼の形をしていて、体が灰色の三本爪の両の掌にも目玉がついている魔王型デジモン―デスモンだった。
対する１人の人間は、黒髪に黒い瞳をした長身な１９歳の青年、藤本秀人だった。

自分の目の前にいるデスモンの単眼から物凄い量のエネルギーと殺気を浴びながら、秀人はデスモンと対峙していた。

「行くぞ……オーグ、メルーガ」

『ジョグレス進化だね、秀人』

『いつでもいいよ』

秀人は、両腕につけているデジヴァイスの中にいる自分のパートナーデジモンであるオーグことウォーグレイモンとメルーガことメタルガルルモンに声をかけた。
秀人と一体化しているウォーグレイモンとメタルガルルモンは秀人に了承の声を上げると、右腕のデジヴァイス０１が青色に、左腕のデジヴァイス０１がオレンジ色に輝き始めた。
それを確認した秀人は、デジヴァイスを頭の上で交差させた。

＞＞ＪＯＧＲＥＳ－　ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ＜＜

『ウォーグレイモン！！！！』

『メタルガルルモン！！！！』

「ジョグレス進化！！」

両腕のデジヴァイス０１から電子音声が響くと同時に、秀人は自身の体をデータ化させた。

すると、青色とオレンジ色の光が合わさった眩い光が秀人を包み込んだ。

「オメガモン！！」

そして眩い光が消えた後の秀人が立っていた場所には、中央の頭から足にかけては、白銀を基調とした兜と鎧に身を包み、左肩には勇気の紋章が刻まれた盾が装備して、左手には竜の頭のような篭手が装着され、反対の右肩には青を基調としたアーマーが装備され、狼の頭を模した篭手が装着して、背中には外側が白色、内側が赤色のマントを羽織った聖騎士型デジモン―オメガモンが姿を現した。

自分を睨みつけてくるデスモンを負けじと睨みつけながら、オメガモンはその場で腰を落としつつ構えながら、両手を握りしめる。

そして、お互いに息が詰まるほどの睨み合いを行い始めた瞬間に……

「うおおおおおおっ！！！！！」

「ハアァァァァァァァッ！！！！！」

オメガモンとデスモンは、お互いに人間の目では到底不可視のスピードで相手に突撃を開始した。

「デスアローーー！！」

先制攻撃を仕掛けてきたのは、デスモンだった。
デスモンは、両手に存在している邪眼から、両手の邪眼から放たれる死の矢―デスアローを自分に向かって接近してくるオメガモンに向かって撃ち出した。

「フッ！！　ガルルキャノン！！」

オメガモンは、デスアローを右に避けると、右腕を軽く振って、右手のメタルガルルモンを模した篭手の口部分から巨大な大砲―ガルルキャノンを展開した。
そして、デスモンの背後へと回り込むと、デスモンに照準を合わせてガルルキャノンから圧縮エネルギー弾を撃ち込む。

「ムッ！！　エクスプロージョンアイ！！」

自分の背後に回り込んだオメガモンがガルルキャノンを自分に向かって撃ち出したことに気がついたデスモンは振り返り、頭部の単眼を深紅に輝かせると、破壊光線―エクスプロージョンアイをガルルキャノンから撃ち出された圧縮エネルギー弾に向かって発射した。
ガルルキャノンとエクスプロージョンアイは激突して、そのまま巨大な大爆発が起きて凄まじい爆音が辺りに響いた。

「ウオォォォォォォォォォッ！！！！！」

ガルルキャノンとエクスプロージョンアイの激突で発生した煙の中から、左手のウォーグレイモンを模した篭手の口部分からデジモン文字で『オールデリート』を刻まれた大剣―グレイソードを射出

したオメガモンが煙を切り裂きながら飛び出して来る。

「グレイソーード！！！」

オメガモンは、グレイソードに凄まじい紅蓮の炎を纏わせると、デスモンに向かって振り下ろした。

「クッ！！　デスアローーーー！！」

自分に向かって降り下ろされるグレイソードに気がついたデスモンは、左に回避すると、両手の邪眼からデスアローを撃ち出した。

「グレイソーーード！！」

しかし、それを避けたオメガモンは今度はグレイソードを装備している左腕を身体ごと大きく振りかぶり、デスアローの着弾の瞬間に、グレイソードを思いきり横に薙ぎ払った。
すると、グレイソードから巨大な三日月状の光刃が放たれ、デスアローを吸収して強力になりながら、デスモンに向かって迫る。

「グッ！ギャアァァァァァァァァァーーーー！！！」

デスモンは、オメガモンが放った巨大な三日月状の光刃を喰らって自身の体のデータを消失させながら断末魔の叫びを上げて、消滅していった。

「ふぅ……　お疲れ様、オーグ、メルーガ」

『秀人、お疲れ様』

『次も頑張ろうね』

デスモンの最後を見たオメガモンはゆっくりと地面に着地した。
秀人がウォーグレイモンとメタルガルルモンに労いの言葉をかけると、彼らも同様に秀人に労いの言葉を返す。
オメガモンは両腕を頭の上で交差させると、再び眩い光に包まれて、元の姿である秀人に戻った。
そして、目の前の光景にガラスにヒビが入る様な現象と共に世界に亀裂が入り始めて、秀人は夢から覚めた。

「あれは……夢か……　僕は練習のしすぎで疲れているのか……？
でも、凄い妙にリアルな夢だったな……」

朝になって、ベッドから起き上がった秀人は額の大粒の汗をタオルで拭き取った。
その後、自分の学習机に置いてある2つのデジモンペンデュラムver.ZERO（ウィルスバスターズ）を手に取って、秀人はそれらを見ながら夢の内容について考え始める。

秀人が持っているデジモンペンデュラムver.ZERO（ウィルスバスターズ）はデジモンペンデュラム最終作でウィルス種のデジモンが一切登場せずに、ワクチン種とデータ種のデジモンのみで構成されていることが特長である。
初めて超究極体が育成可能になったデジモンペンデュラムであり、何気にウォーグレイモンとメタルガルルモンのジョグレス進化でオメガモンが誕生する唯一の携帯デジモンシリーズなのだ。

（確かに僕のペンデュラムで育てているオーグとメルーガはジョグレス進化すればオメガモンになる……　もしかして、デジタルワールドに危機が迫っているのか？　それとも何かの予兆なのか……？

でも、一体化している意味がわからないよ……）

秀人はデジモンペンデュラムを見ながら考えるが、当然のことながら答えは出るはずも無かった。
途方に暮れた秀人は、思わず俯いてしまった。

「おっと。いけないいけない。今日の大学、午前中から授業で、その後サッカー部の練習だったな」

顔を上げた秀人は、急に現実に立ち返ると、すぐに行動を起こした。
鞄の中に入れたデジモンペンデュラムが輝いていることを知らずに。

「ふぅ〜　サッカー部の練習も最近大変になってきたな……　インカレが近いのもあるし、うちの大学は今年こそは優勝を狙っているからな……」

大学に行くための最寄駅から降りて、自宅までの帰り道を歩きながら自宅へと向かっている秀人の趣味はサッカーであり、得意なスポーツでもあるのだ。
彼は、本来ならばスポーツ推薦で有名難関私立大学へ進学出来たのだが、それを蹴って大学受験に臨み、志望校である国立大学に合格したのだ。
本人曰く、俺はスポーツをやるために大学に行くんじゃなく、勉強をしに大学に行くんだ、と。

「そうだ。久しぶりに寄ろっかな……」

秀人は、少し寄り道とばかりに公園に立ち寄った。
時間帯のせいもあって、公園は人が誰もいなく静かだった。
その公園からは、海を眺めることが出来るので秀人のお気に入りの場所の一つなのだ。
秀人は、しばらく公園の手すりにつかまって海を眺めていた。

「ん！？」

突然、秀人は後方に目をやったが、何も無かったので顔を海の方に戻した。

「おかしいなぁ～　さっき、白い何かがあったんだけどな～」

「お前が藤本秀人か？」

突然、海を眺めながら、自分が見たものについて考えていた秀人に黒色のローブを身に纏った男性が声をかけた。

「そうだ。そういうお前は？」

秀人は、男性の服装に疑問を感じたが、それを表情に出すことなく男性に聞き返した。

「ククク……。　久しぶりだな、秀人……」

フードを外した男性の顔に見覚えがある秀人は、忌々しげにその男性の名前を口にした。

「桐原将生……」

「覚えてくれていたんだね。嬉しいよ。以前、俺に対戦で負けて抹消（デリート）を勧められたのにも関わらず、大切に育てていたんだって？　全く、反吐が出る話だぜ。それでその後の対戦に俺に勝利してこの俺に泥を付けたな！！！」

激しい怒りを表情に出しながら、黒髪に黒い瞳をした青年―桐原将生は秀人に向かって声を上げた。

「もう一度対戦しよう、ってわけか。ちょうど今、ペンデュラムを持っているから相手になるぞ」

「ふん。誰がお前の相手になるものか。お前の相手はこいつだ」

かばんからデジモンペンデュラムを出して手に握りながら言った秀人の言葉を完全に無視した将生は、指を鳴らした。

「サアァァァァァァァーーーーーーー！！！！！」

将生が指を鳴らした瞬間、公園の雑木林の中からオレンジ色の髪をしていて、胸に砲塔と思われる箇所を備えて、間接が存在しない長い腕を持った悪魔のようなデジモン―ディアボロモンが姿を現して、秀人を睨みつけた。

「ツッ！！　何でディアボロモンが！？　お前のペンデュラムにはいないはずだ！！　というか、それよりも、どうしてデジモンが現実世界（アルワールド）にいるんだ？」

「その通りだ。ディアボロモンはデジモンペンデュラムにはいないデジモンだからな。だが、俺は一か月前にデジヴァイスとクラモンを得た。そして、ようやく究極体になるまで育てたんだ。ここまで

来るのに相当時間が掛かったからな～」

「何でお前が闇の力を手に入れたんだ！？　そのことに少しも疑問を持たないのか！！」

「それはお前のペンデュラムがウィルスバスターズだからだろう。俺のペンデュラムはナイトメアソルジャーズだ。お前とは正反対だ。お前が世界を守ろうとしているデジモン側なのに対して、俺は世界を破壊することを考えているデジモン側だ。俺は気付いたんだ。ディアボロモンとデジヴァイスがあれば世界を変えることが出来るということに」

そう言うと、将生は服のポケットに入れているデジヴァイスを見せた。

将生のデジヴァイスは、邪悪な黒色に染まっている。

如何にも、暗黒のデジヴァイスという表現がお似合いの印象を与えてくれる。

（僕が見ている夢で使っているデジヴァイスとは違うタイプだ……

しかも、色が違う……　正樹のデジヴァイスは黒色……暗黒のデジヴァイスだ……一体誰が何のために正樹が渡したんだ？）

秀人は、正樹が手にしている暗黒のデジヴァイスを見ながら黒幕の存在を考えたが、候補のデジモンがたくさんいすぎてなかなか一つに絞ることが出来なかった。

考えれば考えるほど泥沼に落ちてしまうような気がしたから、秀人は思考を一旦停止させた。

「俺は昔から力を欲しがっていた。所詮、この世は力が無ければ何も出来ない。俺にはその力が無かった……　しかも、一度勝った相

手の弱いデジモンにも負ける弱いデジモンしか育てられなかった。その時、俺に力を与えようと言って来た存在が現れた。それだけの事だ」

「そんな闇の力を使ってお前は一体何をするつもりなんだ？」

あまりいい答えが返ってこないことを予想しつつも、秀人は将生に質問をした。

しかし、将生の口からは秀人が予想していた内容とは違った答えが返ってきた。

「実に簡単な答えだよ、秀人。俺はディアボロモンと共にこの世界に平和をもたらすんだよ」

「はい！？　世界に……平和をもたらす……だと！？」

意外な答えに秀人は思わず戸惑ったが、将生はそのまま話を続けた。

「そうだ。俺はディアボロモンと共に世界を覆っている全ての危機を取り除く。テレビやインターネット、新聞等の情報手段を通じてわかったんだ……人間の限界を。政治家はいつまで経ってもすぐにでも解決できるような問題の一つや二つを解決出来ない。国際連合が介入しても解決できない紛争や問題はたくさんある。確かに、この力は確かに闇の力であることは俺でもわかる。でも、闇の力を人を守るために使ってはいけないというルールはないだろう？　『ウルトラマンネクサス』に登場した溝呂木眞也やレーベモン、カイザーレオモンの正義の闇のスピリットを使って戦った木村輝一のように、正義のために闇の力を使ってもいいはずだ！！　俺がディアボロモンと共に動いて闇の力を使えば、今、この世界を覆っている危

機の大半を解決することになるだろう……」

「話を区切らせてすまない。将生、確かに闇だからといって善になったら駄目だ、といルールはない。だが、お前はさっき何者かから力を与えられたと言ったよな。そいつこそ闇の力を使ってこの世界を支配しようとしている張本人だろう。そんな奴が世界を救いたいというお前の願いに力を貸すなんてとても考えられないよ……　今ならまだ間に合う……闇の力を捨てるんだ！！」

秀人の最もらしい反論を聞いた将生だが、動じる事無く秀人に切り替えした。

「それはお前が闇の力の使う奴はほどんどが悪者だという間違った先入観があるからに過ぎない。そんな個人的事情は切り捨てて、もっと世界を見据えるんだ……この力があれば世界そのものを変える事も出来るのに……」

「世界そのものを変える！？　お前、やっぱり新世界の創造を目論んでいたのか！！」

将生の性格を少しだけだがわかっていた秀人は、思わず溜息をついた。

桐原将生は、実は全然友達がいないのだ。

何故なら、せっかく育てたデジモンを平気で抹消（デリート）したり、興味を感じない他人には横柄な態度をとったりする人間だからだ。

唯一いた友達（将生本人が勝手にそう思い込んでいるだけなのだが）は将生のクラモンの存在を知ったために将生と絶交したのだ。

将生は彼のことを『友達甲斐のない奴』と言ったが、どうやら普段からあまり信頼もされてなかったみたいだ。

それを将生は自分が悪いのにも関わらず、全てを他人のせいにして

いるのだ。

「その通りだよ。まず、俺はディアボロモンの力を後ろ盾にして全世界の国家に宣言する。今すぐその国が保有している全ての武器を廃棄しなければ、ディアボロモンの力でその国家を滅ぼすと……」

「デ、デジモンの力を使って国を滅ぼすというのか！？　お前、何故そのようなことをする必要があるんだ？」

将生の答えに秀人は唖然となりながらも、それでも将生に尋ねるが、将生は当然だと言わんばかりに話を続ける。

「そうだ。何故なら、いつの世の中でも、どの世界でも最も多くの人間を殺しているのは俺たち人間だ。その中でも、武器を持った人間が同じ人間を殺していることが一番多いのが現実……　つまり、人間にとって一番の脅威は同じ武器を持った人間ということになる。しかし、その事を多くの人間が分かっていながらも、武器を捨てる事が今まで出来ずにいたんだ。何故なら、それは人間そのものが酷く脆弱な存在だからだ。武器が、力が無ければ常に身の恐怖を、死の恐怖を感じずにはいられない。それが人間の本質だ。だから、俺は宣言する！！　この力と、使役するディアボロモンであらゆる外敵から人間を守ることを。だから、人間自身は武器を持つ必要は無いということをな……」

（武器が無い世界……　確かにその世界は理想郷なのかもしれない……　だが、ディアボロモンで果たして出来るのか？　あいつなら『ターミネーター』に登場したスカイネットみたいに僕たちを攻撃してくる可能性が高いのに……）

秀人は、腕組みをしながら将生の考えを聞いたが、どうしてもデ

ィアボロモンという存在が引っかかっていた。

「だが……武器を無くすだけではまだ完成したとは言えない。俺はその後に世界の全ての国家を解体して、人種……宗教……国家……そして、思想といった人間の全ての隔たりを無くす。つまり、全ての国を排し、全ての宗教を無くせば、人は大規模な争いは出来なくなるんだ。　そうして、世界は平和になるのだ」

「ちょっと待て。それは支配じゃないか！！　それに、やっていることは何であれ、お前のやろうしていることはあの倉田明宏と同じなんだぞ！！　それでもいいのか！！」

将生が続けた言葉を聞いた秀人は、急に戸惑ったような表情をしながら将生に反論した。

『デジモンセイバーズ』に登場した倉田明宏は、自身が造り上げた人造デジモン達と七大魔王の一体で『怠惰』を司る魔王型デジモンーベルフェモンの力を後ろ盾に使って全世界の国家に解体と服従を命令したのだ。

結果だけを言えば、倉田の計画は阻止されて、倉田自身も命を落とす結果になった。

秀人にとって、将生のやろうとしていることはどう見ても倉田と同じ、いや、見方によってはそれ以上に悪いものだと見えたのだ。

「そうだ。確かにお前の言う通り、俺はこの世界を支配することになる。だが、秀人。考えてみろ。お前は人種、宗教、国家、思想による戦いが後を絶たない今の世界を果たして平和だと思うか？　俺の考えが押さえつけである事くらい俺でも分かるさ。だがな、空襲や地雷やテロで今日明日の命の保障も無い人達にとっては自分の肌の色や所属する国……そして、信仰する宗教がなんてどうでもいい話なんだよ。この人達にとって今必要なのは、安心して今を生きら

れる事じゃないのか？自由とか何とかは、まず命の保証をしてから言え！」

「ウグッ……」

秀人は反論することが出来ずに黙り込むと、将生はニヤリと不気味な笑みを浮かべる。

「秀人。お前の存在は本当に気に喰わない。この俺がわざわざ抹消（デリート）をお薦めしたのにも関わらず、大切に育てて後で俺に勝ちやがったテイマー……　そして、この俺に楯突こうとしている。お前の存在は後の世界に混乱を巻き起こす。世界の平和の為に……死んでもらおう。ディアボロモン！！」

「サアァァァァァァァーーーーーーーー！！！！！！」

「クッ！！」

将生の宣告と同時にディアボロモンは自身の右腕を伸ばして秀人に向かって攻撃を繰り出した。
それを見た秀人は、何とか間一髪で横に避けることでディアボロモンの攻撃から逃れた。
小学校の頃から今までずっと、サッカーをやっていた恩恵もあるのかもしれない。

「そうだな。正樹、確かにお前の言う通りだ。僕たちは恵まれすぎている、と言えば恵まれすぎている。僕たちはテレビやインターネットで間接的にしかその人たちのことを見たことがないから、その人たちの本当の気持ちがわかるはずがないかもしれない。だが、これだけは言わせて欲しい。お前はデジモンを生物としてではなく道

具として見ている。デジモンは道具なんかじゃない。僕たちと同じ、今を必死で生きている仲間なんだ！！　お前のやろうとしていることは絶対に間違えている！！」

　秀人は、将生の意見をしっかりと聞きつつも、将生に反論した。秀人にとって、ペンデュラムの中にいるデジモンでも立派に生きている仲間なのだ。
だから、例え自分が育てたデジモンが弱くても、一度将生との対戦に負けて抹消（デリート）を勧められても、大切に彼らを育てて後日、将生へのリベンジに成功したのだ。

「何を言うと思えば、そんな綺麗事か。テイマーにとって必要なものはデジモンの強さだけだ。それ以外は必要ない！！」

「違うな！！お前は間違えている。僕にとってオーグとメルーガは友達だ。僕に命の大切さ、命の重さ、といった大切なことを教えてくれたかけがえのない大切な友達だ。デジモンのことを考えずに、抹消（デリート）ばかりしているお前はテイマーなんかじゃない！！　ただの大量殺人犯だ！！」

「俺がテイマーじゃない、だと！！　ほざきやがって！！　お前、流石に言っていいことと悪いことくらいあることを知らないのか！！」

「ああ、けど僕は事実を言っただけだ。お前はテイマーじゃない！！　それに言わせてもらうが、お前の造る世界など、人間が人間でなくなる世界だ！！　そりゃ、いつの世でもどの世界にも怖い人や悪い人だっているさ……　でも、いい人や凄い人だって沢山いるだろう？　僕は今までそういう人々にたくさん出会えた。その身を投げ出しても誰かを助けるために歯を食いしばっている人もいる！！

例え、一度失敗したり挫折してもそこから立ち上がり、最後には栄光を勝ち取る人もいる！！　僕はそんな人たちと共にこの世界で生きていたいんだ！！　お前の顔には、力があるから、気に入らないから世界を好き勝手に支配したいとしか書かれていない！！　世界はお前の玩具なんかじゃない！！　周りの世界を変えたければまず自分自身から変われ！！ただ、人よりも少しだけ力があるだけで調子に乗るな！！　この大馬鹿野郎が！！」

「てめぇ……！！　この温厚で優しい俺を怒らせたな……ディアボロモン！！　奴に正義の鉄槌を下してやれ！！」

「サアァァァァァァァァーーーーーーーー！！！！！！」

将生の指示を聞いたディアボロモンは自身の腕を秀人に向かって伸ばすと、秀人の心臓を貫いた。
その動作があまりにも一瞬過ぎたがために秀人は一瞬何が起きたかわからないほどだった。

「ガハッ！！」

秀人は、苦痛の声を上げると口から血を吐きながら地面に倒れ伏した。
秀人は、立ち上がろうとしても体に思うように力が入らないためになかなか立ち上がれないでいた。

「ふん。この俺こそがどの世界にいるテイマーよりも一番なんだ。お前は、俺が造る新世界の生贄になったというわけだ。光栄に思え」

将生は、血だらけになりながら倒れている秀人を見下しながら言い放った。

（力が……力が欲しい……　あいつを倒すためだけに使う力じゃなくて、相手がどんな力を持っていても、どんな攻撃をしてこようとも、誰かを、世界を守りきれるような……そんな力が……欲しいよ……）

自分の無力さに涙を浮かべながら秀人がそう考えているのと同時進行で意識が遠のいていたが、秀人の涙が手に握られている２つのデジモンペンデュラムにこぼれ落ちた瞬間、デジモンペンデュラムが光り輝き、秀人は光に飲み込まれると、そのまま光の中に消えていった。

（ここは何処なんだ……　僕は死んだはずなのに……）

眩い光が目に入ったのか、意識を回復させた秀人は、白い空間にいた。

自分が死んだはずなのにここにいることに秀人は困惑の表情を浮かべながら空間を見渡していると、突然、秀人の目の前に純白の翼を背中から生やし、白を基調として所々に金色の装飾が成された鎧を身に着けた聖騎士が存在していた。

「初めまして、私はインペリアルドラモンだ。君たちの世界では、どうやらロイヤルナイツの始祖であるパラディンモードと呼ばれているみたいだな。いやはや、全く持ってその通りなのだが」

「初めまして、インペリアルドラモン。僕の名前は、藤本秀人です。早速質問がしたいのですが、何故僕をここに呼んだのですか？」

お互いに自己紹介をした後に、早速、秀人は聖騎士ーインペリアルドラモン　パラディンモードに質問をする。

「君は調停者である私たちに選ばれたテイマーであり、2体のパートナーデジモンを持った珍しいテイマーである『ツイン・エッジ』だからだ」

インペリアルドラモン　パラディンモードの言った通り、確かに2体のパートナーデジモンを持っている者ー『ツイン・エッジ』は非情に少ない。
秀人の他にも、『デジモンアドベンチャー02』に登場したウォレスもまた『ツイン・エッジ』と言うことが出来る。
何故なら、彼のパートナーデジモンはデリアモンとロップモンだからだ。

「確かに、僕は2体のデジモンを育てています。でも、それが貴方たちのような神に近い者に選ばれる理由にはなりません」

インペリアルドラモン　パラディンモードの答えに秀人は首を振って答えた。
それを見たインペリアルドラモン　パラディンモードは、秀人を諭すように優しく話した。

「君が選ばれた理由は他にもあるのだが、何と言っても君のデジモンの育て方にあるだろう。君は彼らを守ってくれる心優しいテイマーで、例え弱くても、対戦に負けて抹消（デリート）を勧められても大切に彼らを育ててくれた。だから、彼らも君に応えて強くなろうと思い、必死で訓練してきた……　それだから君は一度負けた相手に勝てたのだろう？」

「オーグ、メルーガ……　でも、僕は戦えません。僕は死んだんです。せっかく、一緒に戦えるチャンスだったのに……」

「いや、君はまだ死んではいないよ。正確に言うと、ディアボロモンによって致命傷を負って死にかけている状態だ。だから、君は復活することが出来る。ただし、君とウォーグレイモンとメタルガルルモンのデータを融合させる方法を使えば、の話だが。何しろ、デジモンで言う電脳核（デジコア）に相当する部分をやられてしまったからね。もし、そうすれば、君は自分のパートナーデジモンと一緒にいられる上に、デジモンと戦うことも出来る」

インペリアルドラモン　パラディンモードの話を要約すると、今の秀人は死んではいないが瀕死の状態で、それを解決するには自身のパートナーデジモンであるウォーグレイモンとメタルガルルモンとの融合、つまり、人間とデジモンのジョグレス進化をするしかないということだ。

「なるほど。確かにいい話ですけど、大抵こういうものには代償がありますよね？」

「残念だがその通りだ。もし、私が話した方法を使えば、君は人間でなくなり、半分人間、半分デジモンの存在であるエイリアスになる。それはつまり、君のいる世界の理から外れる異端者になることを意味する。それ故に、君は自分の暮らしている世界には居られない。もし、居られるとしても、それは君の世界に悪いデジモンが出現した時だけだ」

「……」

インペリアルドラモン　パラディンモードから人間とデジモンの

ジョグレス進化がもたらすあまりにも大きすぎる代償を聞いて、秀人は瞳を閉じて腕を組みながら考え始めた。

「もし、君がこの話を断れば、君の世界どころか全世界が存亡の危機に直面するだろう。君がこの話を受け入れれば、君は生き返るがデジタルワールドを越えた戦いが待っている。選ぶのは君の自由だ。私は何も言わない。最終的に道を歩くのは私ではなくて、君自身だ」

「僕をオーグとメルーガと融合させてください」

「！！　融合を選ぶとは……」

インペリアルドラモン　パラディンモードの話を聞いて意を決したように目を開けた秀人は、人間とデジモンのジョグレス進化への道を選択した。

インペリアルドラモン　パラディンモードは驚愕したが、秀人の瞳を見たことで秀人の気持ちを知った。

「こんな所で悩んでいても仕方がありません。あいつを倒さないと、僕の世界どころか全世界があいつの思うがままになってしまいます。僕は目の前に存在している可能性にかけます。人間じゃなくなっても、世界から嫌われるかもしれないけど、そんなの関係ない！！僕は自分のいる世界を守るだけです！！」

「わかった。詳しいことはディアボロモンを倒した後に話そう。その前に……」

インペリアルドラモン　パラディンモードが秀人に腕時計のようにして装着するタイプのデジヴァイスーデジヴァイス０１を渡すと、デジヴァイス０１は秀人の両腕に自動的に装着された。

ちなみに、秀人が付けているデジヴァイス０１の色はオメガモンの胴体部分を模したデザインなのか、白色が中心で所々に青色の装飾が施されている。

「これはデジヴァイス０１。君のような『ツイン・エッジ』や現実（リアル）世界（ワールド）でデジモンペンデュラムと呼ばれる物でデジモンを育てたテイマー専用のデジヴァイスだ。キーボードの部分があるので、デジモンに指示を出せるようになっているが、どうやら君には不要なようだな」

「これは……夢で見たのと同じデジヴァイスその物だ……」

両腕に付けられたデジヴァイス０１を見ながら秀人は呟いた。
両腕から聖なる力が秀人に伝わっていくみたいである。

「どうやら、使い方はわかるみたいだから説明の必要は無いな。デジタルワールドへの迎えは必ず送る。ただし、デジモンであるとは限らないがな」

「はい。ありがとうございます！！」

秀人の感謝の言葉を聞いたインペリアルドラモン　パラディンモードが消えると同時に白い空間に罅が入り始めた。
それを見た秀人は、両腕に付けているデジヴァイス０１を見ると、顔を前に向けた。

「それでは……世界を救いに行きますか！！　オーグ、メルーガ！！」

『行こう、秀人！！』

『ＯＫ！！　秀人！！』

秀人が気合を込めて叫ぶと、自身と融合しているウォーグレイモンとメタルガルルモンもそれに応じて声を上げた。
その瞬間、白い空間は完全に砕け散って、秀人は元々いた公園に戻った。

「何！？　おい、秀人。お前、どういうトリックで復活したんだ？」

「さぁな。気がついたらこんなことになっていたんでね。驚いたよ」

ディアボロモンが確実に殺したはずの秀人が生きていることに驚愕した将生は秀人に尋ねたが、秀人は両腕にデジヴァイス０１がついていることを確認した。
そして、秀人は体の状態が万全であることを確認すると、準備体操を始めた。

「嘘付け。お前、何かの力で復活しただろう。その証拠にデジヴァイスが両腕にあるだろう。しかも、何だそのデジヴァイスは？　見たことがないタイプのデジヴァイスだぞ？」

「ああ。これはね。僕のためのデジヴァイスだってさ。特注品でおしゃれでいいよね」

先ほどとは違って落ち着いた口調で自分と話している秀人を見て、将生は少しづつではあるものの、怒りが蓄積されていく。
秀人は、そんな将生を見ても関係ないと言わんばかりに準備体操を

終えた。

「とにかく、お前は俺を倒しに来たってわけか。でも、肝心のお前のパートナーデジモンは何処にいるんだ？　全然姿が見えないんだけど？」

「ああ。心配しなくても大丈夫さ。オーグとメルーガならここにいるよ」

そう言うと、秀人は自分自身を指で指した。

「はぁ！？　フフフフッ、ハハハハハハハハハハハハハハハハハッ！！！！　お前、復活して頭が狂ったのか！？　こいつは傑作だ！！」

「クククククッ、ハハハハハハハッ！　僕は狂ってはいないよ。事実を話しただけだ。俺のオーグとメルーガを笑ったことを後悔しても、僕は知らないよ」

秀人は、狂ったように笑っている将生に向かって凄みのある笑みを向けると、左腕に付けているデジヴァイス０１を見つめた。

「おいおい、まさかディアボロモン相手に単体で挑もうってわけじゃないよな？　お前、ウォーグレイモンとメタルガルルモンの２体が同時に掛かっても倒せなかった相手だぜ？　ディアボロモンは」

「ああ。その通りだ。お前には悪いが、オメガモンに進化しなくてもディアボロモンを倒す力を持っているんでね、僕たちには。　行くぞ！！　オーグ！！」

『ＯＫ！！　秀人！！』

秀人とウォーグレイモンの思いが共鳴した瞬間、左腕のデジヴァイス０１がオレンジ色に光り輝くと、秀人は両手を頭上で交差させながら叫んだ。

＞＞ＭＡＴＲＩＸ－ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ＜＜

「マトリックスエボリューション！！」

左腕のデジヴァイス０１から電子音声が響くと同時に、秀人は自身の体をデータ化させると、オレンジ色の光に包まれた。
オレンジ色の光が収まると、秀人が立っていた場所には銀色の頭部に胸当てを付けて、背中の外郭には翼のような物を装備して、体に黄金色に輝く鎧を身に付けて、赤い髪をなびかせた黄金の竜人－ウォーグレイモンが立っていた。

「ウォーグレイモン！！！　ウオォォォォォォォォォォォォォッ！！！！！！！」

『ツッ！！』

ウォーグレイモンが咆哮を上げると共に地面は爆裂したように吹き飛び、それを見た将生とディアボロモンは、思わず恐怖によって震えていた。
ただ咆哮を上げただけで地面が爆裂してしまうほど衝撃波が発生したのだ。
その点だけでも秀人のウォーグレイモンの力がどれほどのものなのかは、直接戦うディアボロモンだけではなく、そのディアボロモンのテイマーである将生にも充分過ぎるほどに理解した。

「ああ、御免ね。勝手に吠えて。でも、この世界の空気、本当に美味しいんだ。デジタルワールドの空気も美味しいけど、この世界にはデジタルワールドの空気のない美味しさがあるからつい……」

『……』

申し訳なさそうな表情をしながらウォーグレイモンは、親しそうに将生とディアボロモンに話しかけたが、将生とディアボロモンは恐怖で体が凍りついているのか声が出せなかった。

「君たちはこの世界を好き勝手にしようとしているみたいだけど、そうはさせない。僕たちが君たちを止めてみせる！！」

ウォーグレイモンは言葉と共に人間の目では追うことのできないスピードで両手に装備されているドラモンキラーを構えながらディアボロモンに向かって突撃を開始した。

「クソォォォォォォォォォーーッ！！　いけぇーーーー！！！　ディアボロモン！！！」

「サアアアアアアアアアーーーーーーーー！！！！！」

将生は恐怖を振り払うようにディアボロモンに指示を出した。それを聞いたディアボロモンも両拳を構えながらウォーグレイモンに向かって突撃を開始した。

「ウオォォォォォーーーーーー！！！！」

「シャアアアアアーーーー！！」

お互いに視認する事が出来ないスピードで相手に向かって突進すると、ウォーグレイモンとディアボロモンは激しいドラモンキラーと両拳の応酬を繰り返すのだった。

## 第1話　誕生の章　選ばれしテイマー（後書き）

用語説明

ツイン・エッジ……2体のパートナーデジモンを持つテイマー。
　　数多くのテイマーの中でも数が少ない希少なテイマーとして知られている。
彼らのパートナーデジモンはオメガモンのようにジョグレス進化するデジモンがほとんどである。

デジモン紹介

デスモン
世代／究極体　属性／データ種、ウィルス種　種族／魔王型、
必殺技／デスアロー、エクスプロージョンアイ
デーモンと同じく元々は高位天使型デジモンだったが、ダークエリアに堕とされ魔王型デジモンになってしまった。しかし堕天使型や悪魔型デジモンと違い、中立の立場を常に守り世界を静観している。通常は体の色が灰色でデータ種だが、天使型のデジモンとの来るべき決戦時になると体が闇色に染まり、ウィルス種の破壊神へと変貌する。変貌した後は、無駄な戦闘を避けて蓄えていたパワーを開放し、破壊の限りを尽くすと言われている。必殺技は、両手の邪眼から死の矢を放ち、敵を貫く『デスアロー』に、頭部の単眼が深紅に輝いた時に発射される、破壊光線『エクスプロージョンアイ』だ。

ディアボロモン
世代／究極体　属性／ウィルス種　種族／分類不可
必殺技／カタストロフィーカノン、パラダイムロスト、闇の力、システムフェイル

クラモンの最終形態デジモン。ネットワーク上のあらゆるデータを吸収し、進化と巨大化を繰り返し、電脳世界（デジタルワールド）で破壊の限りを尽くしている。ディアボロモンの手足は柔らかく素早く伸び、手や足の爪は鋭く格闘戦を得意としている。またクラモンの時にあった自分自身で自分のコピーを作る能力も復活し、自身を無数に分裂させると言う恐ろしき能力を持っている究極体デジモン。多くのデータと知識を吸収したディアボロモンは自らを全知全能の存在と思い込み、破壊と殺戮を楽しんでいる。しかし、数多く居るデジモンの中でも、その存在目的がはっきりしており、その最終目的は、軍事用コンピューターを乗っ取り、核攻撃によって現実世界（リアルワールド）をも破壊しようとしている、恐ろしいデジモンでもある。必殺技は、胸の発射口から破壊エネルギー砲を相手に向かって発射する『カタストロフィーカノン』に、自身の全ての力を解放して相手と共に自爆する『パラダイムロスト』。周囲のデータを吸収し体を巨大化、無数の腕で相手を殴り続ける『闇の力』。そして自分の周りに居るデジモンのエネルギーを吸い取り、強制的に一段階退化させる『システムフェイル』だ。その他にも数多くの技を所持しているぞ。

## 第2話　誕生の章　デジモンの思いと究極進化（前書き）

今回は私が考えたオリジナルデジモンが登場しますが、私のネーミングセンスの無さで名前が安直になってしまいました。
もし、代案がある人がいたらどうぞお願いします。

## 第2話　誕生の章　デジモンの思いと究極進化

「ウオォォォォーーーーー！！！！」

「シャアァァァァァァァァーーーーー！！！！」

海を眺めることの出来る公園内で、2体のデジモンが辺りに凄まじい衝撃波を撒き散らしながら壮絶な殴り合いをしている。
1体のデジモンは、藤本秀人のパートナーデジモンの1体であり、尚且つ彼が究極進化したウォーグレイモンで、もう1体のデジモンは、桐原将生のパートナーデジモンであるディアボロモンである。

「フンッ！！」

「シャァ！！」

ウォーグレイモンが渾身の力を込めて繰り出した右拳を、ディアボロモンは何とか避けると、今度は、反撃とばかりにディアボロモンは右腕を素早くウォーグレイモンの顔面に向かって伸ばすと、研ぎ澄まされた右爪で斬り付けた。

「シャァァァァーーーー！！」

「クッ！！」

ウォーグレイモンは、ディアボロモンの攻撃を右腕に装備しているドラモンキラーで防御した。

「ウオォォォーーーー！！！ドラモンキラーー！！」

ウォーグレイモンは空いている左腕のドラモンキラーをディアボロモンの右足に向かって突き出した。

「シャァ！？」

ディアボロモンはウォーグレイモンの行動を見て顔色を変えると、すぐに後ろに跳ぶことでウォーグレイモンとの距離を取った。

「よし！！　思った通りだ！！」

ディアボロモンとの距離を空けることが成功して、声を上げたウォーグレイモンは両手の間にエネルギー弾を発生させると、ディアボロモンに向かって投擲した。

「シャァ！！」

ディアボロモンはエネルギー弾が着弾する前にエネルギー弾が着弾する位置から逃れたが、それがウォーグレイモンの策略だった。

「ツッ！！」

「ハアアッ！！」

「ガハッ！！」

ウォーグレイモンは、エネルギー弾の結果を待たないで素早くディアボロモンの目の前に高速移動をすると、驚愕しているディアボロモンになど一切構わずにディアボロモンの左脇腹に向かって高速移動の勢いによって威力を高めた右回し蹴りを叩き込んだ。

苦痛の声を上げながら後退りをするディアボロモンに向かってウォーグレイモンは、更に右脇腹に向かって、今度は左回し蹴りを叩き込む。

「フン！！」

「グガァッ！！」

ウォーグレイモンの左右回し蹴りを急所である脇腹に連続で叩き込まれたディアボロモンは、一瞬息が詰まるような声を上げて動きが止まってしまった。
しかし、ウォーグレイモンはそんなディアボロモンの様子になど構わずに両手の間にエネルギー球を作り上げると、未だに動けずにいるディアボロモンに向かって投擲する。

「ガイアフォーーース！！」

「ギャガアァァァァァァーーーーー！！！！」

「なっ！？　そんな馬鹿な！？」

ウォーグレイモンの放ったガイアフォースを至近距離で受けたディアボロモンは苦痛に満ちた雄叫びを上げながら、データ粒子に変わりながら消滅した。
その事実にウォーグレイモンとディアボロモンの戦いを見ていた将生は驚愕のあまり極限にまで目を見開いた。
選ばれし子供たちのウォーグレイモンとメタルガルルモンの2体が同時に掛かっても倒すことのできなかったディアボロモンをウォーグレイモン1体だけで倒したのだ。
それは、ウォーグレイモンことオーグが秀人の思いに応えて強くな

るべくして行なった訓練で会得した戦闘経験から来る強さだった。
その結果、オーグとメルーガはウォーグレイモンとメタルガルルモンの中でも強豪の部類に確実に入るほどの強さを手に入れたのだ。

「ほぉ、ウォーグレイモンにしてはなかなかやるね。でも、二の次三の次の策を用意しておくのが真のテイマーなんだぜ？」

自身のパートナーデジモンであるディアボロモンを倒されたのにも関わらず、余裕を崩そうとしない将生はそう言うと、指を鳴らした。

『カタストロフィーカノン！！』

すると、何とウォーグレイモンが今ほど倒したはずのディアボロモンが、しかも2体のディアボロモンがウォーグレイモンの背後に姿を現した。
2体のディアボロモンは、胸元の発射口をウォーグレイモンに向けて構えると、連続でエネルギー弾を撃ち込む。

「クッ！！　そういうことか！！　ブレイブシールド！！！」

自分に向かって迫り来るカタストロフィーカノンを避けることが出来ないことを悟ったウォーグレイモンは背中に装備しているブレイブシールドを両手に持つと、前方に向かって盾の様に合わせながら、カタストロフィーカノンを防いだ。
何故、ウォーグレイモンが倒したはずのディアボロモンがいるかと言うと、ディアボロモンはデジモンが本来持つ筈の無い力―増殖能力を保有しているからだ。
恐らく、ディアボロモンはウォーグレイモンが投擲したエネルギー弾から逃れたときに密かに増殖していたのだろう。

只でさえ、一体だけでも強力無比な究極体が大群で現れるなど恐怖以外の何ものでもない。　ディアボロモンはそれを可能にする力を秘めている。
何しろ、自身と同じ考えと強さを持つディアボロモン達を無限に増殖させ続ける事が可能なのだ。
ディアボロモンは、敵にすると恐ろしく、味方にすれば頼もしいデジモンの1体だろう。

ウォーグレイモンはカタストロフィーカノンが止むと同時に、素早く背中にブレイブシールドを戻してディアボロモン達に向かって構えを取るが、その行動よりも前に、ディアボロモン達はウォーグレイモンに向かって飛び掛かると同時に、右腕を長く伸ばしてウォーグレイモンに向かって殴り掛かる。

『シャァァァァァァァーーー！！！』

「ムッ！！」

ディアボロモン達が伸ばして来た右腕をウォーグレイモンは左腕のドラモンキラーを使いながら防御した。
それを目撃したディアボロモン達は僅かに悔しげに顔を歪めるが、すぐさま冷静に立ち返り、トリッキーな動きをしてウォーグレイモンを撹乱するように動き回りながら拳を放ち出す。
ウォーグレイモンはそれを両腕のドラモンキラーを使いながら防御して、隙を見つけてディアボロモンに攻撃しようとするが、ディアボロモン達のトリッキーな動きによってなかなか攻撃できない状態に陥っていた。

「そこだ！！」

『シャァ！！』

それでも、ディアボロモン達のトリッキーな動きをある程度見切れるようになったウォーグレイモンは、ディアボロモン達に向かって渾身の力を込めた左腕のドラモンキラーを振り抜く。
ウォーグレイモンのドラモンキラーを避けようとディアボロモン達は大きく飛び去った。

「もらった！！　ウォーブラスターーー！！！」

その好機を逃さないと言わんばかりにウォーグレイモンは両手をディアボロモン達に向かって突き出すと、両手の間から連続でエネルギー弾を撃ち出す。

『シャァァァァァァァァーーーー！！！』

ディアボロモン達は、ウォーグレイモンが放ったウォーブラスターをトリッキーな動きで避けると、一体のディアボロモンがウォーグレイモンに急接近し、腕を長く伸ばして鋭い爪をウォーグレイモンの左腕に向かって突き出した。

「クラエ！！」

「クッ！！」

ディアボロモンの行動を見たウォーグレイモンは表情に焦りを浮かべた。

何故なら、ディアボロモンの能力の一つにウィルスを送り込む能力が在ることを思い出したからだ。

ディアボロモンの今の行動は明らかにウォーグレイモンにウィルスを送り込もうとしていることがわかる。
戦いに集中していた為に、ウォーグレイモンはディアボロモンの能力を忘れていたのだ。
そのウィルスは徐々にウォーグレイモンの体を侵食するだろう。
もし、思い出さなければ、戦いの間自身の体の異常に気が付かなかった。
そして、ウィルスはウォーグレイモンの体全体を侵食して、完全に動けない状態に追い込むだろう。

「君の考えはわかったぞ！！　悪いが君の思う通りにはさせない！！」

「ッ！！」

ウォーグレイモンは叫ぶと同時に自身の左腕に爪を刺そうとしているディアボロモンの腕を右腕で掴み取った。
それから何とか逃れようとディアボロモンはもがくが、ウォーグレイモンは逃さないと言うように力を込めて、ディアボロモンを地面に向かって投げつけた。

「フン！！」

「シャッ！？」

「まずは一体目だ！！ドラモンキラーー！！」

地面に叩きつけられた衝撃から立ち直れないディアボロモンに向かって、ウォーグレイモンは右腕のドラモンキラーに紅蓮の炎を纏わせると、鋭く振り下ろし、ディアボロモンの体を両断した。

しかし、それを見ても将生は落ち着き、ウォーグレイモンは安心しなかった。
彼らは十分に知っているのだ。
ディアボロモンが簡単に倒されるようなデジモンでは無い事を。

その考えを肯定するかのように体を両断されてもなおも、ディアボロモンは両腕を通り過ぎた後のウォーグレイモンの左腕のドラモンキラーに取り付かせると、最後の力を解放する。

「パ・ラ・ダ・イ・ス・ロ・ス・ト」

「ツッ！！　しまった！！」

ディアボロモンが全身の力を解放すると同時に、ウォーグレイモンの左腕のドラモンキラーで零距離からの巨大な大爆発が発生して、ウォーグレイモンの左腕のドラモンキラーは破壊されてしまった。
自身の武器の一つが失われた事実にウォーグレイモンは焦りの声を上げるが、その隙を逃さないと言うように二体目のディアボロモンが飛び掛かると、ウォーグレイモンの顔面に右拳を振り抜く。

「シャッ！！」

「ウオッ！！」

ディアボロモンの攻撃を右腕のドラモンキラーで防御したウォーグレイモンは声を上げるが、ディアボロモンはその様子に一切構わずに今度は右足蹴りを繰り出した。

「シャッ！！」

「セイッ！！」

「ガハァ！！」

右足蹴りを左手で受け止めたウォーグレイモンはディアボロモンの顔面目掛けて右ハイキックを繰り出した。
直撃を喰らったディアボロモンは将生のいる方向へと吹き飛ばされた。

「ディアボロモン！！　大丈夫か！！」

「ダイジョウブ……　マサキ……　アイツハツヨイ……　アノウォーグレイモンハ、マエニタタカッタウォーグレイモンヨリツヨイ……」

「！！　まさか、そのディアボロモンは……」

将生がディアボロモンの元に駆け寄ると、ディアボロモンは片言ながらもきちんとした日本語を話した。
ディアボロモンの言葉を聞いたウォーグレイモンはある事実に気がついた。

「どうやら気がついたようだな、秀人。このディアボロモンはかつて選ばれし子供たちがいる世界に出現したディアボロモンと同一個体なんだよ。確かに、アーマゲモンからクラモンに初期化されて根絶された。でも、その内の1体のクラモンがどういうわけか全ての元となったデジタルワールドに流れ着いたんだ」

「そこまで分かっているはずなのにどうしてクラモンを育てたんだ！？　君は凄腕のテイマーだったんじゃないのか？」

「俺はな……世界を支配することで、ディアボロモンが安心して生きれる世界が作りたいだけだ！！！」

「何だと！？」

「……」

将生の話を聞いてウォーグレイモンが驚愕しながらも将生に質問をすると、将生は自分の本当の思いを話し始めた。

「クラモンを育てている時からずっと、俺はディアボロモンの行いについて考えていた。確かに、ディアボロモンの行いは決して許されることの無い事だ。でもよ、秀人。お前もオメガモンを育てられる程のテイマー何だろう？　お前はデジモンの気持ちがわかる凄い奴なんだろう？　なら、ディアボロモンの気持ちを考えてみろよ！！」

「……」

「ディアボロモンはな、ずっと最初から最後までちゃんとコミュニケーションをとろうと話しかけていたんだよ、メールという手段を使って！！！　でも、結局誰もディアボロモンに返事を返さなかった！！！　無視されていたんだよ！！！　それで、初めてあった相手はアグモンとテントモン。あいつらは『攻撃』という手段を使って話しかけてきた。生まれたばかりの子供だったら、これをどのようにして学ぶと思う？　これを『遊び』だと思うだろう！！！　それで教えてもらった通りに遊び続けた結果、初めて送られた言葉の意味が『オメガモン、あの化け物を倒してくれ！！』、つまり、『お前、邪魔だから死ね』ということになる……ふざけるなよ！！！

確かにディアボロモンの行いは悪いけど、その時のディアボロモンは、まだ生まれて間もない子供なんだぞ！！！」

「確かに……　でも、その後のディアボロモンは何だかストーカー地味ていた気がするよ……」

将生のディアボロモンを思う怒りの声を聞いたウォーグレイモンは思わず俯いてしまった。

「それは俺も否定しない。それで、全ての元となったデジタルワールドに流れ着いたクラモンを待っていたのは、地獄の日々だった。誰にも相手にされず、何処に行っても迫害されて、虐められた地獄の日々だったんだよ。でも、ここからは俺の想像だけど、あるデジモンに拾われて暗黒のデジヴァイスを持たせて現実世界（リアルワールド）に送り込まれて俺のところにいる、ってわけだ」

「それが……君のディアボロモンを救いたいと考えている理由か？」

「そうだ！！！　俺はディアボロモンのために世界を変える！！もうこれ以上ディアボロモンが苦しまないで済むように！！」

「……」

将生の世界支配の話は、実は建前なのだ。
本当は、自分のパートナーデジモンであるディアボロモンが安心して暮らせる世界を造ることにあったのだ。
ところが、本来ならば喜ぶべきことであるはずなのにディアボロモンは無言で俯いているではないか。

「（何で、ディアボロモンは何も言わないんだ……？）確かにパー

トナーデジモンのために世界を変えたいという気持ちはわかる。でも、そのために多くの人々を苦しめていいという訳ではないだろう？」

「秀人……　お前は、デジモンよりも人間を選ぶのか？」

「誰が人間を選ぶと言った？　僕達は人間もデジモンも両方を救いたいだけだ。救えるものなら全てを救う。１０の内、９は救えるけど、１は救えないのならその１を可能な限り減らすだけだ！！」

「……！！」

ディアボロモンの様子が何だかおかしいことに疑問を抱いたウォーグレイモンだったが、将生を説得しようと疑問を問いかける。しかし、自分の邪魔をする秀人を煩わしく思っている将生の問いに、ウォーグレイモンは自分たちの思いを告げた。ウォーグレイモンの言葉を聞いたディアボロモンは、思わず顔を上げた。

「綺麗事ばっかり言いやがって……　お前たちを抹消（デリート）する！！！」

秀人の思いを綺麗事と片付けた将生は自分のデジヴァイスを握り締めた。将生のデジヴァイスからは黒い光を放ち始めた。

「行くぞ！！　ディアボロモン！！」

「……」

将生は自分のデジヴァイスを胸に当てて、自身の体をデータ化し

ながら叫ぶ。
パートナーデジモンであるディアボロモンは無言を貫き通している。
《ＭＡＴＲＩＸ－ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》
「マトリックスエボリューション！！！」
「ディアボロモン進化！！！」
「オメガディアボロモン！！！」
将生が叫ぶと同時にデジヴァイスから音声が響くと、将生とディアボロモンの体が一つに成り巨大な漆黒の光が出現すると、その中から、全身をディアボロモンを模した漆黒の鎧に身を包み、胸には砲塔を備え、両腰には一本づつの大剣を装備して、背中に黒色のマントを羽織り、ディアボロモンのような悪魔の顔をした暗黒騎士型デジモンーオメガディアボロモンが姿を現した。
「グギャアアアアアアアアアアアアアーーーーーーーー！！！！！！」
「なっ……　初めて見た……　でも、様子が変だ……　まさか……暗黒進化！？」
自身と同じ融合進化をしたはずなのに、凶暴な咆哮と理性を全く宿していない瞳を持ったオメガディアボロモンの姿を見たウォーグレイモンは、その余りにも変わり果てたディアボロモンと将生の姿に恐怖と悲しみしか感じる事しか出来なかった。
そしてそれを表すようにオメガディアボロモンは両腰にから大剣―ルシファーブレードを引き抜きながら瞬時に胸の砲塔にエネルギー

を集めると、ウォーグレイモンに向かって胸の砲塔から砲撃―カタストロフィーバスターを発射する。

「カタストロフィーバスターーー！！！」

「くっ！！　ブレイブシールド！！」

オメガディアボロモンが撃ち出したカタストロフィーバスターをウォーグレイモンは背中に装備しているブレイブシールドを前面で合わせて盾のように構えて防御したが、一撃を防いだだけでブレイブシールドは粉々に砕け散ってしまい、その衝撃によって後退してしまった。

「何だと！？」

ウォーグレイモンは、自身の唯一の防御手段が使用不能に成った事よりもたった一度の攻撃でブレイブシールドが粉砕された事実に驚愕した。

「グギャアアアアアアアッ！！」

オメガディアボロモンは、両手に持っているルシファーブレードを握り締めて構えながら、ウォーグレイモンに向かって突撃を開始した。

「クッ！！　ドラモンキラーーー！！！」

それを見たウォーグレイモンは、右腕のドラモンキラーを構えながらオメガディアボロモンに向かって突撃すると、ドラモンキラーを繰り出した。

「グギャアアアアアアアアアアッ！！」

「何！？　グアアッ！！」

オメガディアボロモンは左手に持っているルシファーブレードでウォーグレイモンのドラモンキラーの攻撃を防御すると、右手に持っているルシファーブレードを振り下ろすことでドラモンキラーを破壊した。
驚愕しているウォーグレイモンをよそにオメガディアボロモンは、更にルシファーブレードからの斬撃をウォーグレイモンの胸当てに向かって繰り出した。
斬撃によって、胸当ての一部を破壊されたウォーグレイモンは苦痛の声を上げながら吹き飛ばされた。

（ウォーグレイモンじゃ太刀打ちできない……オメガモンで行かないとまずいな……）

（でも……どうやってするんだ？　今のままじゃ進化出来ないよ……）

ウォーグレイモンと秀人は、内心でオメガモンのジョグレス進化を考えるがオメガディアボロモンの激しい攻撃によってそれが出来ないでいた。
ウォーグレイモンはルシファーブレードの斬撃とカタストロフィーバスターを何とか回避しながら、この状況の打開策を考えていた。

（オーグ、秀人……　ここは僕に任せて！！　オメガモンに進化するための時間を作るから！！）

（わかった！！　メルーガ……君に任せよう！！）

その時、秀人と融合しているメルーガことメタルガルルモンが自分が時間稼ぎをすることを言い出したため、ウォーグレイモンと秀人はメタルガルルモンに任せることにした。
ウォーグレイモンはオメガディアボロモンが撃ち出したカタストロフィーバスターを避けながら両手の間にオレンジ色のエネルギー球を作り上げると、オメガディアボロモンの足元に向かって投擲した。エネルギー球の着弾で生ずる爆煙でオメガディアボロモンの意識を一時的にこちらから反らす作戦だ。

「ガアアッ！！」

ウォーグレイモンの予想通り、自分の足元に向かって投擲されたオレンジ色のエネルギー球によって発生した爆煙でオメガディアボロモンは思わず顔を横に背けてしまった。

「ウォーグレイモン！！！　スライドエヴォリューーーション！！」

その隙にウォーグレイモンが叫ぶと同時にウォーグレイモンの体を青色の光が覆うと、その内部から機械的な青い鎧で身を包み、両肩にミサイルランチャーを装備し、背中に機械的なウイングを備えた蒼い狼―メタルガルルモンが姿を現す。

「メタルガルルモン！！！」

ウォーグレイモンがメタルガルルモンへとスライド進化を終えると、メタルガルルモンの姿を見たオメガディアボロモンはカタストロフィーバスターを撃ち出す。

「カタストロフィーバスター！！！」

「フッ！！」

しかし、メタルガルルモンは慌てる事無く超高速のスピードでカタストロフィーバスターを避ける。
ウォーグレイモンと比べて、メタルガルルモンはパワーは落ちて、近、中距離戦が苦手になるものの、スピードと遠距離戦が得意になるのだ。
ちなみに、ウォーグレイモンの場合は、パワーと近、中距離戦用になる。
つまり、使い分けが重要になってくるのだ。

「ギシャッ！？」

「ガルルトマホーク！！」

カタストロフィーバスターを避けると同時に消えたメタルガルルモンの姿に、オメガディアボロモンは慌ててメタルガルルモンを探そうと辺りを見回そうとする。
そして、オメガディアボロモンが辺りを見回している隙にメタルガルルモンはオメガディアボロモンの上空に移動すると、腹部のハッチを展開して、そこから巨大ミサイルを発射した。

「グギャアアアアアアアアアッ！！」

ガルルトマホークの直撃を喰らったオメガディアボロモンは苦痛の声を上げた。

「今だ！！　ジョグレス進化、行くぞ！！」

『行くぞ！！　メルーガ！！！』

『ＯＫ！！　オーグ！！！』

『僕たちをここまで育ててくれた秀人に今こそ応えよう！！！』

その隙を狙っていた秀人の叫びに応じるように秀人のパートナーデジモンであるウォーグレイモンとメタルガルルモンが同時に叫ぶと、その瞬間に眩い光の柱がメタルガルルモンの体を包むように立ち上った。

『ウォーグレイモン！！！』

『メタルガルルモン！！！』

「ジョグレス進化！！！」

そして、オメガディアボロモンがジッと眩い光の柱を見つめていると、その中から、流麗な白銀の鎧に身を包み、背中に内側が赤色で外側が白色のマントを羽織って、右肩には蒼色のアーマーをつけ、右手が蒼色の機械狼―メタルガルルモンの頭部を模した篭手をしていて、左肩には内側が黄金で外側が赤色の盾―ブレイブシールドΩをつけ、左手が黄金の竜人―ウォーグレイモンの頭部を模した篭手をした聖騎士型デジモンが姿を現した。

「オメガモン！！！」

その聖騎士型デジモンの名前は、ウォーグレイモンとメタルガルルモンが人々の平和を願う思いから融合した究極体を越えた合体究極

体であり、最強の称号であるロイヤルナイツに名を連ねる聖騎士型デジモンーオメガモンだった。
オメガモンは着地すると、オメガディアボロモンを睨みつけた。

「フッ！！」

オメガディアボロモンを睨みつけながら、オメガモンは左腕を軽く振るうと同時にウォーグレイモンの頭部を模していた篭手からデジモン文字で『オールデリート』と刻まれた大剣ーグレイソードが飛び出し、オメガディアボロモンにグレイソードの剣先を向ける。

「グギャアアアアアアアアアアッ！！」

オメガディアボロモンは、それを見るとオメガモンに向かって突撃すると、ルジファーブレードを振るった。

「グオッ！！（……とんでもない力だ……　ディアボロモンの比じゃない……　これが融合進化の力なのか……）」

オメガディアボロモンが振り下ろして来たルシファーブレードをギリギリの所でグレイソードで防いだオメガモンは、次々と攻撃を放ち続けるナイトディアボロモン　の姿に、冷や汗を流していた。
オメガディアボロモンは、ディアボロモンよりもパワー、スピード、攻撃力、そして、ディアボロモンの最大の弱点であった防御力等の全ての面が向上しているのだ。

「（これが闇の力……　将生、ディアボロモン……こんな事を望んでいたのか？　明らかに暴走しているではないか！！！）ガルルキャノン！！」

オメガモンとなった秀人は、悲しみを振り払うと右腕を軽く振ってメタルガルルモンの頭部を模した篭手から巨大な大砲―ガルルキャノンを展開させた。
更にそこから、集束砲撃をオメガディアボロモンに向けて発射した。

「ガアアアアアアアアアッ！！」

「何だと！？」

自身に向かって来るガルルキャノンを見たオメガディアボロモンは、何と回避行動を取らずに自身に向かって来るガルルキャノンに突進を行い始めた。
その姿を見たオメガモンは驚愕に目を見開くが、構わずにオメガディアボロモンを倒せる最大のチャンスだと思い、更にエネルギーをガルルキャノンの砲身に送り込み、ガルルキャノンの砲撃の威力を上げ始めるが、その考えは黒い光に包まれ始めたオメガディアボロモンの姿を見た瞬間に吹き飛んだ。

「まさか……必殺技か！？　まずい！！」

オメガディアボロモンの行おうとしていることに気が付いたオメガモンは驚愕に目を見開きながらも、その場から全速力で離れ始めるが、その前に、オメガディアボロモンは完全に黒い光に包まれると、暗黒のエネルギーを集中させたルシファーブレードを前方に向けながらオメガモンに向かって突撃する。

「ガアアアアアアアアアッ！！　リボルバーーーファントム！！！」

「グワアアアアアアアアアアアッ！！！！」

オメガディアボロモンの繰り出したリボルバーファントムを避けることが出来なかったオメガモンは、辺りに苦痛の声を響かせながら吹き飛ばされた。

「グゥ……　フフフ……　今の技はどうやら私でも出来そうだな……」

「ガアァァァァァァァァッ！！」

地面に叩きつけられながらも攻撃を喰らった胸元を押さえながら立ち上がったオメガモンは不敵に微笑んだが、すぐに真剣な表情に変わりながらその場から急いで離れ始めた瞬間、上空からオメガディアボロモンがルシファーブレードを振り下ろしてきた。

「ガアァァァァァッ！！」

「フッ！！　ガルルキャノン！！」

自分に向かって来るオメガディアボロモンのルシファーブレードを見たオメガモンは素早く跳躍することでルシファーブレードの攻撃を避けると、オメガディアボロモンに向かってガルルキャノンの照準を合わせると、ガルルキャノンから砲撃を撃ち出した。

「ガアアッ！！！」

「流石に防御力まで向上しているとは……　どうやら、相手はロイヤルナイツ級……いや、七大魔王級と言ってもいいぐらいだな！！」

「ガアァァァァァァァァァッ！！！」

オメガディアボロモンの実力に感嘆したオメガモンの言葉に応じるようにオメガディアボロモンは砲撃を喰らいながらも力を振り絞りながら立ち上がり、自身の宿敵であるオメガモンに顔を向ける。

「グギャアァァァァァァァッ！！」

「そう言えば、別個体だとは言え、私と君はお互いに一勝一敗……ここで決着を付けよう！！」

「ガアアァァァァァァァーーーーー！！！！！」

オメガモンがオメガディアボロモンに向かって突進すると、オメガディアボロモンも背中に羽織っているマントをはためかせながらオメガモンと同様に突進し、グレイソードとルシファーブレードの斬撃を開始しようとする。

「フッ！！」

「グギャァ！？」

ところが、突然オメガモンがマントを翻すと、オメガディアボロモンの視界から消えた。
オメガディアボロモンはそのことを疑問に思い、両手に持っているルシファーブレードを一旦下げると、辺りをキョロキョロと見渡す。

「そこだ！！」

「ガアァァァァァァァァッ！！」

突然、オメガモンはオメガディアボロモンの腹部に向かって左回し蹴りを繰り出し、攻撃を喰らったオメガディアボロモンは後方に吹き飛ばされて、地面に叩きつけられた。

「お互いマントを持っている者同士、マントには気を付けた方がいいみたいだな」

「ガアアアアアアアアッ！！」

オメガモンの言葉を聞いて怒りの声を上げたオメガディアボロモンは、ルシファーブレードを構えてオメガモンに斬りかかった。

（クッ……　暗黒進化だと言うのに何故異常が見られない？　これが本当の進化とは思えない……　暴走している点から考えても……）

既に充分なダメージを受けているにも関わらず、進化を解く事無く自分に立ち向かって来るオメガディアボロモンの姿に、オメガモンは辛そうな表情をして考えながらルシファーブレードをグレイソードで防御する。

「グギャアアアアアアアアッ！！ルシファーブレーード！！！」

「フン！！　ガルルキャノン！！」

オメガディアボロモンは、暗黒のエネルギーを纏わせたルシファーブレードをオメガモンに向かって振り下ろすが、オメガモンはグレイソードで防ぐと、空いている右手のガルルキャノンをオメガディアボロモンに向けると、エネルギーを一点集中させた砲撃を放った。

「グギャアァァァァァァァァッ！！」

オメガディアボロモンは苦痛の声を上げるが、尚も立ち上がり、オメガモンに戦いを挑み続ける。
まるで、内部にいるテイマーを生きながらえさせるために。

「もういいだろう！！　君は既に限界を超えているんだ！！　それ以上戦うと君もテイマーも死んでしまうぞ！！　ガルルキャノン！！」

悲しそうな声を上げたオメガモンは、オメガディアボロモンに向かって再度エネルギーを一点集中させたガルルキャノンを撃ち出した。

「ガアァァァァァァァァッ！！」

ガルルキャノンを喰らったオメガディアボロモンは、苦痛の叫び声を辺りに響かせながら、後方に吹き飛ばされた。

「これで終わりにしよう……　グレイソード！！！」

ガルルキャノンを撃ち出した直後、何とか立ち上がったオメガディアボロモンの背後に回り込んでいたオメガモンは左手のグレイソードに凄まじい紅蓮の炎を纏わせると、オメガディアボロモンに向かって振り下ろした。
オメガディアボロモンは、防御することもで出来ずに驚愕の表情をオメガモンに向けた。

「ガアハッ！！……マ……サ……キ……」

「グハッ！！」

オメガモンのグレイソードを喰らったナイトディアボロモンは苦痛の声を上げて地面に倒れ伏すと、黒い光に包まれて、ディアボロモンと将生が現れた。

「……」

地面に倒れ伏しているディアボロモンと将生を見てもオメガモンは何も思わず、両腕を胸の前で交差させて、眩い光を発生させると秀人の姿に戻った。

秀人の姿を見た将生は、ディアボロモンに命令を下した。

「まだ……終わっていない……ディアボロモン……秀人をやれ……そうすれば俺たちの勝利だ……」

「……マサキ……モウ……ヤメヨウ……ボクラノマケダ……」

将生の命令を聞いたディアボロモンは、俯きながら将生の命令に拒否を突きつけた。

「何を言っているんだ！？　まだ戦いは終わっていない！！　テイマーの命令に逆らうつもりか？」

将生の言葉に答えるようにディアボロモンは、将生を睨みつける。まるで、将生の命令に反逆するかのように。

「な……何だ？　その眼は……？」

「もう、君はディアボロモンのテイマーじゃないってことだよ」

「何だと！？」

ディアボロモンの瞳に隠された思いに気がついた秀人は、ディアボロモンのテイマーである将生がディアボロモンの思いがわからないことに怒りを覚えたのか、将生の胸ぐらを掴んだ。

「デジモンの気持ちをわからないお前はテイマーじゃないって僕は言ったんだ！！！」

「！！！」

「君は、融合進化した時に気付かなかったのか！？　暗黒進化をしていたんだぞ！！　一歩間違うとディアボロモンは死んでいたんだ！！！」

「！？　どういう事だ！？」

秀人は掴んでいた将生の胸ぐらを離すと、秀人は話し始める。

「確かにオーグじゃ全然歯が立たない程強かった。でも、実際には暴走していたんだ。君はディアボロモンのための理想郷を作りたい、と言ったよな。でも、ディアボロモンは全然嬉しそうな感じじゃなかったぞ！！！」

「馬鹿な！！！　俺はディアボロモンのために世界を変えようとしているんだ！！！　その何処が悪いんだ！？」

「マサキ……ボクハセカイヲカエテホシクナイ……タダマサキトイッショニイラレルダケデイイ……」

「え！？」

秀人の言葉を聞いても未だにディアボロモンの本当の思いがわからない将生を見て、ディアボロモンは自分の本当の思いを話し始めた。

それを聞いた将生は驚愕で目を見開いている。

「ムカシノマサキハボクヲマモッテクレルヤサシイテイマーダッタ……マサキノリョシンヤトモダチガボクヲワルクイオウトボクヲマモッテクレタ……」

ディアボロモンはクラモンで将生に初めて会った時のことを思い出したかのように話している。

クラモンは、将生のパソコンから出現して、将生にデジヴァイスを渡して将生のパートナーデジモンになった。。

クラモンのことをよく知っている将生は、最初こそは悩んだもののデジヴァイスを見たり、クラモンのことを調べた結果、クラモンを育てることにしたのだ。

しかし、クラモンが成長していくうちに連れて、クラモンの存在を知った両親には嫌われ、友人にも見放されるようになった結果、将生はディアボロモンが悪いんじゃなくて周りが、ディアボロモンを悪と考えている世界を破壊しようと考えるようになったのだ。

将生は、本来、誰にでも優しく、困った人を見捨てられない正義感の強い性格だったのだが、周りの環境の変化で変わってしまったのだ。

「ボクハ……ジブンノオコナイヲミテ、ハンセイシタ……　ナンデアレ、ボクハマサキノヨウナヤサシイヒトニメイワクヲカケタンダ……デモ、イマノマサキハタクサンノヤサシイヒトニメイワクヲカ

ケヨウトシテイル……　ボクガイルカラマサキハワルイヒトニナッタ……　ボクガイレバマサキハトマラナイ……ダカラ……キエレバイイ……ソウオモッタンダ……」

「そ……そんな……」

「マサキ……ゴメンネ……ボクガマサキノトコロニキテ……」

「う……うう……だからこそ、俺はお前のための世界を造りたかったんだ！！　青臭い理想だとわかっていても、自分の相棒が苦しんだり悲しんだりするところを見たくなかったんだ……　どうして……ディアボロモンだけがどの世界でも悪者扱いされるんだ！？」

将生の嘆きに秀人は無言を貫いていたが、ようやく言葉をまとめた秀人は将生に話しかけた。

「多分ディアボロモンが本当に必要としているのは、自分のための世界なんかじゃなくて……あの頃の優しかった将生なんじゃないのかな？」

「！！！　あ……あの頃の……俺……？」

「ソウ……アノコロノマサキダヨ」

「ディアボロモン……」

ディアボロモンが本当の思いを知った将生は瞳から涙を零しながら地面に膝をついた。

「……ごめんよ。ディアボロモン……俺はテイマー失格だよ……

ディアボロモンのことを考えていたら、こうするしかないと思い込んで……君を苦しめてしまった……　心のどこかで間違いに気づいてもディアボロモンにすがって自分を正当化させていたんだ……許してくれ……」

涙を零しながらもディアボロモンに頭を下げる将生を見て、ディアボロモンは優しく声を掛けた。

「ワカッテイルヨ。マサキモボクトオナジヨウニクルシンデイタコトヲ。ダッテマサキハホントウハヤサシイテイマーダカラ……」

「え？」

「ダイジョウブ。マサキ、モウイチドヤリナオソウ！！」

「そうだな！！」

こうして、ディアボロモンと将生による世界支配は無くなった。

戦いが終わって秀人とデジヴァイスにディアボロモンを戻した将生は海を見ながら話をしていた。

「俺はディアボロモンのためという大義名分を掲げて、とんでもないことをやろうとしていた。もしかして、クラモンを拾ったデジモンもそれを目論んでいてディアボロモンをその尖兵にして現実世界（リアルワールド）に送り込んできたんだろう……」

「そうだな。僕はあの時にインペリアルドラモン　パラディンモードに命を助けられたんだけど、デジタルワールドを越えた戦いが待

っていると言われた。僕は……半デジモン、半人間のエイリアスになってしまったから異端者になったんだよ……　何というか……ブラックウォーグレイモンみたいというか……」

「そうなんだ……人をそんな状態にするなんて俺は大馬鹿だよ。ディアボロモンのため、って言っておきながら結局は自分のことしかかんがえていなかったんだよ……」

俯きながら話す将生を見て、秀人は自分の両腕に付けているデジヴァイス０１に視線を移しながら話し始める。

「そんなに自分を責めるなよ。僕はロイヤルナイツの始祖であるインペリアルドラモン　パラディンモードに選ばれたテイマーだから、遅かれ早かれ戦いに巻き込まれる運命にあったんだ。それに……僕は嬉しかったんだ」

「……？」

「いや……決して戦うことじゃないんだよ。デジモンと一緒に戦えるのが嬉しいんだ。何かね……デジモンだけに戦わせて後ろで何もしないっていうのが気に食わなくてさ……　何か……デジモンだけに罪を背負わせるのは如何なものかな……って思えて。でも、やっぱり戦うのは怖いさ。初めてだったもの。でも、背中を任せられる仲間がいて怖くはなかった」

「仲間か……　俺もディアボロモンのために今度こそ正しい力を引き出せるように頑張んないとだな……」

秀人の考えを聞いた将生は気合に満ちていた。

どうやら、将生とディアボロモンは今度こそ正しい融合進化が出来

そうな予感がしそうだ。

「これからどうする？」

「俺は……デジタルワールドに行くよ」

「えっ？」

「多分さ、クラモンを拾ったデジモンはデジタルワールドと現実世界（リアルワールド）の支配を目論んでいるんだろう。もし、俺がここにいれば、確かに抑止力にはなるけど……ここにいたらまた、たくさんの人に迷惑をかけることになるし、ディアボロモンにも辛い思いをさせることになる。俺は、デジタルワールドに行って自分自身を見つめ直すことにするよ。　ディアボロモンという仲間もいるし、今度こそ正しい進化が出来るようにしなくては」

将生は穏やかな表情をしながら、秀人に話した。

「そうだな。僕も戦う運命にあるからデジタルワールドに行かなければならない。お互い、頑張ろうぜ！！」

「おう！！」

秀人と将生は、そう言うと、別れて自宅へと帰っていった。
ちなみに、２人とも自宅に帰ったら両親に散々怒られたそうだ。

デジタルワールドでも人間界でも無い不思議な世界。
その世界の中で現実世界（リアルワールド）の様子を見ていたデジモンは、自身の思い

通りに事態が進まなかった事に怒りを覚えていた。
そのデジモンは、背中に2門の巨大なキャノン砲を装備し、同じく背中に亡霊のような物がいて、腕を4本生やした合成型デジモンだった。

（くそっ！！　あと一歩の所で！！　インペリアルドラモンめ！！　ディアボロモンが正義に目覚めてしまったではないか！！　あの藤本秀人は厄介な人物だな……）

現実世界（リアルワールド）の様子を見ていたそのデジモンは、ディアボロモンが正義に目覚めたことにますます怒りを覚えたが、フッと思い止まった。

（そう焦ることは無いか……　焦りは敗北を招くのだからな……　だが、見ていろ！！　人間共！！　デジモンを実験という理由で好き勝手に扱い、私という邪悪な存在を生み出した！！　私は許さない！！　人間を！！　身勝手で傲慢な下等生物を絶対に許さないぞ！！！）

そのデジモンは内心でそう叫ぶと共に、空間を抜け出して何処かへと消え去った。
ディアボロモンを現実世界に送り込んだそのデジモンは、己の目的の為に動き始めたのだった。

## 第2話　誕生の章　デジモンの思いと究極進化（後書き）

オリジナルデジモン紹介

オメガディアボロモン（イーヴィル）
世代／究極体　種族／暗黒騎士型　属性／ウィルス種
必殺技／カタストロフィーバスター、リボルバーファントム
ディアボロモンと桐原正樹が暗黒の融合進化を行なった結果、誕生した暗黒騎士型デジモン。全身に身を包んでいる鎧には所々に進化前のディアボロモンの意匠がある。両腰には魔剣『ルシファーブレード』を装備している。ディアボロモンの能力を継承しており、正にディアボロモンの最終形態と言えるだろう。ディアボロモンの時よりも、総合力、特にディアボロモンの最大の弱点であった防御力が大きく向上している。必殺技は、胸の砲塔から破壊エネルギーの砲撃を放つ『カタストロフィーバスター』と自身を暗黒の光に包ませながら相手に向かって『ルシファーブレード』を突き出しながら突撃して、相手を粉々に破壊する『リボルバーファントム』だ。この他にも数多くの様々な技を所持している。

次回予告

ディアボロモンとの激戦を終えた秀人はある場所である物を見つけて、それをきっかけに再びインペリアルドラモン　パラディンモードに出会う。
秀人は、彼からデジタルワールドで起きていること、その黒幕と思われるデジモンを知る。
そして、秀人はデジタルワールドを超える戦いに参戦を決意する！！
次回、デジモンアドベンチャー　ΩテイマーＺＥＲＯ

誕生の章　新しい日常の幕開け

秀人は決意する、自分に出来ることをすることを……

## 第3話　誕生の章　新しい日常の幕開け（前書き）

投稿が遅れて申し訳ございませんでした。

## 第3話　誕生の章　新しい日常の幕開け

―秀人の自宅―

「何で怒られているのかわかっているよね、秀人？」

「はい……」

ディアボロモンとの激闘の次の朝、秀人は普通に家族と朝食を取った。

しかし、その後自分の母親である藤本優衣に正座しろと言われたので正座をしている。

（たかだか帰りが遅いぐらいでここまで言われるなんて……）

昨日散々怒られたのに、まだ何か言うことがあるのかと秀人は内心で思っている。

しかも、３０分以上も正座させられているので、足の方もいい加減限界だ。

（どうして、秀人は折角の休日の朝から優衣を怒らせているんだ……？）

秀人の父親である藤本修二は休日なので家でゆっくりとする予定だろう。

ちなみに、修二はつまようじで秀人の足をつつくという何とも地味な嫌がらせをしている。

「いい？　昨日も言ったけど私は遅くなるならなるでいいけど、そ

の時はきちんと連絡しなさいと言ったよね？　いつもなら、ちゃんと連絡するいい子の秀人だけど、今日はどうしたのかな？」

表情は笑顔だが、目が全然笑っていない優衣を見て、秀人は今にも逃げ出したい衝動に襲われていた。
修二は秀人の嫌がらせを止めてリビングの隅っこでガタガタと震えている。

『秀人のお母さん、怖い……』

『あのデーモンでも逃げ出しそうな勢いを感じるよ……』

秀人と融合しているオーグとメルーガも優衣を正面から見ることが出来ずに、ただただ震えることしか出来ないでいる。
歴戦の勇士であるオーグとメルーガでも目の前にいる優衣には敵わないようだ。
秀人は自身の帰りが遅くなった理由を正直に話し始めた。

「今日はサッカー部の練習があって、その帰りに公園に寄りました……」

「あの公園、私もよく行くのよね～　でも、公園だけでこんなに遅くはならないはずだけど？」

「公園から海を眺めていたら、悪魔のような生物に襲撃されて瀕死の重傷を負って……」

「そうなの……　えっ！？　何だか話が凄いことになっているんだけど……　そう言えば、秀人……　腕につけているのは何かしら？　腕時計にしては少し違うような気が……」

『そこから先は僕たちに説明させてください』

「えっ！？　なっ、何！？」

「だっ、誰だ！？」

秀人の両腕に付いているデジヴァイス０１を見て疑問に感じていた優衣と修二は、突然聞こえてきたオーグの声に驚いた。

『すみません。驚かして……　僕は秀人に育てられたデジモンのオーグと言います。　本名はウォーグレイモンと言います』

『オーグと同じく、僕も秀人に育てられたデジモンのメルーガと言います。本名はメタルガルルモンです』

オーグとメルーガは秀人の両親に順番に自己紹介をすると、秀人にあった出来事を説明し始めた。

『秀人は、僕たちと同じデジモンであるディアボロモンに襲われました。ディアボロモンは強いデジモンで、尚且つ危険なデジモンです。奴は、以前この世界とは別に存在している世界のネット世界に出現して世界中を恐怖に陥れました。　奴は、ペンタゴンに侵入して核ミサイルを発射したのです』

「かっ、核ミサイルを……　デジモンってそんなに凄い生物なの……？」

メルーガの説明に、優衣は圧倒されながらも質問をした。

『まっ、まぁ……　デジモンは、幼年期?、幼年期?、成長期、成熟期、完全体、究極体の６段階の進化がありまして、ディアボロモンはその究極体なんですよ。他にも色々な段階がありますが、ほとんどのデジモンがこの６段階の進化です。一応、僕たちも究極体ですけど』

『その究極体ですけど、ほとんどが世界を１０個や２０個は滅ぼせる力を持っている者が多いです。でも、中には完全体でも倒せる究極体もいますが、それでも強力であることには変わりません。しかし、中には歴史改竄能力を持つ者や、時間を操作出来る者といった特殊能力を持つ強豪の究極体もいて、僕たちでも敵わない究極体も多数います』

『……』

メルーガからタッチ交代して話したオーグの話の内容に優衣と修二は、口をポカーンと開けながら聞いていた。
無理もないだろう。
何しろ、自分の息子がそのような生物を育てていたとは全く考えてもいなかったからだ。

『話が脱線したので元に戻しましょう。秀人は、ディアボロモンに襲われて、心臓をやられて死にかけましたが、僕たちの心臓である電脳核（デジコア）を移植されて半デジモン、半人間のエイリアスになりました。それで、ディアボロモンを倒しました』

『しかし、その代償に世界の理から外れる異端者になりました。すみません、僕たちのせいで……』

オーグとメルーガが話し終えると、修二が秀人に尋ねる。

「秀人、お前は何がしたいんだ？」

「僕は……この世界にはいられないと言われたのですぐにでもデジモンのいる世界に行きたいです。そこで、戦わなければならない宿命があるので……」

秀人は修二に正直に自分の思いを告げた。

秀人は、今すぐにもデジタルワールドに行きたい思いがある。

「そうか。結局、お前も俺と同じ道を歩くんだな」

修二はそう言うと、秀人の両肩に手を置いた。

修二の職業は消防士なので、常に死と隣り合わせで、誰かを助けるために歯を食いしばって戦っているのだ。

「いいか、秀人。強い男になれ。弱い者を助けて、強い者と戦う人間になるんだ。人間ってのは護るものさえはっきりしていれば、限界なんてあっという間に超えてしまえるほど強くなれるんだ。そして、他人にはいつも優しくあれ。そうすれば、たくさんの友達と仲間が出来て、一緒に戦えるんだ」

修二は、秀人の両肩に手を置いたまま、秀人の目をしっかりと見ながら話を再開した。

「そう言えば、この前、お前と一緒にラーメン食べに行ったときに読んだ漫画にいいセリフがあったな。何だったかな……？　あっ、思い出した！！『信頼できる頭ってのは、その人と一緒ならば、たとえ相手が１００人いよーがちっともビビられーもんなんだよ』、だ。お前の中にはオーグとメルーガがいるんだろう？　彼らが心か

らついていくような男になれ」

「……ああ！！　必ず、強い男になってみせる！！　そして、絶対に無様な戦いはしない……　現状では絶対に満足しないで、『ウォーグレイモン』や『メタルガルルモン』、そして『オメガモン』の名前を侮辱するような戦いは絶対にしない……　そして、皆を本当に護る為にもっと強くなってみせる！！！」

秀人は、修二の言葉を聞くと決意を固めたように拳を握りながら宣言をした。

「よし、目標に向かって頑張れよ！！」

「はい！！」

元気な声を出しては見たものの、長時間の正座でかなり痺れた足を引きずりながら、秀人は洗面所に向かうと歯磨きを開始した。

「昨日、怒りすぎたかしら……」

「そんなことはないよ。ただ……」

「ただ？」

「長い間正座させることはないでしょ～」

「隅っこで震えていたくせに……」

足が痺れて歩くだけで大変な秀人を見ながら、優衣と修二夫妻はすっかり温くなったコーヒーを飲みながら会話をしていた。

「取り敢えず、何とか部屋までたどり着けた～」

歯磨きを終えたもの、未だに足のしびれが取れない秀人は部屋に入ると、ベッドに向かってダイブした。

『ところで、秀人』

『デジタルワールドへどうやっていくの？』

「インペリアルドラモンが迎えを寄越すって言ったけど、詳しいことは聞いていないな……　公園に行けばわかるのかも？」

そう言うと、秀人はリュックサックに着替えやノートと筆記用具、歯磨きセットとまるで修学旅行にでも行くような物を入れ始めた。

「何か、修学旅行みたいだな……　でも、健康管理とか必要だもんな……」

秀人は苦笑いすると、学習机に大切に置いてあるお守りを手に取ると、それを首から下げた。

そのお守りに興味を持ったオーグが質問をした。

『秀人、そのお守りは？』

「僕の友達がくれたんだ。僕の使っているのとは違うタイプのペンデュラムで何回も対戦して、一緒にサッカーやって……でも、半年くらい前に行方不明になってしまって……」

『きっと彼も何処かで戦っているよ』

『そうそう。もしかして、僕達のように戦っているよ、絶対に』

「そうだね」

オーグとメルーガの励ましの言葉を聞いて、秀人は笑顔を浮かべた。

「さて……それじゃ、行きますか！！」

『おう！！』

『ああ！！』

荷物の整理整頓が完了した秀人は、部屋を出るとそのまま玄関に向かった。

「ん？」

靴を履いた秀人が出発しようと考えていると、優衣と修二が出迎えに来た。

「行くのね」

「はい。ここに帰ってこられるかわからないけど、定期的に手紙とか送れたらな～って考えているよ」

寂しそうに笑う秀人を見ると、優衣は思わず秀人を抱きしめた。

「寂しくなったら会いに来ていいからね。辛くなったら相談しても

いいんだからね」

「ありがとう」

優衣にとって秀人は大切で、掛け替えのない宝物なのである。
藤本夫妻は長らく子供が出来ず、ようやく出来た一人息子である秀人は難産だったのだ。

「秀人、楽しんで来い」

「ああ。思う存分楽しんでいただくよ」

秀人と修二は右拳を合わせると、お互いに満面の笑みを浮かべた。

「行ってきます」

『行ってらっしゃい』

両親との挨拶を済ませると、秀人は玄関を出て、駅までの道を歩き始めた。

（フジモトヒデト……）

「誰だ？　僕を呼ぶのは？」

駅までの道を歩いている秀人は、突然、自分の頭に声が響いてきたので、声の主を探すべく辺りを見渡すが、当然のことながら、答えの声は出るはずがなかった。

（ヨウヤクミツケタ……　ワタシノチカラヲツグモノガ……）

「誰だ？　敵ではないんだな？」

（テキデハナイ。ミカタダ。ケンガコウエンデキミヲマッテイル……）

そう言うと、声はもう二度と秀人の頭に響かなくなった。

「剣が公園で待っているって言ったな……　公園に行きますか……」

秀人はそう言うと、昨日ディアボロモンとの激戦を繰り広げた公園に立ち寄り、公園の中に何かを発見した。

「なぁ、オーグ、メルーガ……」

『どうしたの、秀人？』

「何で、公園にオメガブレードが突き刺さっているんだろう？」

『あっ、本当だ。何でだろうね？』

公園の真ん中には、白い刀身の部分にデジモン文字で『ｉｎｉｔｉａｌｉｚｅ（初期化）』と書かれた長剣―『オメガブレード』が突き刺さっていた。

そのデザインはオメガモンの胴体部分を模している。

と言うよりも、オメガモン自体、オメガブレードから生まれたデジモンでもあるのだが。

「何でだろうね？って、そんな呑気なこと言ってられないよ……
とにかく、オメガブレードは、ロイヤルナイツの始祖であるインペリアルドラモン　パラディンモードの物。確かに、能力は魅力的だけど、勝手に奪っては駄目でしょうが……　だから、この世界に流れ着いたみたいだから抜いてインペリアルドラモン　パラディンモードに返してあげないと」

『そうでした……』

反省しているオーグとメルーガを尻目に、秀人は自然と惹かれる様にオメガブレードへ向かって手を伸ばすと、オメガブレードの柄の部分を掴んだ。

「えっ……！？うわぁぁぁぁぁ！！！！」

秀人の両手がオメガブレードの柄を掴んだ瞬間、オメガブレードから膨大な光が秀人に向かって流れ込むと、秀人の体は光になってオメガブレードの中に吸い込まれると、そのまま消えてしまった。
すると、オメガブレードも何処かへと消え去った。

「ここは……」

光になってその場所に現れた秀人は、辺りを見渡しながらここは何処なのかと考えた。
秀人が今いる場所は、まるで海の中にいる様な一面青の世界だった。

「なかなか気持ちいいな。　まるで、海を自由に泳いでいるような……」

秀人は光の海の中を泳ぐように漂っていた。

「藤本秀人。また会ったな」

光の海の中を漂う秀人の目の前に、いつの間にかインペリアルドラモン　パラディンモードが存在していた。

「あのオメガブレード……　貴方のですよね？　何故あのような所に？」

「あれは君の迎えだ。私は言ったはずだ。デジモンだとは限らないと」

「成程。なかなか粋な迎えでしたね」

秀人は、納得したように頷きながら、次の質問をインペリアルドラモン　パラディンモードにぶつけた。

「一つ気になっていたのですが、どうしてエイリアスになることが世界の異端者になることに繋がるのですか？」

「いやいや。別に、エイリアスになることが世界の異端者になることではないのだ。人間は本来、我々が考えている以上に物凄い力を持っている。ただ、生まれた世界と育った環境によって、大きく左右される。君の場合、自分でデジモンを育てていた。その場合、通常のエイリアスよりも物凄い力を発揮できるのだ。そして、力を簡単に思うように使うことが出来た。それは元々君が持っていた力だからだ」

「あっ、道理で思ったようにするするとオメガモンに進化出来たと思ったら……　確かに、ペンデュラムでオメガモンに進化出来てい

たからな……　その代償が世界の理から外れることなのか……」

インペリアルドラモン　パラディンモードの説明を聞いた秀人は、納得したように頷いた。
秀人が将生の対戦に負けた後のリターンマッチで将生に勝てたのも、オーグとメルーガがオメガモンにジョグレス進化出来るようになったのが大きな要因である。

「しかし、それは他の世界にいるテイマーに頼むことも出来たはずでは？　どうして世界の異端者にさせてまで僕にさせたのですか？
もしかして、その世界の問題はその世界の住人が解決しなければならないという決まり事があるから？」

「そのことを話す前にデジタルワールドの現状を話そう」

インペリアルドラモン　パラディンモードが言葉を言い終えた瞬間に、突如として周りの光景が変化し、黒い空間の中に青い星が無数浮かび上がった。
その星の正体に気が付いた秀人は、浮かんでいる無数の星を指差す。

「これは……地球……でしょうか？」

「その通りだ。もう少し正確に言うならば、君が住んでいる地球と同じ文明が存在する世界だ」

「……そうですか。やっぱり、平行世界とかパラレルワールドは実際に存在していたのですか。世界は本当に広いですね」

秀人は、小説や漫画、アニメ等で平行世界やパラレルワールドの存在を聞いたり見たりすることで、その存在を知ったのだが、まさ

か現実に存在するとは思ってもいなかったようだ。
その証拠に、秀人は感激している。

「そうだな。ちなみに、君のいる地球は全ての元となったデジタルワールドと平行している。さて、ここで本題に入ろう。本来ならば、地球と平行して存在しているデジタルワールドは、お互いに関わらずに独立して存在しているのだが、そうも言っていられない事態が発生したのだ」

「どういうことですか？」

インペリアルドラモン　パラディンモードの言葉に秀人は疑問の表情を浮かべながら、疑問の声を上げると、インペリアルドラモン　パラディンモードは顔を俯けながら話を再開する。

「その無数にあるデジタルワールドの一つで、古のデジタルワールドを暴虐の元に支配したと伝えられている邪神が蘇ったのだ……」

「邪神……？」

「ミレニアモンだ」

「ミレニアモン……確かそいつは……」

インペリアルドラモン　パラディンモードが告げた黒幕のデジモンの名前に聞き覚えがある秀人は少し考えると、言葉を繋げた。

「ムゲンドラモンとキメラモンのジョグレス進化で誕生するデジモン……　秋山遼に倒されたはずじゃ……」

「それは別個体のミレニアモンだ。今回のミレニアモンは、人間によって造られたムゲンドラモンとキメラモンがお互いに生き残るために融合して誕生したミレニアモンだ」

「人間によって造られた……？」

秀人が疑問の声を上げると、オーグとメルーガが秀人に助け舟を出した。

『キメラモンは、頭がグレイモンとカブテリモン、胴体がグレイモン、脚がガルルモン、尻尾がモノクロモン、翼がエンジェモンとエアドラモン、腕がデビモンとクワガーモンとスカルグレイモン、髪がメタルグレイモンで構成されている合成型デジモンで、』

『ムゲンドラモンは、胸と左腕をメタルグレイモン、メタルマメモンの武器であるサイコブラスターをムゲンキャノン、頭をアンドロモン、頭パーツとメガハンドをメガドラモン、下顎のパーツと腹部をメタルティラノモンから転用されたマシーン型デジモンだよね』

「（随分と詳しい解説だなぁ……）あっ！！　そういうことか！！」

オーグとメルーガの説明を聞いて、秀人はようやく理解した。

「そうだ。彼らは、人間たちの手によって誕生したデジモンなのだ。しかし、人間の度重なる実験と戦闘に耐えられなくなり、疲弊した彼らは融合して、人間たちを抹殺しただけでなく、その世界を滅ぼした。そして、デジタルワールドに渡って古のデジタルワールドを暴虐の元に支配したのだ」

「……何てことを……　でも、倒されたか封印されたんですよね？」

ミレニアモンを造り上げた人間たちへの怒りが込み上げる秀人だったが、ミレニアモンのその後を聞くことを忘れなかった。

「そうだ。ミレニアモンを倒すことは出来なかった。倒すことが不可能なデジモンだからだ。だから、我々はミレニアモンをデジタル空間に封印した。そこなら、脱出不可能で暴れたとしても影響は無いと判断したからだ。しかし、そのミレニアモンの封印を解いたデジモンがいた……」

「そのデジモンとは……？」

インペリアルドラモン　パラディンモードは悔しそうに話を続ける。

秀人は、最後の部分に興味を持ってインペリアルドラモン　パラディンモードに尋ねた。

「君と同じオメガモンだ」

「なっ！？」

『嘘！？』

『そんな……』

その答えに、秀人達は唖然とした。

自分たちと同じオメガモンがそのようなことをするとは考えられなかったのだ。

「いや……君ではない。黒いオメガモンなんだ」

「黒い……オメガモン？」

秀人は、安心して胸をなでおろすが、疑問が浮かび上がった。何故、黒いオメガモンが存在しているのかが秀人には解せなかったからだ。

「黒いオメガモンと言っても、勇気の紋章はあったぞ。どういうわけか歪んでいたがな。それに、グレイソードの文字が英デジモン文字で『ＴＥＲＭＩＮＡＴＩＯＮ』と刻まれてあった」

「そうですか……　それなら、どうして後を追いかけなかったのですか？　ロイヤルナイツと貴方の力があれば、幾ら色違いのオメガモンと言えども、すぐに片付くはずなのに……」

「奴の他にもデジモンがいたのだ。四大竜の一体であるメギドラモンが変化したカオスデュークモンやミレニアモン、そして、蘇った七大魔王が。そして、我々は戦いを挑んだが、黒いオメガモンの実力は我々の想像を遥かに超えていた……　奴とカオスデュークモン、ミレニアモン、蘇った七大魔王によって、ロイヤルナイツの過半数、ロードナイトモン、デュナスモン、スレイプモン、アルフォースブイドラモン、ドゥフトモン、エグザモン……そして、オメガモンが倒されたのだ……」

「何と……オメガモンまで……　それはまずい……」

更にインペリアルドラモン　パラディンモードの口から聞かされた事実に秀人は思わず頭を抱えた。
何しろ、ロイヤルナイツの過半数に加えて、自身と同じオメガモンをやられたのだ。

敵の強大さと恐ろしさをその体に叩き込まれたような錯覚を感じたのだ。

「更には、無数のデジタルワールドでは様々な事件が起きている。本来ならば、我々がやらなければならないのだが……」

「ロイヤルナイツの過半数がやられたから、人員不足というわけですね……わかります」

インペリアルドラモン　パラディンモードの気持ちが伝わったようにウンウンと頷きながら、秀人は言葉を繋げた。

「済まない。本題がだいぶ反れたな。何故、君に任せたのかと言うと……」

申し訳なさそうな表情をしながら、インペリアルドラモン　パラディンモードは黒いオメガモンの正体を話した。
その人物の名前は秀人がよく知り過ぎている人物だった。

「成程。それは僕が適任になるわけですね」

「そういうことになる……　済まないが、様々なデジタルワールドを越えて事件や戦争、問題を解決してもらえないだろうか？」

「了解しました」

「ありがとう」

秀人が了承の声を上げると、インペリアルドラモン　パラディンモードは感謝の言葉を述べる。

「さて、話すことも話したし、そろそろ、デジタルワールドに行ってもらおう」

「はい。そんじゃあ……、行きましょうか！」

秀人が気合を込めて叫ぶと、光に包まれた。
その瞬間、世界に罅が入り始めて、世界が切り替わった。

「ここが……デジタルワールド？　あっ……　御丁寧にオメガモンになっている……」

世界が切り替わった時の光の眩しさから気がついた秀人が辺りを見渡すと、そこはデジタルワールドの山のふもとだった。
しかも、自分はオメガモンになっていることにも気がついた。

「僕が住んでいる世界とかなり違うな……」

秀人は初めて生で見たデジタルワールドを目に焼きつけるように見ながらも、歩き始めた。
最初に訪れたデジタルワールドで彼がやらなければならないことはデジヴァイス０１に映し出されていた。

「機械化旅団『Ｄ－ブリガード』にいる『ダブル・エッジ』と合流して、行方不明になっているダークドラモンの行方を追え……か。ここだな」

オメガモンは目の前に存在している軍隊の養成学校と思われる建

物を見ると、両腕を胸の前で交差させると、秀人の姿に戻った。

「まずは事情を伺いますか……」

そう言うと、秀人は養成学校にもあるであろう受付に向かって足を進めた。

「奴が動き始めたか……」

光が照らしている一室で、あるデジモンがあらゆるデジタルワールドの映像を見ながら呟いた。

そのデジモンは、流麗な漆黒の鎧に身を包み、背中に内側が赤色で外側が黒色のマントを羽織って、右肩には黒色のアーマーをつけ、右手が漆黒の機械狼―ブラックメタルガルルモンの頭部を模した篭手をしていて、左肩には黒色の盾―ブラックシールドΩをつけ、左手が漆黒の竜人―ブラックウォーグレイモンの頭部を模した篭手をした聖騎士型デジモンだった。

「あのオメガモン、大した脅威にならなそうだけどどうする?」

そのデジモンに、十二枚の純白の翼を生やし、四つの『ホーリーリング』を身に付けた天使―ルーチェモンが話しかけた。

「少し様子を見よう（ルーチェモンも存外、頭が悪いな……　それだから、以前スサノオモンに、いや、人間に敗北したんだよ……相手は、以前倒したとはいえ、オメガモン。しかも、それが〇〇〇とは……）」

そのデジモンは、ルーチェモンに内心では苛立ちを感じたが、それを抑えて話した。

（適当な時期に、ルーチェモンを潰す。力を隠して、こいつに従っていたがもう我慢の限界だ。ルーチェモン如き、上級攻撃など必要ない。中級攻撃、いや、初級の上程度の攻撃で十分だ）

そのデジモンは邪悪な笑みを浮かべると、再びデジタルワールドの映像を見始めた。

## 第3話　誕生の章　新しい日常の幕開け（後書き）

七大魔王が噛ませ犬になる可能性大ですが、よろしくお願いします。
あと、敵の正体がわかったかもしれませんが、自重して下さい。

デジモン紹介

インペリアルドラモン・パラディンモード
世代／究極体、属性／ワクチン種、データ種、フリー
種族／古代竜人型、古代聖騎士型
必殺技／オメガブレード、ハイパープロミネンス
古代より伝わるインペリアルドラモンの最終形態であり、古代竜戦士型デジモンのインペリアルドラモン（ファイターモード）が、聖騎士オメガモンのパワーを得て、パワーアップし伝説の聖騎士（パラディンモード）へと形態を変化させた姿でもある。これが古より伝わるインペリアルドラモンの最終最強形態で、古代デジタルワールドの大破壊の時に降臨し古代デジタルワールドの崩壊の危機を救ったとされる。しかし、その頃の詳細なことは一切謎であり、いずれデジモンやデジタルワールドの研究が進めば解明されるであろう。その手に持つ大剣『オメガブレード』にはデジモン文字で『ｉｎｉｔｉａｌｉｚｅ（初期化）』と刻まれている。このインペリアルドラモン・パラディンモードこそ“ロイヤルナイツ”の始祖に当たる。必殺技は、巨大な剣の一振りで敵の構成データを問答無用で初期化してしまう『オメガブレード』に、全身の全砲門より一斉放射する『ハイパープロミネンス』だ。

ルーチェモン
世代／成長期、属性／ワクチン種、種族／天使型、必殺技／グランドクロス

遥か古代のデジタルワールドに降臨した天使型デジモン。デジタルワールドに秩序と平和をもたらしたデジモンだが、そのすぐ後にデジタルワールドで反乱を行い、永き暗黒の時代を作り上げた。成長期でありながら完全体クラス所か究極体さえも凌駕する力を持っている。必殺技は、惑星直列“グランドクロス”のように、１０個の超光熱球を十字に放つ『グランドクロス』。その威力は三大天使の一体であるセラフィモンの必殺技『セブンヘブンズ』を凌駕し、またあらゆる災害が起きるとされている。

次回予告

機械化旅団『Ｄ－ブリガード』でコマンドラモン軍曹の元で訓練を行うことになった秀人だが、その訓練の厳しさに言葉を失う。
そして、自身と同じ『ダブル・エッジ』のテイマーに抱える問題を一緒に考え始める。
果たして、彼の抱える問題とは？

次回、デジモンアドベンチャー　ΩテイマーＺＥＲＯ

Ｄ－ブリガードの章　やりすぎな訓練（ウォークライ）と深刻な悩み

こんな訓練で大丈夫か？　大丈夫に決まっている。

## 主人公&デジモン紹介（前書き）

無いよりはあったほうがいいので作りました。
参考までにどうぞ。

## 主人公&デジモン紹介

名前／藤本秀人

読み／ふじもとひでと

容姿／黒髪に黒い瞳をした長身の美形な青年

性別／男性

年齢／１９歳

性格／一人称は『僕』。真面目で礼儀正しい性格で、前向きで誰にも負けない熱く真っ直ぐな心を持っている。
また、優しい心を持っていて、仲間思いな一面がある。
その証拠に、オーグとメルーガをオメガモンにジョグレス進化出来るレベルにまで、一度負けた相手に勝てるようになるまでに育てた。
例え、悪人だろうと世界に悪影響を与える者だろうときちんと人の話を聞く性質で、他人の意志や考えを尊重する。

詳細／デジモンとサッカーが好きで、その中でオメガモンにこだわりを持っている青年で、父親の背中を見て、人々を救うことに強い信念と誇りを持っている。
デジモンペンデュラムｖｅｒ．ＺＥＲＯ（ウィルスバスターズ）でオメガモンを育成したテイマー。ディアボロモンに襲撃されて瀕死の重傷を負ったが、インペリアルドラモン　パラディンモードによって、オーグとメルーガと融合して半デジモン、半人間の『エイリアス』として復活した。
デジモンのいない現実世界（リアルワールド）には、世界の理から外れる異端者であるためにいることが出来ない。

インペリアルドラモン　パラディンモードに頼まれて、デジタルワールドを越える戦いに参戦している。
ウォーグレイモンとメタルガルルモン、オメガモンの3体のデジモンに進化が可能で、その時の相手と状況によって使い分けながら戦う。

名前／オーグ（種族名：ウォーグレイモン）

性別／デジモンに性別の概念は存在しないが、あえて言うならば男性

属性／ワクチン種

世代／究極体

種族／竜人型

必殺技／ガイアフォース

性格／一人称は『僕』。
普段は物静かで穏やかな性格で、テイマーである秀人に忠実である。
しかし、戦いになれば熱くなるが、その上で相手のことをよく観察する冷静な一面がある。そのため、秀人からは、精神面や肉体面での師匠として信頼されている。
戦うことにこだわりを持っていて、特に一対一の決闘にこだわりが強い。
そのため、戦いの邪魔をされると、その理由によっては怒る時がある。

説明／超金属『クロンデジゾイド』の鎧を身にまとった最強の竜戦士であり、グレイモン系デジモンの究極形態である。グレイモン系デジモンに見られた巨大な姿とは違い、人型の形態をしているが、スピード、パワーとも飛躍的に向上しており、完全体デジモンの攻撃程度では倒すことは不可能である。両腕に装備している『ドラモンキラー』はドラモン系デジモンには絶大な威力を発揮するが、同時に自らを危険にさらしてしまう諸刃の剣でもある。また、『勇気の紋章』が書かれた背中に装備している外殻を１つに合わせると、最強硬度の盾『ブレイブシールド』になる。歴戦の強者の中でも真の勇者が自らの使命に目覚めたときウォーグレイモンに進化すると言われている。必殺技は、大気中に存在しているエネルギーを一点に集中させて凝縮させた後、巨大な球状に変えて相手に向かって投げ付ける超高密度の高熱エネルギー弾『ガイアフォース』だ。

詳細／現実世界（リアルワールド）にいた頃に、ディアボロモンのテイマーである桐原将生との対戦に負けて抹消（デリート）を勧められたが、それでも秀人が大切に育てたため、それに応えようと強くなったテイマー想いなデジモンである。
秀人が大切に育てて鍛えたため、ウォーグレイモンの中でも強く、単体でディアボロモンを倒した程のずば抜けた強さを誇る。
ちなみに、オーグは目標として必殺技『ガイアフォース』で相手を倒せたことは一度もないというジンクスを破ることを掲げている。

名前／メルーガ（メタルガルルモン）

性別／デジモンに性別の概念は存在しないが、あえて言うならば男性

属性／データ種

世代／究極体

種族／サイボーグ型

必殺技／コキュートスブレス

性格／一人称は『僕』。
オーグとは正反対のクールな性格で、テイマーである秀人に忠実である。
一歩退いた立場で相手を分析したり、デジモンのことをよく研究していることから、秀人からは軍師・参謀的なポジションとして信頼が置かれている。

説明／ほぼ全身をメタル化することでパワーアップした、ガルルモンの最終形態である。メタル化をしても持ち前の俊敏さは失っておらず、全身に隠されている無数の武器で敵を粉砕する。鼻先にある４つのレーザーサイトからは不可視のレーザーを照射しており、赤外線、Ｘ線などあらゆるセンサーを使って前方の対象物を分析することができるため、視界の届かない暗闇のなかでもメタルガルルモンから逃げることは不可能である。また、背部から伸びたアームからビーム状のウィングを放出して超高速でネット空間を飛び回ることができる。必殺技は口から全ての物を氷結させてしまう絶対零度の冷気を放つ『コキュートスブレス』だ。この攻撃を受けたものは瞬時に生命活動を停止してしまう。

詳細／オーグと同じく、現実世界（リアルワールド）にいた頃に、ディアボロモンのテイマーである桐原将生との対戦に負けて抹消（デリート）を勧められたが、それでも秀人が大切に育てたため、それに応えようと強くなったテイマー想いなデジモンである。

秀人が大切に育てて鍛えたため、同じメタルガルルモンの中でも強く、ずば抜けた強さを誇る。

名前／オメガモン

性別／デジモンに性別の概念は存在しないが、あえて言うならば男性

属性／ワクチン種

世代／超究極体

種族／聖騎士型

必殺技／グレイソード、ガルルキャノン、ソード・オブ・ルイン

性格／一人称は『私』で、聖騎士型デジモンらしく口調も厳格である。

しかし、ロイヤルナイツのオメガモンのように国や主君に縛られる聖騎士ではなく、国や主君を二の次に考えており、己の護るもの（＝人々）の為に戦う聖騎士になりたいと願っている。

また、己の聖騎士道（ルール）を指針に掲げ、自分の信念を貫きながら、弱い者達の為にその力を振るうデジモンになりたいと願っている。

説明／遥か昔の『古代デジタルワールド期』に発生した極度の“デジタルクライシス”時に、2体の究極体デジモンでウィルスバスターであるウォーグレイモンとメタルガルルモンが平和を願う人々の強い意志によって融合したことで誕生した聖騎士型デジモンである。そのため、究極体を越えた合体究極体とも呼ばれている。また、『

ロイヤルナイツ』の一員としても高い地名度を誇っている。右腕はメタルガルルモンの特徴を色濃く残しており、大砲やミサイルなどが装備され、左肩には『ブレイブシールド』、左腕には『グレイソード』と呼ばれる無敵の大剣を装備して、こちらはウォーグレイモンの特徴が強く現れている。剣と大砲による攻撃、『ブレイブシールド』による防御、そして回避時や飛行時に自動的に出現する背中のマントなど、2体のデジモンの特性を併せ持ち、如何なる状況下の戦いにおいても対応する事が出来て、その能力をいかんなく発揮することのできる優れたトータルバランスを持っているマルチタイプの最強の聖騎士型デジモンの一体だ。必殺技は、メタルガルルモンを模した右腕の篭手から大砲を出現させて、相手に向かって氷の砲弾を撃ち出す『ガルルキャノン』に、ウォーグレイモンを模した左腕の篭手から出現させたデジモン文字で『オールデリート』と刻まれたグレイソードに炎を纏わせて、相手を斬りつける『グレイソード』である。そして、グレイソードから放たれる究極乱舞『ソード・オブ・ルイン』だ。

詳細／デジタルワールドで最強の一角と謳われるデジモンである。秀人とオーグとメルーガの究極融合進化によって現れるデジモンで、オーグとメルーガの力が同種でもずば抜けているため、ロイヤルナイツに所属しているオメガモンよりも、攻撃力・防御力・パワー・スピード等の総合面で勝っているため、能力がずば抜けて高く、並みの攻撃では傷1つつけることが出来ない。
次元を越える能力を持ち、様々な世界を行き来することが出来る。他にも、秀人とオーグとメルーガの絆によって極限にまで高められた光の力等の様々な能力を有している。

道具紹介

デジヴァイス０１……秀人といった『ダブル・エッジ』やデジモンペンデュラム等で現実世界（リアルワールド）でデジモンを育成しているテイマー専用のデジヴァイス。
機能はデジモンやアイテムのデータスキャンやデータ転送だ。
キーボードによる文字入力も出来るので、作戦を声に出さずにデジモンにアップリンク（送信）する事ができる。
他のデジヴァイスとは違って腕時計のようにして装着するタイプである。
秀人等のエイリアスは、自分のデジモンの意匠が施されたデジヴァイス０１を使用している。

## 主人公&デジモン紹介（後書き）

次回の投稿は第４話です。
敵である黒いオメガモン等の設定は本格的に登場した後に載せようと考えています。

## 第４話　Ｄーブリガードの章　やりすぎな訓練とテイマーの悩み（前書き）

タイトルを一部変更しました。
ウォークライの意味がラグビーの試合開始前にやる踊りで、主にニュージーランド代表のラグビーチームがやっていると知ったときは思わず驚きました。
そして、今回は他作品のネタをどうしても入れたかった回なのでぼかしがかなり多いです。
他作品ネタを入れないとやっていけない自分の至らなさを許してください。

## 第４話　Ｄ―ブリガードの章　やりすぎな訓練とテイマーの悩み

「すみません、『ダブル・エッジ』の藤本秀人ですが……」

秀人は受付に行くと、両腕に付けているデジヴァイス０１を見せながら受付係にいるコマンドラモンに声を掛けた。

「あっ、『ダブル・エッジ』の方ですね。暫く、お待ちください」

コマンドラモンはそう言うと、電話の受話器を取ると、誰かに連絡を入れ始めた。

どうやら、担当のデジモンを呼び出しているみたいである。

「すみません。少し待っていてもらえませんか？」

「わかりました」

秀人は近くの椅子に腰掛けると、新聞を取りに行って、おじさんみたいに広げながら読み始めた。

「どれどれ……　『Ｄ―ブリガードの最終兵器であるダークドラモン、突然の失踪！！　黒いオメガモンと何かの関係が？』、それでこっちは……『漢の漢バンチョーレオモン、突然の失踪！！　手掛かりは一切なし！！』……これって、カオスモンフラグか？」

適当に記事を読んでいた秀人だが、有名な究極体であるダークドラモンとバンチョーレオモンの２体の失踪にあるデジモンの存在を想像してしまった。

「大変お待たせしました。私は機械化旅団『D―ブリガード』所属のコマンドラモンであります。階級は軍曹です。こんな私ですが、どうぞよろしくお願いします」

秀人はそのまま新聞を読んでいると、軍使用のアーミージャケットにヘルメット装備な黒い小柄な竜のようなデジモン―コマンドラモンが声を掛けてきた。
しかも、堂々と敬礼しながらの話しぶりだ。

「初めまして、コマンドラモン軍曹殿。私は藤本秀人。ウォーグレイモンのオーグとメタルガルルモンのメルーガのテイマーです。こちらで問題が起きていると聞き、駆けつけました。こちらこそ、お願いします」

コマンドラモンの行動を見て感化されたのか、秀人も敬礼をしながら堂々と答えた。

「それでは、秀人殿。早速ですが、我らが『D―ブリガード』の最終決戦兵器、ダークドラモンを確保するために基礎訓練に参加して下さい」

「そうですね。自分も小学生の時からサッカーをやっていましたから、基礎訓練の重要性は身に染みています（良かった～　高校のサッカー部で使っていた用具一式や好きなサッカー選手のユニフォームを持ってきていて……）」

秀人はコマンドラモンの言葉に頷きながら、自身の用意周到さに感謝していた。
ちなみに、秀人の今の服装は黒の長袖のTシャツにジーパンと運動には向かない服装である。

「それでは、グランドへ案内します。先にメニューを言いますが、グランドを３０周ランニング、その後昼食。その後、筋トレに座学です」

「了解しました」

そう言うと、秀人はグランドの近くにある体育館を借りて着替えたが、その時に不便を感じた。
何故なら、コマンドラモンの身長が１m程しかないために、更衣室があまり大きく作られていなかったのだ。
秀人は何とか着替えることは出来たが、その時に文化というか、世界の違いを感じた。
その後、秀人はグランドを３０周ランニングしたが、流石はインターハイベスト４で、スポーツ推薦が来たほどの実力を持っていたのか、もう一人いる『ダブル・エッジ』と同様にすんなりと終わった。
だが、秀人は知らなかった。
これはまだ序の口であることを。

「はい、焼肉カレーライス大盛りね」

「ありがとうございます」

ランニングを終えた秀人は、食堂で好物である焼肉カレーライス大盛りセット（焼肉カレーライス・味噌汁・サラダ）を美味しそうに食べていた。

「お前も『ダブル・エッジ』か」

秀人の隣に、銀髪に美形の青年―美藤龍之がカツ丼セット大盛り（カツ丼・味噌汁・サラダ）の乗ったトレーをテーブルに置きながら秀人に話しかけてきた。

「ああ、はい。僕は藤本秀人。ウォーグレイモンとメタルガルルモンのテイマーです。どうぞ、よろしく」

「俺は美藤龍之。スレイヤードラモンとブレイクドラモンのテイマーだ。所で、年いくつ？」

「僕は１９です」

「そうか。俺は２２だ」

秀人と龍之はお互いに自己紹介をして、握手を交わすと食事をしながら談笑を始めた。

「僕はデジモンペンデュラムｖｅｒ．ＺＥＲＯで育てて、ジョグレス進化でオメガモンに進化可能ですが、そちらは？」

「ほぉ、ペンデュラムで育てたんだ。いいな～　俺もペンデュラム買いたかったけど、その時、金なかったんだよな……　俺はデジタルワールドに来たときにインペリアルドラモンからドラコモン２体授かって大切に育てたら、一か月前に究極体に進化したんだ」

「おめでとうございます。僕は少し理由ありで……」

「知っているよ。エイリアスだろう？」

「えっ！？」

自分がエイリアスであることを出会ってまだ少ししか経っていない他人にあっさりと知られた秀人は焦りの表情を浮かべた。
しかし、龍之は両腕のライトブルーのデジヴァイス０１を見せながら話をする。

「デジヴァイス０１の色が違うから何かあるなぁ～と思ったらそういうことか。別に大丈夫だよ。でも、ジョグレスでオメガモンか……　いいな……そろそろ進化してもいい頃なのに未だに出来ないんだ、エグザモンに……」

「ジョグレス進化するにもペンデュラムでもいろいろと条件が有りましたからね……」

「そうなんだけどね。俺のデジモンなんだけどさ、いつも喧嘩しているんだ。そのせいで、ここにいる皆に迷惑をかけているんだ。エグザモンに進化するためには、仲良くさせないといけないし……
俺のやり方が悪いんだけど、どうすればいいのかわからなくて……」

「だったら、一緒に考えましょう。彼らがやる気を出す方法を」

「……ありがとう」

こうして、秀人は龍之の悩みを一緒に考えることにした。
昼休みが終わるまでずっと、彼らはスレイヤードラモンとブレイクドラモンの絆を結ぶ方法について考えていた。

昼休みが終わったあと、秀人は筋トレ、龍之は模擬戦に取り組んだ。

秀人はメニューを終えると、更に自主トレに励み、龍之はスレイヤードラモンとブレイクドラモンを仲良くさせようとするが、この日も失敗した。
後で、秀人と模擬戦をしてもらおうと龍之は考えた。

その後は二人揃って座学を受けた。
座学とは、演習や訓練などの実技に対して、講義形式の学科のことである。
秀人にとって、座学は面白い内容だったが、如何せん話が難し過ぎて何回も教官に質問をしてしまったが、逆に教官を喜ばせてしまった。
無理もないだろう。
全くの予備知識なしで物凄く専門的な事を教えてくるから、秀人が受けてきた学校の授業よりも遥かに難しかったからだ。
それでも、自分のために熱くなってくれる教官の話を聞き漏らすまいと奮闘する秀人だった。

その後、秀人と龍之は夕食を食べて、シャワーを浴びると、外にある模擬戦場に行った。
あらかじめ、上官からの許可は貰っているので問題はない。

「スレイヤードラモン、ブレイクドラモン、実体化（リアライズ）」

龍之がそう言うと、デジヴァイス01が光ると、龍之の目の前に2体のデジモン一全身を白い鎧で覆い、背中には緑色のマントを羽織った竜人型デジモンースレイヤードラモンと、背中にドリルを装備し、ドリルやショベルアームを腕のように生やしている機竜型デジモンーブレイクドラモンが姿を現した。

「なるほど……　数値は高いな……　オーグとメルーガのそれを凌

駕している……　でも、仲が悪いってどういうことだろう？」

秀人は両腕のデジヴァイス０１を使って、スレイヤードラモンとブレイクドラモンの数値を測定しながら、不仲の原因を考え始めた。

「ブレイクドラモン、今日こそ決着を付けよう。俺とお前、どっちが強いのかを」

「望むところだ。さっきも龍之に止められたからな」

「二人とも、やめろ！！」

実体化（リアライズ）されてすぐにお互いに睨み合うスレイヤードラモンとブレイクドラモンとそれを止める龍之を見て、秀人はすぐに事情を理解した。

どうやら、二人とも自分は強いと思い込んでいて、お互いを牽制しているから未だにジョグレス進化が出来ないのだ。

ジョグレス進化で一番重要なのはテイマーとデジモンの関係もそうなのだが、デジモン同士の絆なのだ。

『秀人、ここは僕とオーグに任せてくれるかな？』

「わかった。どうやら、こういう問題は僕よりもデジモン達の方が適任だからな」

メルーガの言葉を聞いた秀人は、オーグとメルーガに任せることにした。

『お～い、二人とも、一つ質問があるんだけどいいかな？』

『何だ？』

『君たちは本当に強いデジモンなのかな？』

メルーガはスレイヤードラモンとブレイクドラモンの神経を逆なでするような質問をした。
その証拠にスレイヤードラモンとブレイクドラモンは既に苛立っているのが手に取るようにわかる。

「お前、そりゃ決まっているだろ！！」

「俺たちは強い。でも、どっちが強いのかを決めているからな！！」

『ふ～ん、面倒だね、テイマーにとって君たちは』

スレイヤードラモンとブレイクドラモンの答えを聞いたメルーガは言葉を続けた。

『考えてみなよ。君たちがどちらが強いかというしょうもない争いを繰り広げてどれだけの人に迷惑をかけているのかを。君のテイマーだって、君たちの仲直りを望んでいるんだよ。それなのに、どちらが強いかというしょうもないことでいがみ合うなんて馬鹿みたいだよ。いや君たちは正真正銘の馬鹿だよ』

『お前、ふざけんなよ！！』

メルーガの言葉にスレイヤードラモンとブレイクドラモンは額に青筋を立てながら怒りの声を上げた。
メルーガは普段このようなことを言うようなデジモンではないが、龍之のために、スレイヤードラモンとブレイクドラモンのために敢

えて挑発しているのだ。

『メルーガ、そこまでにしよう。ここから先は僕にやらせてくれ。本当に強いデジモンは数値だけではないということを教えてやろう！！』

「秀人君、すまないがこいつらの頭を一度冷やしてやってくれ……」

「承知しました。行くぞ、オーグ！！」

『いつでもいいよ！！』

龍之の願いを聞いた秀人の左腕に付けているデジヴァイス０１がオレンジ色に光り輝くと、秀人はそれを胸に当てて、自身の体をデータ化しながら叫ぶ。

＞＞ＭＡＴＲＩＸ－ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ＜＜

「マトリックスエボリューション！！」

左腕のデジヴァイス０１から電子音声が響くと同時に、秀人はオレンジ色の光に包まれた。

オレンジ色の光が収まると、秀人はウォーグレイモンに究極進化していた。

「ウォーグレイモン！！！」

「ほぉ、エイリアスとは……ここは私がやろう。ブレイクドラモン、お前との戦いは後だ」

そう言うと、スレイヤードラモンは自身の武器である伸縮自在の剣ー『フラガラッハ』を何処からとも無く取り出しながら、ウォーグレイモンに向かって剣を向けると、エネルギーを刀身に集め始めた。

「ふん。無様な戦いだけはするなよ」

「お前には言われたくはないわ」

スレイヤードラモンとブレイクドラモンが口喧嘩をしているのを見たウォーグレイモンは顔色を一切変えることもなく、両腕に装備しているドラモンキラーを構える。

「行くぞ」

「来い」

そう言うと、先にウォーグレイモンが仕掛けてきた。
瞬時にフラガラッハにエネルギーを集めているスレイヤードラモンの目の前に移動すると、右手のドラモンキラーでスレイヤードラモンを殴り付ける。

「ドラモンキラーー！！」

「グアッ！！クッ！！」

ウォーグレイモンの攻撃を受けたスレイヤードラモンは苦痛の声を上げるが、瞬時に表情を戻すと、フラガラッハをウォーグレイモンに向けて構える。
ウォーグレイモンも両腕に装備しているドラモンキラーをスレイヤ

ードラモンに向けて構える。

「今度は私の番だ！！」

今度はスレイヤードラモンの方から仕掛けてきた。
スレイヤードラモンはフラガラッハを構えながら、ウォーグレイモンに向かって突進すると、回転体術を使用しながら、それによって生まれた加速を使いウォーグレイモンの頭部に向かって右手に持っているフラガラッハを振り下ろした。

「喰らえ！！　壱の型！天竜斬波！！！！」

「フン！！」

スレイヤードラモンの天竜斬波をウォーグレイモンは難なく右に避けると、スレイヤードラモンの顔面に向かって鋭い右ハイキックを繰り出す。

「クッ！！」

「惜しいな……」

スレイヤードラモンは左手に持っているフラガラッハでウォーグレイモンの右ハイキックを何とか防御した。
それを見たウォーグレイモンは少し悔しそうな声を漏らした。

「其処だ！！」

「そう来ると思ったよ！！」

その隙にスレイヤードラモンは空いている右手に持っているフラガラッハをウォーグレイモンの左脇腹に向かって突き出すが、ウォーグレイモンは左腕に装備しているドラモンキラーを振り上げると、スレイヤードラモンの持っていたフラガラッハを弾き飛ばした。フラガラッハはスレイヤードラモンとウォーグレイモンのいる場所よりも遠くの地面に突き刺さった。

「其処までだ。秀人殿、スレイヤードラモン、お疲れ様」

「むむむ……　見事な戦いぶりだった」

「いえいえ。長引けば、僕も危なかったよ」

いつの間にか、模擬戦を見ていたコマンドラモン軍曹がそう告げると、ウォーグレイモンは一息ついて、スレイヤードラモンはフラガラッハを取りに行って、回収した。
その後で、ウォーグレイモンとスレイヤードラモンは仲良く会話を始めた。
どうやら、拳と拳を交わしあった友情が出来たみたいだ。

「すげぇ……　俺、いつも引き分けがやっとなんだよな……」

「これで分かっただろう。つまらない争いを止めよう」

ウォーグレイモンの実力を見て驚いているブレイクドラモンに龍之は言葉を掛けた。

「ふっ、ふん!!　俺なら勝てるもんね!!」

「どうだか……」

しかし、虚勢を張るブレイクドラモンを見て、龍之は呆れ果ててしまった。
それを聞いたスレイヤードラモンの表情が自然と厳しい物になった。
『今度は僕が相手になるけど？』
「ウォーグレイモン！？」
ブレイクドラモンの言葉を聞いたメルーガがブレイクドラモンと模擬戦をするみたいだ。
秀人の事情を知らないスレイヤードラモンは隣で驚いている。
「上等だ。さっさと来い！！」
「あっ、あの……　軍曹殿……　止めなくていいのですか？」
「問題ない。むしろ、好都合だ」
龍之は止めようとコマンドラモン軍曹に声を掛けるが、コマンドラモン軍曹は全く気にしなかった。
何か考えがあるのだろう。
「メルーガ、いいのか？　君らしくないよ」
『悪いね、秀人。オーグが頑張っているのに僕が怠けるなんて出来る訳がないじゃないか』
『秀人、こうなったメルーガはディアボロモンでも止められないよ』

どうやら、メルーガはオーグの戦いを見て、ハートに炎がついたみたいだ。
恐らく、彼のクールな瞳には紅蓮の炎が燃え滾っていることだろう。
「ウォーグレイモン！！！　スライドエヴォリューーーション！！」
ウォーグレイモンが叫ぶと同時にウォーグレイモンの体を青色の光が覆うと、ウォーグレイモンはメタルガルルモンへと姿を変えた。
「メタルガルルモン！！」
メタルガルルモンとブレイクドラモンはお互いに睨み合い、作戦を立てながら相手の隙を伺っている。
先に仕掛けてきたのはブレイクドラモンだった。
「デストロイドラッシュ！！！」
「そんな単調な攻撃！！」
ブレイクドラモンは左右のショベルアームをメタルガルルモンに向かって超高速で繰り返し叩きつけようとするが、メタルガルルモンは避けると、ブレイクドラモンの背後に回り込むと、三連装のミサイルランチャーから次々とミサイルを放った。
「クッ！！」
ブレイクドラモンは、防御をすることが出来ずに次々とミサイルを喰らった。
「やってくれるじゃねぇか……　インフィニティーボーリング！！

！」

後ろを向いてメタルガルルモンを睨みつけたブレイクドラモンは、体中のドリルを全稼動させると、メタルガルルモンに向けて放った。

「ガルルバースト！！」

メタルガルルモンは、空中に浮かび上がることで回避すると、全身に装備しているミサイルの照準をブレイクドラモンの武器のみに向けて、ミサイルを一斉に発射した。

「ぐあっ！！」

「おい！！　技名がメタルガルルモンＸの技とがぶっているんだけど！？」

武器が破壊されて戦闘不能になるブレイクドラモンを見ながら、龍之はメタな突っ込みをした。

「仕方ないだろう。だいだい原理は一緒だから……　そうすると、オーグもガイアフォースＺＥＲＯやポセイドンフォースが出来てもおかしくないことになるぞ？」

「そういう問題じゃないだろう！！！　それじゃＸバージョンが涙目になるだろう！！！」

面倒くさそうな表情で話すメタルガルルモンに龍之は再度メタな突っ込みをする。

「悔しいよ……　心の底から悔しいよ……」

「同じ『ダブル・エッジ』に負けるなんて……　しかも、エイリアスで同じロイヤルナイツの一員に……」

　メタルガルルモンと龍之が言い争いをしている時にスレイヤードラモンとブレイクドラモンはすすり泣いていた。
今まで幾多の戦いをくぐり抜けて来てここまで来たのに、つまらないことでいがみあって強くなることを見失っていたのだ。

「強くなりたいか？」

　すすり泣いているスレイヤードラモンとブレイクドラモンの目の前にコマンドラモン軍曹が立つと、コマンドラモン軍曹が言った。

「勿論です！！　エグザモンにジョグレス進化出来るように強くなりたいです！！　私たちにもプライドがあるんです！！」

「本気で強くなりたいんだな？　ジョグレス進化出来るようになりたいんだな？」

「はい。このまま負けっぱなしじゃ終われません！！　エグザモンにジョグレス進化出来るようになりたいです！！　彼らを見返してやりたいです！！！」

　すすり泣きながらもスレイヤードラモンとブレイクドラモンは決意の声を上げた。
それを聞いたコマンドラモン軍曹はスレイヤードラモンとブレイクドラモンの肩に手を置いた。

「それなら、私が鍛えてやろう」

『ありがとうございます！！！』

「どうやら、君のおかげで少しは変われそうだね」

「いやいや。そんなことは……」

龍之はメルーガに感謝すると、頭を下げたが、メルーガは謙遜している。

しかし、彼は龍之達が後の戦いに強力な味方になることにこの時は気がつかなかった。

「秀人殿、先ほどはありがとう。私でも出来なかったことを成し遂げるとは……」

「いえいえ。自分は出来ることを精一杯やっただけであります！！！」

コマンドラモン軍曹の教官室で、コマンドラモン軍曹と秀人は話をしていた。

「二日後、君はあるデジモンと戦ってもらう」

「はい！？」

「実は私を以前助けてくれた恩人のデジモンに君のことを伝えたら、ぜひ戦ってみたいと喜んでいた。なので、彼と模擬戦だ。場所はここから近くにある草原だ」

「ところでそのデジモンは一体誰なんですか……？」

コマンドラモン軍曹は秀人に明日の予定を告げると、秀人はそのデジモンが一体誰なのか首を傾げた。

「ああ。彼は君と同じ究極体だ。君の経験と実力を上げるには最適だろう」

そう言いながら、コマンドラモン軍曹はそのデジモンの写真を見せた。

「あははは……　オーグ、明日は君の日だよ……」

『フフフ……　彼とは一度戦ってみたかったんだよね……』

『オーグ、良かったね。また一人、友達が出来るね』

秀人とオーグとメルーガは、口々にそのデジモンの写真を見て、頷いた。

二日後、コマンドラモン軍曹は龍之とスレイヤードラモンのために特別訓練の教導をしていた。

ちなみに、秀人はコマンドラモン軍曹の命の恩人であるデジモンと戦うために近くにある草原に向かって、今頃は笑いながら戦っているだろう。

「……トロトロ走るんじゃない！　このクズ共っ！！全く何たる様

だ！！　貴様等は最低のウジ虫だ！！　ダニだ！！　この世界で、最も下劣な生き物だ！！　」

野戦服姿で丸太を担いでいる龍之とスレイヤードラモンにコマンドラモン軍曹は次々と罵倒の言葉を浴びせる。
しかも、時おり、メモ帳に目を落としながら『教育上不適切な表現』かつ『放送規制に確実に引っかかる言葉』を機関銃のように連発する。

「いいか！！　よく聞けウジ虫共！！　私の楽しみは貴様等が苦しむところを見る事だ！！　爺の●●●●みたいにひいひい言いおって、みっともないと思わんのか！！！　文句があるならこの場で●●●●をこいて●●●●してみせろっ！！　●●●●持ちの●●●●の腐った物を！！　●●垂れ流すんじゃないッ！！糞共ッ！！」

コマンドラモン軍曹も龍之が着ている野戦服を着て、『アメリカ海兵隊式ののしり手帳』と書かれたメモ帳を片手に龍之とスレイヤードラモンと一緒に併走している。
本当はこの場にブレイクドラモンもいるはずなのだが、体の構造上、この訓練が出来ないので別メニューをしているが、今頃本人は龍之とスレイヤードラモンと同じ思いをしているだろう。

「ぐはぁ！！　もう駄目だ……」

その時、コマンドラモン軍曹の目の前で龍之が石につまずいたのか派手に転倒して、丸太を放り出して地面に身を投げ出す。
コマンドラモン軍曹は龍之に向かって歩み寄ると、右足で顔面を思いっきり踏みつけた。

「どうした龍之殿。もうギブアップか？　もう走れないのか？　秀

人殿と違って、貴方は本当にクズだな。秀人殿はジョグレス進化出来るのに貴方は出来ない。恥ずかしくないのか？」

「ぜぇ……ぜぇ……」

「しょせん貴方の根性などそんなものだ。だから、貴方のスレイヤードラモンとブレイクドラモンは昨日敗北したのだ」

「おい……流石に言っていいことと悪いことくらいあるだろう！！！」

涙目で殴りかかってきた龍之を見たコマンドラモン軍曹は素早く対処した。

どこからともなくＭ１６を取り出すと、トリガーを押した。

すると、そこからゴム製の砲弾が飛び出して、龍之の胴体に直撃した。

「ふん。何度でも言ってやろう。貴方のスレイヤードラモンとブレイクドラモンは弱い。分かったらとっとと走れっ！　貴方には私に楯突いた褒美として丸太を担いでまたプラス１０周だっ！！」

「ちくしょお……ちくしょおおおおおおおおおおおおおおっ！！」

龍之はまた丸太を担ぐと、必死の形相で坂道を駆け上がっていった。

コマンドラモン軍曹は厳しい目つきで龍之とスレイヤードラモンを一瞥すると、医務官であるコマンドラモンの所へ歩いてきた。

「あっ、あの……軍曹殿？」

「何でありましょうか？　医務官殿？」

「いっ、医学的に見ても貴方の訓練が、正しいとは思えないので止めたいのですが……」

「確かに医学的に見るとそうなのかもしれません。しかし、現実世界（ルド）（リアルワー）の人間の軍人はこのようなことをしているのを知りました。私もこの訓練は未知数な部分が多いと思いますが、彼らの問題は技術・能力以前です。もし、彼らがこの訓練を乗り越えると、自信と気迫、それに一緒に乗り越えたという連帯感は身につくはずです」

胸を張って言うコマンドラモン軍曹を見て、諦めの境地に達したコマンドラモン医務官はコマンドラモン軍曹に念を押した。
ちなみに、コマンドラモンは自室にあるパソコンのインターネットの某動画サイトのとあるアニメを見て、この訓練をやることを決めたらしい。
そして、その時に、とある登場人物の声と自分の声が何だか同じに聞こえることに違和感を感じたらしい。

「そうですか……しかし、いざとなればドクターストップを出しますからわかりましたね？」

「了解しました」

敬礼をして答えるコマンドラモン軍曹の元に全身を戦闘スーツで身を包み、ゴーグルのような物で目を覆い、両肩には刃物のような物を装備しているサイボーグ型デジモンーシールズドラモン食堂長が来た。

「コマンドラモン軍曹、食堂の皆様で龍之殿とスレイヤードラモンのためにおにぎりと豚汁を作りました。そろそろお腹もすいた頃ですし、どうでしょうか？」

「そうですか。ん～どうしようか……」

「どうしましたか？　お昼ご飯はもう既に済ませましたか？」

「いや、そうではありません。今、上等な食事を与えて良いのだろうかと、考えていて……」

「わざわざ早起きして作ったのにいらないなんて言わないでください……」

「そうですね。失礼しました」

シールズドラモン食堂長に頭を下げたコマンドラモン軍曹は走っている龍之とスレイヤードラモンの方に顔を向けると、声を上げた。

「喜べ！！！　糞共！！！　食堂長が食事を持ってきた！！三十三時間ぶりの食事だぞ！！終わった者から食べてよし！！」

コマンドラモン軍曹の言葉を聞いた龍之とスレイヤードラモンは一度立ち止まると、目をギラリと輝かせて、いきなり猛獣のような猛スパートをかけた。

『さっ、三十三時間！？』

同じくコマンドラモン軍曹の言葉を聞いたコマンドラモン医務官とシールズドラモン食堂長は呆然となった。

「いいか！　今のお前たちは人間以下だ！　名も無き●●●●だ！　私の訓練に生き残れたその時にお前たちは初めて人間となる！　それまで貴様らは、●●●●同然の存在だ！」

食事を終えて休憩を挟んだ後に、訓練は再開された。
次は６０センチ程度の棒を両手で持ちながら背面ほふく前進をする訓練だ。
ただし、頭上にはマス目のように張り巡らされた有刺鉄線があるので、頭上に気を付けなければならない。
ここからは、龍之とスレイヤードラモンの体の大きさがあるので別々になっている。

「私はお前たちを憎み、軽蔑している。私の仕事はお前たちの中から、●●●野郎を見つけ出して、切り捨てることだ！　勝利の足を引っ張る●●●野郎は容赦しないから覚えておけ！」

その後は、コマンドラモン軍曹特製の龍之は１０メートルの、スレイヤードラモンは２０メートルの（この作品のスレイヤードラモンはだいだいウォーグレイモンと同じくらいの大きさ）塀を乗り越える訓練だ。
塀と言っても足をかける場所も手で掴む場所もあるので、普通に頑張れば出来るレベルなので、これはするすると出来た。

「笑うことも泣くことも許されない！　お前は人間ではない！　殺戮のためのマシーンだ！！殺せなければ存在する価値は無い！　隠れて●●●てるのがお似合いの●●●野郎に過ぎない！」

次は龍之とスレイヤードラモンにコマンドラモン軍曹達が普通に使っている銃剣を持たせて、藁人形に突き刺す訓練が待っていた。ちなみに、藁人形の顔写真は何故かミレニアモンだった。

「わざと負けて目立ちたいのか！　痛い振りして同情を引きたいのか！　この負け犬根性のゴミ溜め野郎どもが！　父親の●●●たシーツのシミになって、母親の●●●に残ったのがお前たちだ！」

ミレニアモンがいい感じで穴だらけになったところで、次は棍棒でどつき合いの訓練だ。

なお、棍棒の先にはクッションを入れてあるので致命傷にはならない。

でも、これが結構痛いのだ。

龍之もスレイヤードラモンも、普段のことを忘れたかのようにただ生き残るために目をぎらつかせながら相手を叩きのめそうとする。

しかし、スレイヤードラモンが自身の必殺技の原理を利用した攻撃を繰り出そうとしたので、コマンドラモン軍曹のＭ１６の餌食になってしまい、一時中断のハプニングもあった。

鈍い音が響き渡る中、それでも誰一人それをやめようとはしない。

「とろとろ走るなこの●●●が！　泣き言を言うのならば、この場で●●●流し込むぞ！！　本当に与えられた職務も課題もロクにクリア出来ない人間以下の●●●だ！！」

最後はフルマラソン、もちろん４２，１９５ｋｍだ。

ちなみに、完走しないと今日はご飯が出ない事になっているのか、龍之とスレイヤードラモンはかなり必死に走っている。

「お前たちの彼女はそのデジヴァイスと武器と仲間だけだ！　ケツ

がデカいだけの●●●は、お前たちには必要ない！！　そのボールを熟れた●●●だと思って、精一杯●●●してやれ！」

フルマラソンはコマンドラモン軍曹の予想よりも早い夕方くらいに終わった。
なので、次は龍之とスレイヤードラモンにあらかじめ泥だらけにしてもらったデジヴァイス０１とフラガラッハを磨かせる。

「フフフ……とっても綺麗だよ、イヤード、ピカピカにしてあげるよ、クドラ……」

龍之は両腕に付けていたデジヴァイス０１を愛情を込めながら磨いている。
ちなみに、龍之の右腕のデジヴァイス０１からスレイヤードラモン、左腕のデジヴァイス０１からブレイクドラモンを召喚している。
ちなみに、秀人のオーグとメルーガに対抗したのか、龍之はスレイヤードラモンのことをイヤード、ブレイクドラモンのことをクドラを呼ぶことを決めたみたいだ。

「フフフ……最高だよ、龍之……」

一方のスレイヤードラモンも自身の武器であるフラガラッハを愛情を込めながら磨いている。
しかも、フラガラッハに自身のテイマーの名前を付けている状況だ。

「軍曹殿、ただ今戻りました」

「おお、戻ったか。お疲れ様、秀人殿」

龍之とスレイヤードラモン、ブレイクドラモンの訓練終了を宣言してから十分後、秀人が究極融合進化したオメガモンが戻ってきた。オメガモンはコマンドラモン軍曹の目の前にゆっくりと降り立つと、頭を垂れて今日の出来事を報告した。

「軍曹殿、報告します。私、藤本秀人は●●●●●●●—●●●●●と戦いましたが、その途中で黒いオメガモンが放った刺客であろう、2体のデジモン、ムルムクスモンとオニスモンが乱入したため、彼と協力してそのデジモン達を撃破しました」

「うむ、報告を受理した。何か言いたいことがあれば何でも聞くぞ」

「はい。今日は合計で3体の究極体デジモンと連戦で戦いましたが、体力の重要性と自分の経験不足をその身を持って痛感しました。次の戦いに向けて、これらの問題を少しでも解決できるように精進します」

オメガモンが宣言すると、コマンドラモン軍曹は満足そうな表情をしながら、秀人に話を始めた。

「そうだ。聞くのも嫌かもしれないが、軍隊、ましてや戦争において、体力は最も重要だ。とある現実世界（リアルワールド）では、君と互角に渡り合える可能性を持った女性が基礎鍛錬を怠って一度潰れたという間抜けな話もあるからな。しかし、彼女はリハビリを経て復活したが、私には彼女が馬鹿としか見えない。ちなみに、今日、龍之殿とスレイヤードラモン殿がやった訓練を後日君もやってもらおう」

「承知しました。しかし、軍曹殿がおっしゃられた女性とは一度会って戦ってみたいです。最も、負けるつもりはさらさらございませ

んが」

「ははは……　君はなかなかのビッグマウスを持っているようだな」

「ビッグマウスではございません。私はただ、出来ることは出来る、出来ないことは出来ないと胸を張って言えるような聖騎士を目指しているだけです。では、これにて失礼します」

「そうか。しっかり休むんだぞ」

言い終えたオメガモンは、一礼してマントを翻すと、自分の自室に戻っていった。

その日の夜空は、まるで秀人と龍之の頑張りを褒め称えているような星空だった。

ちなみに、後日秀人も龍之達が受けた訓練を受けたが、本人曰く、“凄い疲れたが、何だか自信がついたような気がする。”とのことだったらしい。

## 第４話　Ｄ－ブリガードの章　やりすぎな訓練とテイマーの悩み（後書き）

登場デジモン紹介

コマンドラモン
世代／成長期　属性／ウィルス種　種族／サイボーグ型
必殺技／Ｍ１６アサシン、ＤＣＤボム
機械化旅団「Ｄ－ブリガード」の歩兵デジモン。「Ｄ－ブリガード」は竜型サイボーグデジモンで構成された機械化旅団であり、決して表沙汰になることのないミッションに投入される特殊部隊である。コマンドラモンの体表は特殊テクスチャー加工が施してあり、周囲の色をリアルタイムに判断し、あらゆる迷彩パターンを表示することが可能となっている。そのため、ほとんどの「目標」はコマンドラモンの存在に気が付くことなく葬られることが多いという。必殺技は携帯したアサルトライフルから放つ『Ｍ１６アサシン』と小型爆弾『ＤＣＤボム』。

シールズドラモン
世代／成熟期　属性／ウィルス種　種族／サイボーグ型
コマンドラモン１００体をふるいに掛ける特殊選抜試験「セレクション－Ｄ」を合格した１体のみシールズドラモンへ進化することが出来るといわれている。目視で捕らえることが不可能に近い速度での移動が可能であり、迷彩機能や銃などは装備せず、体術のみで「目標」をしとめる能力を持つ。主に暗殺を任務としている。必殺技は、極限まで研いだナイフの一撃『デスビハインド』と、一瞬のうちに相手の急所を計測する『スカウターモノアイ』。

テイマーとパートナーデジモンの紹介は溜まったらしようと思います。

次回予告

龍之達が訓練を行なっている頃、秀人はあるデジモンと戦っていた。
そして、戦いの最中に思わぬデジモンの乱入が入る。
漢と漢の真剣勝負を邪魔をされたことに2大究極体デジモンの怒りが爆発する！！

次回、デジモンアドベンチャー　ΩテイマーＺＥＲＯ

激突！！　漆黒と黄金の竜戦士！！

皆さんも漢と漢の真剣勝負の邪魔だけはしないように気を付けましょう。

## 第5話　Ｄ－ブリガードの章　激突！！　漆黒と黄金の竜戦士！！（前書き）

何だか小説の話数を重ねるごとに文字数が減っていくのと文章の書き方が単調になってしまう気が……
細かく書きすぎなのか……
それでも頑張ります。

## 第5話　Ｄ－ブリガードの章　激突！！　漆黒と黄金の竜戦士！！

美藤龍之と彼のパートナーデジモンであるスレイヤードラモンとブレイクドラモンがコマンドラモン軍曹の訓練を受けている頃、秀人は左腕のデジヴァイス０１を頼りにコマンドラモン軍曹からあらかじめ言われた草原に向かって歩いていた。

『秀人、本当にこの道で合っているの？　草原は見えないけど……』

「ああ。確か、この辺りのはずなんだけどな……」

『でも、草原がこんな山奥にあるのかな？』

「そうだよな～　一体どこにあるのか……　あった。でも、まだ彼は来ていないな」

秀人とオーグとメルーガが会話をしていると、目的地である草原にたどり着いた。
秀人は足を踏み入れると、軽く伸びをして大きく息を吸って吐いた。

「よし、まだ彼も来ていないことだし、戦いの前に、まずは準備体操をしますか」

秀人は左腕に付けているデジヴァイス０１のキーボードを叩いて某動画サイトにアクセスすると、ラジオ体操の項目を検索した。
そして、目的の動画を見つけて再生を開始すると、音楽に合わせながら体操を始めた。

『そう言えば、僕たちもペンデュラムの中でラジオ体操していたよ』

「えっ、そうなの！？」

『うん。デジモンには元々そういうの無いからね。秀人が小学生の夏休みでペンデュラムを一緒に持っていくから僕たちもやっていたんだ。デジモンはよく凄いと言われるけど、人間も凄いんじゃないかな？』

「まぁね……　所詮は、人間もデジモンも根本は一緒だからね……」

秀人は、オーグとメルーガと会話をしながら音楽に合わせて体を動かす。

四足歩行であるメルーガがどのようにラジオ体操をするのかは読者のご想像にお任せしよう。

秀人がラジオ体操を終えて、ジョギングをしようかと思っていた時、黒の体に黒い頭部に胸当てを装備し、両手に黒い手甲を装備し、そして、金色の髪を備えた竜人型デジモンーブラックウォーグレイモンが草原に足を踏み入れた。

「遅れてすまない。俺はブラックウォーグレイモン。話はコマンドラモンから聞いている。今日は思う存分、俺の相手になってもらおう」

ブラックウォーグレイモンは、秀人に挨拶をした。

ブラックウォーグレイモンの目が笑っていることから、よほど強い相手と戦いたかったのだろう。

「初めまして、ブラックウォーグレイモン。僕は藤本秀人です。ウォーグレイモンとメタルガルルモンと融合したエイリアスです。今日はご迷惑をおかけしますが、何卒よろしくお願いします」

秀人もブラックウォーグレイモンに丁寧に挨拶をした。
何故、丁寧に挨拶をしているのかと言うと、例え相手が誰であっても礼を欠く事はあってはならないと秀人は考えているからだ。

「まず最初に言っておこう。俺は“あのブラックウォーグレイモン”ではない。ブラックアグモンから進化したブラックウォーグレイモンだ。あと、名前が長いからブラックと呼んでくれ」

「それじゃ、始めますか！！　オーグ、行くぞ！！」

『おう！！』

秀人は左腕に付けているデジヴァイス０１を胸に当てて、自身の体をデータ化しながら叫ぶ。
ブラックウォーグレイモンは初めて見る現象なのか、秀人をまじまじと見つめている。

＞＞ＭＡＴＲＩＸ－ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ＜＜

「マトリックスエボリューション！！」

左腕のデジヴァイス０１から電子音声が響くと同時に、秀人はオレンジ色の光に包まれると、ウォーグレイモンに究極進化した。

「ウォーグレイモン！！！」

「コマンドラモンから聞いて半信半疑だったが、俺と同じウォーグレイモンに進化出来るとは……」

「嫌なら変えるよ。メタルガルルモンでも君とは十分に渡り合えるけど」

「問題ない。自分で育てたんだろう？　胸張って進化してもいいのでは？」

ウォーグレイモンの姿を見たブラックウォーグレイモンは、面白そうにウォーグレイモンを見つめながら、感想を述べた。
彼は、今まで自分と同じウォーグレイモンを見たことがなかったのだ。

「兎に角、始めよう。俺の闘争本能が強いデジモンとの戦いを欲しているんだ」

「ははは……そうか。　お手柔らかに」

ウォーグレイモンとブラックウォーグレイモンはお互いに相手を睨みつけながら、両腕に装備しているドラモンキラーを構える。

「ウオォォォォーーーー！！！」

「ハアァァァァァァァッ！！」

ウォーグレイモンとブラックウォーグレイモンは同時に突撃を開始すると、同時に相手に向かって右手に装備しているドラモンキラーを突き出した。

『ドラモンキラーーー！！！！』

二つのドラモンキラーが激突しあった瞬間に、凄まじい衝撃波が

爆裂した。
それを見た秀人はウォーグレイモンの内心で驚愕していたのは言うまでもないだろう。
究極体デジモンが規格外だとよく言われる理由をその身を持って経験したからである。

「うぉ！？（なっ、何て威力なんだ！！）」

「もらった！！」

その衝撃波の威力に耐え切れなかったウォーグレイモンは僅かに体のバランスを崩してしまい、一方で衝撃波の威力を耐え切ったブラックウォーグレイモンはその隙を逃さずにウォーグレイモンの胴体に向かって右回し蹴りを撃ち込む。

「フンッ！！」

「クッ！！」

ウォーグレイモンはブラックウォーグレイモンの放った右回し蹴りを何とか左腕に装備しているドラモンキラーで防いだ。

「ムン！！」

「クッ！！」

右足を戻したブラックウォーグレイモンが今度は渾身の力を込めて突き出した右腕に装備しているドラモンキラーをウォーグレイモンが何とか避けると、今度はウォーグレイモンが右ハイキックを放とうとする。

しかし、それを見たブラックウォーグレイモンは左腕に装備しているドラモンキラーで防ぐことで、ウォーグレイモンの右ハイキックを防御した

（やはり、パワーと経験の面で考えると不利だな……　それなら、正々堂々とぶつかりあって、精一杯やってみよう！！）

一連の行動を見て、自身が不利だということを認識して決意を固めた秀人ことウォーグレイモンは両足に力を込めて跳躍すると、ブラックウォーグレイモンの真上を飛びこしてブラックウォーグレイモンの背後へと着地する。
余談だが、進化しても秀人とオーグ、メルーガの人格はきちんと存在しているので、彼らの絆は時として強大な力を生むこともある。

「何？」

自身の背後に着地したウォーグレイモンに気がついて背後を振り返ったブラックウォーグレイモンの顔の左側に向かってウォーグレイモンは右ハイキックを食らわした。

「ハァ！！」

「グォッ！？」

ウォーグレイモンの右ハイキックを喰らったブラックウォーグレイモンはその威力に思わず後ずさった。

「ダァ！！」

「グゥ！！」

続けてウォーグレイモンはブラックウォーグレイモンの顔の右側に向かって先程の右ハイキックよりも鋭い左ハイキックを繰り出した。
ブラックウォーグレイモンは、その攻撃に耐え切れずに吹き飛ばされて地面に叩きつけられた。
その衝撃はウォーグレイモンにも届く程凄い衝撃だった。

「ウオオオオーーーー！！！　ブラックトルネーーーーード！！！」

立ち上がったブラックウォーグレイモンは両腕のドラモンキラーを頭上で合わせて高速回転しながら、自身の体を漆黒の竜巻に変えると、ウォーグレイモンに向かって突撃する。

「クッ！！　ブレイブトルネーーード！！！」

それを見たウォーグレイモンも両腕のドラモンキラーを頭上で合わせて高速回転しながら、自身の体を黄金の竜巻に変えると、ブラックウォーグレイモンに向かって突撃する。

「ウオォォォォーーーー！！！」

「ハアァァァァァァァッ！！」

二つの竜巻は空中で凄まじい速度で回転しながら真正面から激突すると、お互いを貫こうと更に力を込めた。
すると、竜巻の速度は上がり、大きさも自然と大きくなっていく。

「グワァ！！」

「グォ！！」

ウォーグレイモンとブラックウォーグレイモンの力は拮抗しているのか、二つの竜巻は消滅すると、ウォーグレイモンとブラックウォーグレイモンは地面に向かって真っ逆さまに墜落した。

「クッ！！」

「ガハァ！！」

ブラックウォーグレイモンは落ちていく途中で姿勢を変えたおかげで着地に成功したが、一方のウォーグレイモンは衝撃が大きかったのかそのような行動を取ることが出来ず、地面に真っ逆さまに墜落して物凄い衝撃を体全体に感じた。

「もらった！！」

「グワァァァァァァッ！！」

ブラックウォーグレイモンは衝撃のダメージで体が痛むことを気にせずに何とか立ち上がろうとしているウォーグレイモンの目の前に移動した。
それと同時に、左手でウォーグレイモンの首を掴むと、力を込めて絞め上げる。
ウォーグレイモンはそれによって苦痛の声を辺りに響かせる。

「喰らえ！！」

「なっ！？」

ブラックウォーグレイモンに首を絞められていることで両腕をだらんと下げていたウォーグレイモンは、両腕を上に揚げると両手の間にバスケットボールくらいの大きさの黄金のエネルギー球を作り出した。
そして、ウォーグレイモンはそのままエネルギー球をブラックウォーグレイモンの顔面に向けて振り下ろした。
今の行動は完全に予測できなかったブラックウォーグレイモンはウォーグレイモンを掴んでいた左手をすぐに離すと、エネルギー球を何とか避けた。

「ムッ！！」

「ウオォォォーーーー！！！ドラモンキラーー！！」

ウォーグレイモンの次の行動を見極めていたブラックウォーグレイモンに向かって、ウォーグレイモンは右腕のドラモンギラーを突き出した。

「クッ！！」

その攻撃に対してブラックウォーグレイモンは瞬時にかわせないと判断すると、左腕のドラモンキラーでウォーグレイモンのドラモンキラーを受け止める。

「そこだ！！！」

「グウッ！！」

ウォーグレイモンの胴体をブラックウォーグレイモンは左回し蹴

りで蹴り飛ばすと、ウォーグレイモンは僅かに後方に下がってしまった。
ブラックウォーグレイモンは両手の間にエネルギー弾を作り上げると、連続でウォーグレイモンに向かって撃ち出した。

「ウォーブラスターー！！！」

「ムムッ！！　ブレイブシールド！！！」

迫り来るウォーブラスターに対して、ウォーグレイモンは背に在るブレイブシールドを両手に装着し、前方に向かって合わせることでウォーブラスターを防いだ。
そして、ウォーグレイモンはエネルギー弾が止むと同時に、ブレイブシールドを再び二つに分けて背中に戻した瞬間に、ブラックウォーグレイモンがウォーグレイモンの目の前に姿を現す。

「なっ！？」

「ドラモンキラーー！！」

ウォーグレイモンの胴体に向かって、ブラックウォーグレイモンは右腕のドラモンキラーを突き出した。

「ガハッ！！」

それによってウォーグレイモンの胸当てを傷つけられたが、ウォーグレイモンはダメージを気にせず、右腕のドラモンキラーを突き出した。

「ドラモンキラーーー！！！」

「グアアッ！！」

ウォーグレイモンの攻撃を食らったブラックウォーグレイモンは、先ほどのウォーグレイモンと同様に後方へと吹き飛んだ。しかし、瞬時に空中で体勢を整えると、上手に地面に着地した。それと同時に傷ついた胸当てを見るとすぐに、ウォーグレイモンの方に顔を移した。

「やるものだな。流石はコマンドラモンが言っていただけある」

「そっちこそ、冗談抜きに強いよ。でも、こんなもんじゃないだろう？　こっちはまだまだ行けるぞ！！」

「それなら、もっと楽しませてもらうぞ！！！」

そう言うと、ウォーグレイモンとブラックウォーグレイモンはドラモンキラーを構えながら同時に突撃を開始した。

『ドラモンキラーーー！！！！！』

2体のウォーグレイモンのドラモンキラーが突き出され、二つのドラモンキラーが激突しあった瞬間に、凄まじい衝撃波が発生した。今度は衝撃波に耐えきったウォーグレイモンを見て、目を細めたブラックウォーグレイモンは、ウォーグレイモンの胴体に向かって左回し蹴りを放った。

「さっきと同じ手は効かないぞ！！」

「お前、頭悪いな。最後まで何が起こるのかわからないのが人生だ

ろう？」

ウォーグレイモンは右腕に装備しているドラモンキラーで防いだが、ブラックウォーグレイモンはいつの間にか両手の間に作り上げていたエネルギー弾をウォーグレイモンの頭部に向かって、両腕を振り下ろすことで食らわせた。

「ガハッ！！　まだまだ！！」

「チィッ！！」

ウォーグレイモンは頭に走った苦痛によって苦しげな声を上げたが、ブラックウォーグレイモンの胸当てに向かって右ミドルキックを撃ち込み、ブラックウォーグレイモンとの距離を開くことに成功した。

「そろそろ決着をつけるとするか」

「望むところだ！！」

そう言うとブラックウォーグレイモンは、負の力を両手の間に集中させ始める。
それと同時にウォーグレイモンも大気中に存在しているエネルギーを両手の間に集中させ始めると、ブラックウォーグレイモンは赤く光る巨大なエネルギー球を、ウォーグレイモンはオレンジ色に輝く巨大なエネルギー球を作り出し、同時に相手に向かって投げ付ける。

『ガイア！！　フォーーーーースッ！！！』

負の力を凝縮したガイアフォースと、大気中のエネルギーを凝縮

したガイアフォースは真正面から激突し合い、互いを撃ち破ろうとぶつかり合うが、同時に爆発を起こし、投げ付けたブラックウォーグレイモンとウォーグレイモンに同等に衝撃波が襲ってくる。
しかし、二体は向かって来る衝撃波などには一切構わずに飛び出し、爆煙を吹き散らしながら、黄金と漆黒の竜巻になってぶつかり合う。

「ブラックトルネーーードッ！！」

「ブレイブトルネーーードッ！！」

黄金と漆黒の竜巻はお互いにぶつかり合うと、元の姿であるウォーグレイモンとブラックウォーグレイモンに戻ると、地面に着地した。
必殺技のぶつかり合いでは決着がつかなかったみたいだ。

『ドラモンキラーーーーー！！！！！！』

ウォーグレイモンは紅蓮の炎を纏わせたドラモンキラーを、ブラックウォーグレイモンは暗黒の炎を纏わせたドラモンキラーをそれぞれ同時に突き出そうとしたその時だった。

「フハハハ！！！　見つけたぞ！！！」

「何！？」

「誰だ！！！」

突然、上空から高笑いが聞こえてきたので、ウォーグレイモンとブラックウォーグレイモンが上空に目をやると、薄い青肌をして、頭に緑色の頭巾のような物を巻いて、巨大な赤く禍々しい翼を生や

して、獣を模した禍々しい鎧を身に纏った魔王型デジモンームルムクスモンだった。
しかも、巨大としか言えないほどの巨大な鳥―オニスモンに乗っての登場だ。

「私はムルムクスモン。オメガモンズワルト様の命令で、エイリアス、藤本秀人の抹殺に来た。さぁ、何処にいるのか教えてもらおう」

「（敵にはもう知られているというわけか……）……ブラック？」

「……おい、ムルムクスモン」

ムルムクスモンの話した内容を聞いて焦りを感じたウォーグレイモンだが、ブラックウォーグレイモンの様子がおかしいことに気がついた。
ブラックウォーグレイモンは非常に不機嫌そうな顔をしながら、辺りに怒りのオーラを撒き散らしている。
しかも、隣にいたウォーグレイモンが思わず後退りをしているほどだ。

「何だ、ブラックウォーグレイモン？」

「フフフフ……　お前はこの状況を全く理解していないわけだな、ムルムクスモン？」

「この状況？」

ブラックウォーグレイモンの様子を見たムルムクスモンは何となく嫌な状況にいることを悟りながらも、ブラックウォーグレイモンの話に耳を傾ける。

その証拠に、ブラックウォーグレイモンの声は低くなっている。

「今、俺たちは真剣勝負をしていた。それも重要な真剣勝負だ。友人に紹介されたデジモンと俺は今戦っていた」

「はぁ……」

「彼は、“あのブラックウォーグレイモン”みたいな状態なんだが、誰かを救おうと、誰かを守ろうと歯を食いしばって戦っている凄いデジモンだ。お前は、その人の努力を踏みにじろうとしているわけだな？」

「そ……そうなります……」

ブラックウォーグレイモンの勢いに逆らえず、気が付けばムルムクスモンは気を付けをして、額に大汗を掻いている。
彼の本能はこの場から逃げるべきだと伝えているが、体が反応しないのだ。

「うむうむ。俺は今わかったよ。謝罪も何もない。お前にある物は悪意だけということがな」

「ブッ……　ブラックウォーグレイモン？」

「悪いが、お前は真剣勝負の邪魔をした。気の毒だが、死んでもらおう。ムルムクスモン、オニスモン。グオォォォォォォォッ！！ガアァァァァァァァァァァァァァーーーーーーーー！！！！！！」

『ッ！！』

突如として上がったブラックウォーグレイモンの咆哮と共に爆発した大地を目撃したムルムクスモンとウォーグレイモンは目を見開くが、ブラックウォーグレイモンは構わずに咆哮を上げ続けながら、全身から圧倒的な力を放ち続ける。

（こ……これがブラックウォーグレイモンの真の力……？）

（オーグ、彼に勝てる確率は？）

（５０％も無いね、いや……僕一人だとそもそも勝率があるのかどうかすらわからないよ……　オメガモンなら勝てる可能性は高いけどね）

ブラックウォーグレイモンの真の力を見たウォーグレイモンの内部に存在している秀人、オーグとメルーガは恐る恐る会話をする。今のブラックウォーグレイモンを倒すにはオメガモンに究極融合進化するしかないと彼らは判断した。
それだけ、ブラックウォーグレイモンの怒りが激しいものだと彼らは理解した。

「ウォーグレイモン、お前はオニスモンをやれ！！！　お前には切り札がある！！　俺はムルムクスモン……いや、俺を苛立たせるだけの“敵”をやる！！」

「分かった！！　何かあれば援護に回るぞ！！」

「気遣いはありがたいが、今回は要らないな。　ムルムクスモン如き、俺一人で十分だ」

「ふっ、無理するなよ」

「お前もな」

ブラックウォーグレイモンは殺意に満ちた瞳をムルムクスモンに向けると、両手の間に巨大な赤いエネルギー球を作り出しながら、その場から浮かび上がると、上空にいるムルムクスモンに向かってエネルギー弾を全力で投擲する。

「ガイアフォーーーーースッ！！！」

「グウッ！！！」

ムルムクスモンはオニスモンから離れることでガイアフォースを避けたが、自分に向かって迫るブラックウォーグレイモンを見ながら直ぐ様構えを取ると、二人は互いに睨み合い空中で殴り合いを始めた。

「オォォォォォォォーーーーーーーー！！！！！」

「ヌオォォォォォォォォーーーーーーーー！！！！！」

一方のウォーグレイモンは言うと、ブラックウォーグレイモンがガイアフォースを投擲したのを見ると、オニスモンと戦うためにオメガモンへと究極融合進化した。

「ウォーグレイモン！！！　究極融合進化！！！」

ウォーグレイモンを中心に巨大な光の柱が発生すると、中からオメガモンが姿を現した。

「行くぞ！！」

オメガモンは大きく息を吸って吐くと一言気合を込めたと同時にオニスモンに向かって超音速で飛び立った。

「それにしても随分と大きなデジモンだな……　リヴァイアモンや四聖獣はオニスモンよりは大きいとは思うけど……」

オニスモンの姿を近くで見たオメガモンは、オニスモンの巨大さに感嘆を交えたような声を上げた。
オニスモンの大きさは軽く見ても、ＳＦ映画に登場する空中戦艦に匹敵するほどの大きさなのだ。
オニスモンは自分に向かって来るオメガモンを見ると、自身の巨大な翼を羽ばたかせて嵐を巻き起こした。

「テンペスト！！」

「ウオオォォォォォォーーー！！！！！」

オメガモンは左手に装備しているグレイソードを横なぎに振ることでオニスモンの起こした嵐を相殺した。
オメガモンは続けて右手に装備しているガルルキャノンの照準をオニスモンの右翼に向けると、ガルルキャノンから圧縮エネルギー弾を撃ち出した。

「ガルルキャノン！！」

「ギエアッ！！」

オメガモンがガルルキャノンから撃ち出した砲撃はオニスモンの右翼に当たり、オニスモンは苦痛の声を上げた。
そしてオニスモンの動きが止まったことを確認したオメガモンは、瞬時にオニスモンの顔の前に現れると、次々とグレイソードで斬り付けながら、オニスモンの顔を傷つける。

「ハアァァァァァァーーー！！！　ソード・オブ・ルイン！！！」

「ギエェェェェェーーーー！！」

オメガモンの怒涛の攻撃によってオニスモンは苦痛の叫びを上げながら、オメガモンから逃げようとするが、オメガモンは瞬時にガルルキャノンの照準をオニスモンの左翼に向かって放った。

「ガルルキャノン！！」

「ギエェェェェェーーーー！！」

オメガモンの放ったガルルキャノンを受けたオニスモンは苦痛の声を上げながら、地面に向かって墜落を始めると、オメガモンは右手のガルルキャノンの砲口にエネルギーを集束させると、そのまま集束砲撃を撃ち出した。

「オメガブラスト！！！」

「ギエアァァァァァーーーーー！！！」

オメガモンが放ったオメガブラストを受けると、オニスモンは苦痛の声を上げながら消滅した。
その後、オニスモンのデータ粒子が現れると、オメガモンはそれを

吸収した。

（成程……　このデジタルワールドの世界観は『デジモンテイマーズ』のデジタルワールドに近いな……　そう言えば、そもそもデジモンは戦闘種族的な生物だからな……）

戦いを終えたオメガモンは、ムルムクスモンとブラックウォーグレイモンの方を見ながら考え事をしていた。
どちらが勝利するのかは彼にはわかっていた。

一方のブラックウォーグレイモンとムルムクスモンの戦いは終わりに近づいていた。

「おっ……おのれ……　この私がお前如きに……」

「ふん。オーグの方がいい戦い方をしていたぞ」

ムルムクスモンが全身の鎧のいたる所に傷を付けて息を乱しているのに対して、ブラックウォーグレイモンも同様に全身の鎧のいたる所に傷を付けてはいるが、息を乱してはいなかった。

「ガイアフォーース！！！」

「ゲヘナ・フレイム！！！」

ブラックウォーグレイモンが作り出した負の力を凝縮した巨大な赤いエネルギー球とムルムクスモンが放った地獄の業火は正面から激突し合い、物凄い爆煙が発生した。

「くっ！！」

ムルムクスモンは衝撃に耐えながらも、爆煙で姿が見えないブラックウォーグレイモンの次の攻撃を待ち構えた。
ムルムクスモンは、ブラックトルネードが来ることを予想していたのだが、外れることとなった。

「ブラックストームトルネーーード！！！」

「何！？　ヌオッ！！」

ブラックウォーグレイモンは自身の周りに発生させた炎の竜巻を発生させてムルムクスモンに向かって放ったからだ。
当然、ムルムクスモンは自身の予想が外れたことに驚愕するだろう。
その事実に気が付いたムルムクスモンは慌てて防御の体勢を取り、炎の竜巻が収まるまで耐え抜く。

「ガイアフォーース！！！」

炎の竜巻を振り払っているムルムクスモンに向かって、ブラックウォーグレイモンはもう一度負の力を凝縮した巨大な赤いエネルギー球を作り上げると直ぐ様投擲する。

「さっきのは囮か！！　グアァァァァァァァーーーーー！！！！！」

ブラックウォーグレイモンの行動に隠された意図をようやく理解したムルムクスモンは、データ粒子に変わりながら消滅した。
ブラックウォーグレイモンはそのデータ粒子を吸収した。

「どうやら、そちらの方も終わったようだな」

「ああ。どうする？　このまま戦うか？」

戦いを終えたオメガモンとブラックウォーグレイモンは地上に一旦降りると、今後のことについて話し合う。

「いや、時間も時間だ。一旦、帰るよ。今日はありがとう」

「ああ。久しぶりにいい戦いが出来た」

オメガモンとブラックウォーグレイモンはお互いに右手を差し出して握手をした。

どうやら、秀人はデジタルワールドに来て初めてデジモンの友達が出来たようだ。

「今度はオメガモンの姿で俺に挑みに来い。いつでも相手になってやる」

「ははは……　任務が無い時か戦いが終わった時でないと無理な相談だな」

「ふっ……　例え何十年かかっても俺は待っているぞ」

「ありがとう。また会おう、ブラックウォーグレイモン」

「ああ、オメガモン」

オメガモンは夕日に向かって飛び立つと、そのままコマンドラモ

ン軍曹達が帰りを待っている『Ｄ－ブリガード』に帰っていった。
それをブラックウォーグレイモンはオメガモンが見えなくなるまで
見送っていた。

## 第5話　Ｄ－ブリガードの章　激突！！　漆黒と黄金の竜戦士！！（後書き）

デジモン紹介

ブラックウォーグレイモン
世代／究極体　属性／ウィルス種　種族／竜人型
必殺技／ガイアフォース、ブラックストームトルネード、ブラックトルネード
“漆黒の竜戦士”として恐れられる、ウィルス種のウォーグレイモン。ウィルスバスターズのウォーグレイモンとは信条も主義も全て正反対であるが、彼なりの“正義”のために存在している。卑怯や卑劣なことを嫌い、同じウィルス種でも低俗なデジモンは仲間だとは思っていない。ウィルス種のアグモンから順当に進化を遂げたため、背中に装備している“ブレイブシールド”には勇気の紋章が刻まれていない。必殺技はウォーグレイモンと呼ばれるデジモンと同じ『ガイアフォース』だが、此方の場合は大気中の全ての負のエネルギーを一点に集中させて、発射する暗黒の『ガイアフォース』だ。その他にも、自分の周辺広範囲に巨大な炎の竜巻を発生させる『ブラックストームトルネード』と、自ら回転し黒い竜巻と化し敵に突撃する『ブラックトルネード』や、ウォーグレイモンには無い技を数多く所有しているぞ。

ムルムクスモン
世代／究極体　属性／ウィルス種　種族／魔王型
必殺技／ゲヘナ・フレイム
元々は上級天使型デジモンだったが、堕天して魔王型デジモンになった。ナイトメアソルジャーズの幹部クラスであり「伯爵」の名で呼ばれており、３０の魔軍団をまとめている。また、幻獣デジモンのグリフォモンを従えており、自らの手足として使役している。必

殺技は業火を吐き出し、死してなお永遠に苦しむと言われる『ゲヘナ・フレイム』。

オニスモン
世代／究極体　属性／ウィルス種　種族／古代鳥型
必殺技／コズミックレイ、テンペスト
　遥か古代に絶滅したとされる古代鳥型デジモン。想像を絶する大きさを誇り別名『天空の覇者』と称された獰猛なデジモンだ。大型のデジモンでもオニスモンに襲われることが多かったと言われている。必殺技は、眩い光とともに口から破壊光線を放つ『コズミックレイ』に、羽ばたきで嵐を巻き起こす『テンペスト』だ。

次回予告

2体の究極体デジモンを使ってあるデジモンを生み出している黒いオメガモン。
ついに、彼は従っていた最強の七大魔王に戦いを挑む。
黒いオメガモンの実力とは？

次回、デジモンアドベンチャー　ΩテイマーＺＥＲＯ

漆黒の聖帝の章　黒いオメガモン、ズワルトの実力

七大魔王の一体が消滅するとき、漆黒の聖帝が誕生する。

## 第6話　漆黒の聖帝の章　黒いオメガモン、ズワルトの実力（前書き）

お待たせしました。
オリジナルデジモン（の要素あり）であるオメガモンズワルトやその仲間たちの紹介は後日にします。

## 第6話　漆黒の聖帝の章　黒いオメガモン、ズワルトの実力

―何処かの世界に存在している建物の一室―

（そろそろ七大魔王に反逆してもいい頃だな……　力を隠して従っていたがもうその必要も無くなったからな。ヒデ……貴様は今の私を見てどう思う？　聖騎士でありながら同じ聖騎士を葬ったこの私を……）

そこでは、流麗な漆黒の鎧に身を包み、背中に内側が赤色で外側が黒色のマントを羽織って、右肩には黒色のアーマーをつけ、右手が漆黒の機械狼―ブラックメタルガルルモンの頭部を模した篭手をしていて、左肩には黒色の盾―ブラックシールドΩをつけ、左手が漆黒の竜人―ブラックウォーグレイモンの頭部を模した篭手をした聖騎士型デジモンーオメガモンズワルトはその部屋にある椅子に座っている。
彼は好物である紅茶を飲みながら、考え事をしていた。

オメガモンズワルトの左肩に装備しているブラックシールドΩには勇気の紋章が刻まれているが、どういうわけだかわからないが歪んでいるのが特徴的だ。
それは聖騎士型デジモンで、かつワクチン種で在りながら悪の道を邁進するオメガモンズワルトの決意の表れのように見えた。

（そろそろ七大魔王と手を切ってもいい頃だ……　私もカオスデュークモンもミレニアモンも全員七大魔王と匹敵、もしくはそれ以上の実力を持っている。それよりも問題なのは、七大魔王の仲が悪いことだ。私達は絆を大事にするファミリーみたいな集団を目指していたが、やはり無理だったようだ。やはり、ここはミレニアモンの

言った計画通りに、七大魔王を全員抹殺するべきか）

オメガモンズワルトは元々七大魔王を利用するだけ利用して、使えなくなったと判断したら切り捨てるつもりだった。
元々、オメガモンズワルトは同志であるカオスデュークモンとミレニアモンとは、世界から否定された・嫌われた者同士馬が合うのか、家族のような絆で結ばれている。

ちなみに、七大魔王とは、デジタルワールドに封印されている七つのデジタマから生まれる悪魔・暗黒系デジモンの頂点に君臨する七体の魔王型デジモンを指していて、それぞれが七つの大罪を司っているのだ。
七大魔王に名を連ねているデジモンは、『憤怒』を司るデーモン、『暴食』を司るベルゼブモン、『色欲』を司るリリスモン、『強欲』を司るバルバモン、『嫉妬』を司るリヴァイアモン、『怠惰』を司るベルフェモン、そして、『傲慢』を司るルーチェモン・フォールダウンモードである。
そのデジモン達はそれぞれが邪悪な意思と力を持った強大なデジモンであり、その力は一体だけでもデジタルワールドだけではなく、他の世界さえも滅ぼせる力を持っている最強のデジモン達なのだ。

しかし、困ったことに彼らは少なくとも仲間意識では動いていない。
そのため、オメガモンズワルトは、彼らは近いうちに足でまといになると考えるのと聖騎士型デジモンのプライドの理由で七大魔王を粛清するつもりなのだ。

「ズワルト、ムルムクスモンとオニスモンがブラックウォーグレイモンとオメガモンにやられた。しかも、そのオメガモンはウォーグレイモンから進化したそうだ」

「カオスデュークモンか。　まぁ、まずはゆっくりとお茶でも飲もうではないか」

「うむ。これは失礼した。では、頂こう」

オメガモンズワルトが紅茶を飲んでいると、背中に漆黒のマントを棚引かせて、鈍い輝きを放つ鎧で全身を覆い包んだ暗黒騎士―カオスデュークモンがオメガモンズワルトのいる部屋に入ってきた。オメガモンズワルトはカオスデュークモンにティーカップとディーポットを渡すと、カオスデュークモンも椅子に座ると、ティーカップに紅茶を注いで飲み始めた。
一口飲んだ後、カオスデュークモンはオメガモンズワルトに事の詳細を話し始める。

（間違いない……　オメガモンの進化元であるはずのウォーグレイモンからオメガモンから進化出来るのはエイリアスだけだ……　本当にヒデはエイリアスになったんだ……）

オメガモンズワルトはカオスデュークモンの話を聞きながら紅茶を飲み続ける。
そして、心中でかつて自分が人間だった時の一番の親友だった秀人のことを考えていた。

「ズワルト、今のうちに奴を潰すか？　私の考えだと奴は将来大きな脅威になるぞ」

カオスデュークモンの言葉にオメガモンズワルトは少し考え込む。
ちなみに、オメガモンズワルトは仲間からはズワルトと呼ばれている。

「……そうなのだが、その……私とヒデは以前親友だったから、正直の話、ヒデを我が陣営に勧誘したいのだ……　例え無理だと分かっていても……」

「そうか。そう言えば、ズワルト。昨日、言われたとおりベルフェモンを倒したぞ。正直手こずったがな」

「そうか。お疲れ様。ところで、ベルフェモンと聞いて大門大を思い出したよ。あいつも随分と弱いものだよ。あいつのことを興味半分で調べてみたら興ざめしたからな。“人間と融合したせいで本来の力を半分も出すことの出来なかったベルフェモン”相手に命を賭けるとは……　その後クレニアムモンに勝った？　あまつさえ、イグドラシルを倒した？　馬鹿みたいに拳だけで戦えばいいというわけではないよ」

オメガモンズワルトは大門大が気に入らないのか、怒りの声を上げた。
オメガモンズワルトはベルフェモンの本来の実力を十分に知っているのだ。
ベルフェモンの実力はオメガモンズワルトも認めているが、自分には及ばないと考えている。

「それに冷静に考えてみれば、七大魔王はかつてデジタルワールドを滅ぼす寸前にまで追い込んだのだろう？その力を持つ者が、たかだか究極体の力を一時的に超えた程度の力で敗れる筈はあるまいよ。その世界のデジタルワールドの管理者だったイグドラシルでさえ、封印と言う随分と消極的な方法で七大魔王を抑えるしかなかったのだのだから……」

「いや、全く持ってその通りだが随分と酷いことを言うものだな……　そいつにやられても私は知らないぞ……」

オメガモンズワルトの言葉にカオスデュークモンは呆れ果ててしまった。
他人に厳しい一面があるオメガモンズワルトだが、自分にはもっと厳しいのだ。
そのため、カオスデュークモンも初めて会ったときには唖然としていた。

「そうか？　私は客観的に見ているだけだが……　それに、私があんな低レベルな実力しかない奴らに負けると思うか？」

「どう考えても負ける確率は低いが、気を抜くとやられるかもしれないぞ」

「そうだな。ミレニアモンの依頼であのバンチョーレオモンと戦ったが、奴は骨があった。あいつに鍛えられれば、それは強くなるに決まっているよ」

「その通りだな。ミレニアモンも奴を欲しがっていたからな……」

オメガモンズワルトは秀人と同じくエイリアスになるはずだったのだが、彼のパートナーデジモンであるウォーグレイモンとメタルガルルモンとの融合の最中に近年発見された分泌物”ブラックデジトロン”が混入したことで一体のデジモンとして誕生したのだ。
しかも、聖騎士型デジモンでワクチン種というおまけ付きで。
それによる闘争を求め続ける高い凶暴性に苦しめられながらも、彼はオメガモンとしての仕事を果たそうとしたが、ロイヤルナイツや四聖獣に存在を否定されてしまい、人助けをしたとしても誰も寄り

付かなくなったのだ。
次第にオメガモンズワルトは孤独になり、ブラックウォーグレイモンのように自分を受け入れてくれる人物や世界を求めたが、悲しいことに見つからなかった。

　そこで、オメガモンズワルトは決起したのだ。
突然変異や属性や特性等の理由で嫌われて虐げられているデジモン達のための理想郷を作るために。
最初、オメガモンズワルトの元に集ったのはカオスデュークモンのみだった。
しかしそこから、オメガモンズワルトの進撃が始まったのだ。
彼はデジタルワールドの一つに封印されていたミレニアモンのことを知ると、封印を解除して、ミレニアモンと同盟を結んだ。
そして、水面下で活動していた七大魔王と同盟を結び、自身が最も憎んでいた敵であるロイヤルナイツと対戦して、見事勝利を納めたのだ。

「それで、七大魔王を潰す計画だが、次は誰を潰す？」

「そうだな……　ルーチェモンは行方を暗ましているそうで無闇に追いかけられないから駄目だ。　バルバモンは何処かのデジタルワールドで何かをしているみたいだから論外。　ベルゼブモンはヘビーモスでデジタルワールドを放浪中だからこれもまた論外。　リヴァイアモンはミレニアモンからの情報によるとデジモン達と交戦中だから潰してもいいが、そうすると状況が混乱するから駄目だ。
リリスモンはここから近いデジタルワールドにいるが、私の相手ではないから駄目だ。デーモン……　そうだな。　デーモンにしよう。
　あいつ、以前ダゴモンの海に送られてそこで力を蓄えたと言って調子に乗っているから尚更だ。よし、決定だ」

「わかった。リリスモンは私がやろう。　その後は相談しよう」
「ああ。気をつけろよ。　相手は七大魔王だ。気を抜くと我々がやられるからな」

カオスデュークモンとオメガモンズワルトはお互いにやるべきことを確認し合うと、直ぐ様行動を開始した。

三日後、オメガモンズワルトと全身を赤いローブで覆い、背中に悪魔のような翼と頭部に巨大な角を生やした魔王型デジモンーデーモンが岩だらけの無人世界で向かい合っていた。

「一つ聞きたいことがあるが、いいだろうか？　ズワルト」
「私が答えることの出来る範囲内の質問ならば、何でも答える事が出来るが？」
「私をここに呼んだ理由を聞きたい」

デーモンは自分がオメガモンズワルトに呼ばれた理由がわからないようだった。

「七大魔王、『憤怒』を司るデーモンをこの私、聖騎士オメガモンズワルトが粛清するためだ」
「粛清？　クククククッ！！ハハハハハハハハハハハハハッ！！貴様、頭が狂っているのか？　仲間である我々を粛清するとは」
「仲間？　勘違いするな。お前たちは私の道具として働いてもらったのだ。　お前たちのような我儘な子供に付き合う馬鹿はここには

いない。私は藤本秀人という英雄となら付き合うがな」

「あいつとか？　ふん、甘いものだな。ズワルト、お前は仲間や盟友のことになると途端に甘くなったり、性格が変わる。そんなお前に私は倒せまいよ」

デーモンはオメガモンズワルトの抱える矛盾を指摘したが、当の本人であるオメガモンズワルトは自分のことは自分が一番わかっているのか気にしないでデーモンに言葉をかける。

「わかっているさ。だが、それが私自身だ。そういう貴様はどうなんだ？」

「私は選ばれし人間たちのおかげで“ダゴモンの海”に行く事が出来て、力を得られ、何れはデジタルワールドを支配出来るようになった。その時に、ズワルト。貴様と手を組んだのだ」

このデーモンは『デジモンアドベンチャー０２』に登場したデーモンと同一個体である。

「そうだったな。でも、それも今日で終わる。今の貴様相手に本気は必要ない。半分くらいの力でも正直お釣りが来る程だ」

「ほう、私に勝てると思っているのか？完全に力を取り戻した私を？」

「だったら試してみるか？　ロイヤルナイツを何体も抹殺した私と究極体１体と完全体２体を倒せずにダゴモンの海に送られた貴様とどちらが強いか、この場で決めるぞ！！！」

そのようにオメガモンズワルトは余裕そうにしているデーモンに声を掛けると、自分が立っている辺りから物凄い量のエネルギーを放出させた。

「行くぞ」

（なっ、何というエネルギーだ！！）

デーモンがその光景を見て驚愕しているのに構わず、オメガモンズワルトは縮地法を使うことで一瞬でデーモンとの間合いを詰めた。縮地法とは、瞬時に相手との間合いを詰めたり、相手の死角に入り込む体捌きのことを指す。

（ぐっ！！　ズワルトの動きから逃れられない！！）

縮地法を使ってデーモンとの距離を詰めながら風のように流れる動作でオメガモンズワルトは右腕を軽く振るうと、ブラックメタルガルルモンを模した篭手の口部分から巨大な大砲―ガルルキャノンを展開して、オメガモンズワルトの動きに対応する事の出来ないデーモンに照準を合わせた。
それと同時に、オメガモンズワルトはデーモンに向けてガルルキャノンの砲口から砲撃を撃ち込む。

「ガルルキャノン」

「ガアアァァァァァァァーー！！！」

オメガモンズワルトが至近距離で撃ち出した砲撃を喰らったデーモンは、その威力によって空中に吹き飛ばされる。

「クッ！！　フレイムインフェルノ！！」

空中で体勢を立て直したデーモンは両手から炎を生み出しながら両手をオメガモンズワルトに向けると、復讐心に満ち溢れた邪悪な超高熱の地獄の火炎―フレイムインフェルノを放った。

「ガルルキャノン」

自分に向かって迫るフレイムインフェルノを見ても顔色を全く変えようとしないオメガモンズワルトは右手のガルルキャノンの照準をフレイムインフェルノに定めると、ガルルキャノンの砲口から通常の砲撃に比べて貫通力に特化した砲撃を撃ち出した。

（そんな馬鹿な！？　私の必殺技がいとも簡単に破られるなんて！？）

（デーモン……　貴様、頭が悪いな……　私はまだ砲撃を撃ち続けているのに……）

まだ自分の攻撃が終わってもいないのに驚愕の表情をしているデーモンを見たオメガモンズワルトは心中で呆れた。
今、自分が撃ち出している砲撃は貫通力に特化しているので、フレイムインフェルノを突き破り、デーモンに砲撃が当たることがオメガモンズワルトには手に取るようにわかっているからだ。

「グガアァァァァァァァーーーーー！！！！」

フレイムインフェルノを完全に突き破ったガルルキャノンを喰らったデーモンは、苦痛の叫び声を上げながら更に空中に吹き飛ばされる。

「フン！！」

オメガモンズワルトは空中に吹き飛ばされているデーモンの真上に移動した。
そして、デーモンの後頭部にガルルキャノンの砲口を押し付けると、そのまま砲撃を放ちながら地面に叩きつけた。

「ガアァァァァァァァァーーーーー！！！！！」

デーモンは砲撃の威力による苦痛と地面に叩きつけられた衝撃によって、苦しそうな声を辺りに響かせる。

「どうした？　弱い技合計3回だけでもうグロッキーか？　ロイヤルナイツはこんなものじゃなかったぞ？」

オメガモンズワルトはデーモンの頭に押し付けていたガルルキャノンの砲口を離すと、デーモンから距離を取って着地した。
オメガモンズワルトは着地すると、デーモンを嘲笑うような凶暴さを垣間見るような表情をしながら地面に倒れ伏せているデーモンに声をかける。

「グゥッ……　何て強さだ……　恐らく、ルーチェモンでも勝てないだろう……」

「おいおい。あのような低レベルなデジモンと一緒にしないでもらえるかな？　最も、七大魔王と言っても貴様は、以前選ばれし子供たちによってダゴモンの海に送られたそうだからな。あのまま行けば、勝てた戦いだったのにずいぶんともったいないことをしたものだな」

「ヌゥゥゥゥッ！！　ケイオスフレアッ！！」

「フッ！！」

デーモンは唸り声を上げながらオメガモンズワルトに口を向けると、口から混沌の業火―ケイオスフレアを吐いた。
しかし、オメガモンズワルトはケイオスフレアをいとも簡単に避けると、デーモンに向かって突撃を開始した。

「グゥッ！！馬鹿が！　フレイムインフェルノッ！！」

デーモンは自分に向かって迫り来るオメガモンズワルトに向けて嘲りの笑みを見せると、両手からフレイムインフェルノを放とうとした。

「馬鹿は貴様だ」

オメガモンズワルトは、デーモンが両手からフレイムインフェルノを放とうとしているのを見ると、必殺技を撃たせないと言うようにオメガモンズワルトは渾身の力を込めた右回し蹴りをデーモンの腹部に向けて繰り出した。

「ガハッ！！」

右回し蹴りの直撃を食らったデーモンは後方に吹き飛ばされると、地面に叩きつけられた。

「お、おのれ……　貴様みたいな暗黒騎士にいつまでも一方的にやられると思うな！！！　何！？」

立ち上がったデーモンは、目の前にいるオメガモンズワルトに向けて怒りの声を上げるが、次の瞬間オメガモンズワルトの姿が自身の視界から消えていることに驚愕した。

「暗黒騎士？　違うな。私は聖騎士だ。ガルルキャノン」

いつの間にかデーモンの頭上に移動していたオメガモンズワルトは、ガルルキャノンの砲口をデーモンに向けると、砲撃を撃ち出す。

「ガアアアアアアアアアーー！！！」

デーモンは苦痛に満ちた声を辺りに響かせながら体の至るところから煙を噴かせると、ゆっくりと体を前に傾かせて地面に激突する。デーモンの着ているローブは至るところがボロボロになっている。

「少しは必死になれ、というよりもそろそろ本気を出せ。貴様の力はこの程度ではないはずだ」

「赦さん！！貴様は絶対に赦さんぞ！！グガァァァァァァァァーーーー！！！！」

憤怒のオーラを全身に纏いながらデーモンは立ち上がると、一気に自身が纏っていたローブを破り捨てることで、悪魔ごとき真の姿を現した。

デーモンは咆哮を上げると共に自身の体を巨大化させて、全長二十メートルほどの大きさに変わった。

「ほぉ……　私は相手に合わせて戦うという少し困ったこだわりを持っていてな、相手が剣で来るなら剣で、銃で来るなら銃で戦うよ

うにしている。だから、私も巨大化させてもらうぞ！！　ウオオォォォォォォォーーーーー！！！！」

巨大化して本来の姿になったデーモンに合わせてオメガモンズワルトも三メートル程の大きさから二十メートルほどの大きさに巨大化する。

デーモンは両拳を、オメガモンズワルトも両拳を構えながらお互いに睨み合う。

「ハアァァァァァァーーーー！！！！」

デーモンは右拳をオメガモンズワルトに向けて突き出した。

「ハァッ！！」

オメガモンズワルトは、デーモンが繰り出した右ストレートを避けると、デーモンの顔面に目掛けて右回し蹴りを繰り出す。

「ガハッ！！」

デーモンは蹴りの直撃を食らうと、仰け反るように体を傾かせながらそのまま倒れた。

「フン……　やはりこの程度か……　それならば上級攻撃は要らないな。せいぜい使ったとしても、中級攻撃一発でお釣りが来るほどだ！！」

立ち上がったデーモンに向けてオメガモンズワルトは今度は左回し蹴りを繰り出す。

「グゥッ！！」

デーモンに反撃の時間を与えないと言わんばかりにオメガモンズワルトは素早くガルルキャノンを戻すと、渾身の力を込めた右ストレートを叩き込む。

「ウグッ！！」

続けてオメガモンズワルトはデーモンの顔面に向けて左ストレートを叩き込む。

「いつまでも調子に乗るな！！　スラッシュネイル！！」

デーモンは自分に向かって次々と攻撃を繰り出して来るオメガモンズワルトに向かって、渾身の力を込めた左腕を振り抜くことで自身の巨大な左手の爪で相手を切り裂く技であるスラッシュネイルを繰り出した。

「これを待っていた！！　グレイソード！！」

オメガモンズワルトはデーモンがスラッシュネイルを繰り出したのを見て嬉しそうな声を上げながら左腕を身体ごと大きく振りかぶると、左手のブラックウォーグレイモンを模した篭手の口の部分から、英デジモン文字で『ＴＥＲＭＩＮＡＴＩＯＮ』と刻まれた大剣―グレイソードを射出した。

そして、オメガモンズワルトはデーモンの左手に生えている巨大な爪に向けて居合斬りの要領でグレイソードを振り抜いた。

「ガアァァァァァァァァーーーーー！！！！！」

オメガモンズワルトがデーモンの左手に生えている巨大な爪に向けてグレイソードを振り抜いたと同時に、デーモンの左腕の爪は全て綺麗に斬り落とされた。

全てはオメガモンズワルトの思い通りだった。
オメガモンズワルトはグレイソードとガルルキャノンの２つの武器があることによって、近中遠全てに対応できるオールラウンダーでいられるのだ。
更に、オメガモンズワルトはオールラウンダーであることから全てに対応出来ることで苦手がない分、ある一部分に特化しているわけでもないことも知っている。
そこで、戦って相手の苦手な部分が分かれば、そこをつけばいいのと得意な部分を敢えて潰して相手の全力を出させないという戦術を考えたのだ。
その証拠に、デーモンの左腕の爪は全てグレイソードによって綺麗に斬り落とされたからデーモンにとって接近戦は不利になる。
なので、オメガモンズワルトはフレイムインフェルノとケイオスフレアを回避してグレイソードで仕留めるという戦術が使用可能になったのだ。

左手の爪を斬り落とされた激痛にデーモンは苦しむように右腕で左腕を押さえるが、その隙を逃さないと言うようにオメガモンズワルトはデーモンの顔面に向かってグレイソードを振り抜く。

「グレイソード！！」

「ガハッ！！」

顔面に攻撃を受けたデーモンは苦痛の叫びを上げるが、オメガモンズワルトはそんなデーモンの様子など構わずに今度は右回し蹴り

を振り抜く。

「グハッ！！」

右回し蹴りの直撃を食らったデーモンは仰け反るように体を傾かせる。

それを目撃したオメガモンズワルトは直ぐ様デーモンから離れた。

「さて……　遊びは終わりだ……　ラストダンスだぞ！！　踊って行け！！」

オメガモンズワルトはデーモンに対して宣言をすると、グレイソードに激しい紅蓮の炎を纏わせながら、グレイソードから放たれる究極剣舞―ソード・オブ・ルインをデーモンに向けて繰り出した。

「グアァァァァァァァァァァーーーーー！！！」

次々と繰り出されるソード・オブ・ルインをその身に受けるデーモンは苦痛の声を辺りに響かせる。

その様子はオメガモンズワルトという指揮者によって踊らされている観客みたいだった。

「約束通りの中級攻撃だ。オメガブラスト！！」

オメガモンズワルトはデーモンにガルルキャノンの砲口を向けると、エネルギーを集束させた砲撃―オメガブラストを放った。

「グアァァァァァァァァァァァーーーーー！！！ば、馬鹿な！！」

オメガブラストを食らったデーモンは、苦痛に満ちた叫びを響か

せた。

「ギギャアアアアアアアアアアアアーーーー！！！私は負けん！！貴様のような奴に私は絶対に負けんぞ！！」

「……　どうやら、私は貴様を馬鹿にしすぎたようだな。最後まで諦めないその闘志に私は敬意を払おう」

苦痛に満ちた叫びを上げながらも生き残っているデーモンを見て、オメガモンズワルトは感嘆の声を上げた。
何しろ、並みの究極体でも消滅してしまう威力が篭った砲撃を食らってもなおも、デーモンは生きている。
更にはまだ諦めずに戦いを挑もうとしているのだから、化物としかデーモンは評せ無いだろう。

「シネェェェェェェェーーーー！！！　フレイムインフェルノ！！！」

デーモンはオメガモンズワルトに両手を向けながら咆哮を上げると、最大限のフレイムインフェルノを放つ。

「これで最後だ！！　ソードレイ・シュトローーーム！！！」

オメガモンズワルトはグレイソードの剣先を天に掲げると、力の限りグレイソードを振り下ろした。
グレイソードから巨大な三日月状の光刃が放たれると、フレイムインフェルノを突き破りながら一直線にデーモンに超高速で向かう。

「ギギャアアアアアアアアアーーーーーーー！！！！」

オメガモンズワルトの放ったソードレイ・シュトロームを受けたデーモンはデータ粒子に変わりながら、完全に消滅した。

「……」

オメガモンズワルトは瞑らな紅の瞳をデーモンの体を構成していたデータ粒子に向けるが、デーモンのデータを吸収しなかった。デーモンのデータを吸収したアルカディモンが後日デーモンに乗っ取られたという先例を以前聞いたことがあるからである。

「ズワルト！！　リリスモンを倒したぞ！！　……ズワルト？」

そこにリリスモンを倒したカオスデュークモンが戻ってきた。カオスデュークモンは悲しそうに俯いているオメガモンズワルトを心配して声をかける。

「いや、大丈夫だ。どうした？　何か話すことがあるのか？」

「ああ。ミレニアモンから連絡があってカオスモンのエイリアスが完成したそうだ。ズワルトのデータを入れたから力も強くなった上に長生き出来るそうだ」

「それは良かったな。他には？」

「それと……　ああ、そうだ。バイオ・オメガモンというのを造りたいと言っているがどうする？」

「ミレニアモンのマッドぶりにはいつもいつも驚かされるよ。好きにしろ、でも程々にな、って伝えておこう」

オメガモンズワルトとカオスデュークモンは今後について早速話し合う。
ミレニアモンはマッドだが、命を重んじるので寿命が長くないカオスモンに工夫を凝らすことで寿命を通常のデジモンにしたりすることも決して珍しいことではない。

「ところで、ズワルト。　紅茶の在庫が残り少なっているのだが……」

「そうだったな……　よし、まずは紅茶を買いに行こう！！！」

「行動の順序がおかしいだろう！？」

オメガモンズワルトとカオスデュークモンはまずは好物である紅茶を補充すべく現実世界（リアルワールド）に向かっていった。
そこで羽を伸ばしたいのもきっとあるだろう。
しばらくして、四聖獣やロイヤルナイツ、三大天使、七大魔王の間ではオメガモンズワルトは『漆黒の聖帝』と呼ばれるようになり、それと同時に畏怖の存在として伝えられるようになった。

## 第6話　漆黒の聖帝の章　黒いオメガモン、ズワルトの実力（後書き）

デーモン
世代／究極体　種族／魔王型　属性／ウィルス種
必殺技／フレイムインフェルノ、ケイオスフレア、スラッシュネイル
全ての悪魔型、堕天使型デジモンを統一する魔王型デジモンで在ると共に“憤怒”の称号を得ている七大魔王の一体。元々は天使型デジモンの最高位に位置する『セラフィモン』であったが、デジタルワールドの”善の存在（おそらくは構築した人間といわれている）”に反逆し、ダークエリアに堕とされたことで、魔王となってしまった反逆戦争のリーダー格。その強大過ぎる力を抑える為に、普段は全身をローブで覆い力を抑えている。しかし、一度ローブを脱ぎ捨て、真の姿である悪魔そのものの姿を現した時には、止められる存在は皆無に近い力を発揮する恐ろしきデジモン。必殺技は、復讐心に満ち溢れた邪悪な超高熱の地獄の火炎で対象を焼き尽くす『フレイムインフェルノ』に、混沌の業火を口から吐き、相手を焼き尽くす『ケイオスフレア』。そして巨大な左手の爪で相手を切り裂く『スラッシュネイル』だ。

次回予告
Ｄ－ブリガードの元にいる秀人はコマンドラモンと共に究極体の反応があったため調査に出ていた。
そこで襲撃を受けた秀人とコマンドラモン。
そのデジモンに秀人は驚愕し、戦いを強いられる。
次回、デジモンアドベンチャー　ΩテイマーＺＥＲＯ
混沌の章　混沌の騎士、カオスモン襲来！！

望まれし者と望まれない者の戦いが始まる。

## 第7話　混沌の章　混沌の騎士、カオスモン襲来！！（前書き）

カオスモンの存在について独自解釈の部分がありますが、「こういう意見もあるのか」程度で流してもらえれば、と思います。

## 第7話　混沌の章　混沌の騎士、カオスモン襲来！！

秀人がＤ－ブリガードにいる頃、とあるデジタルワールドにあるミレニアモン専用の研究室では、とある人物が目覚めようとしていた。
灯りが灯されている研究室の中に存在している一人の男性が入ったカプセルの前で、背中に2門の巨大なキャノン砲を装備し、同じく背中に亡霊のような物がいて、腕を4本生やした合成型デジモンーミレニアモンは4つの手を器用に使いながらコンソールを打っていた。
その人間を創り出した本人であるミレニアモンは歓喜の表情を浮かべていた。

「よし、完成だ！！　バンチョーレオモンとダークドラモンの融合したカオスモンのエイリアスだ！！　さぁ、目覚めろ！！」

ミレニアモンがコンソールに付いているスイッチを指で押した瞬間に、カプセルの中に入っていた全ての水は消失していき、カオスモンのエイリアスーカオスが目を開ける。
そしてカプセルの扉が自動的に開くと、それと共にカプセルの中からカオスがゆっくりと出て来ると、近くに畳んで置いてあった服を着ながらミレニアモンに声を掛ける。

「お前が私を造ったのか？」

「そうだ。吾はミレニアモンだ。まぁ、自分で言うのも変な話だが有名人だ。良くも悪くもだが」

「そうか。私のすべきことは何だ？　何のために私は存在する？」

「こちらのモニターを見てもらおう」

カオスの質問にミレニアモンは答えるべく、近くにあったリモコンでモニターにある映像を映し出した。
その映像には藤本秀人とオーグとメルーガ、そして、オメガモンが映し出されていた。

「これはオメガモンだが、よく見てみると人間から進化しているのがわかるかな？」

「ああ。彼は何者だ？」

「藤本秀人。吾の仲間であるオメガモンズワルトの友人だった人間だ。だが、けしからんことに今の彼はオメガモンのエイリアスであると共に我々の敵である」

カオスは秀人の映像をまじまじと見ながら、自分のやるべきことに気がついた。

「つまり、私は彼を抹殺すればいいわけか。なかなかやりがいのある任務だな」

「そういうことだ。これから君をその人物がいる世界に送る。いい知らせを待っているよ」

「オメガモン如き、一捻りだ」

カオスの言葉を聞いたミレニアモンは苦笑いを浮かべながら、とある一つの部屋に案内する。

その様子を見たカオスも同じ部屋に入って部屋の中を見回すと一つの機械を見つける。

「この機械は一体何だ？」

「転送装置だ。自分の行きたい世界に自由に行くことが出来る。そのためには一つだけ条件がある」

「それは？」

カオスの質問に、ミレニアモンは答えながら何処からともなくオレンジ色と青色のデジヴァイス０１を取り出した。
それと共に、ミレニアモンはオレンジ色のデジヴァイス０１をカオスの右腕に、青色のデジヴァイス０１を左腕に付けながら、デジヴァイス０１に付いて説明を始める。

「これらはデジヴァイス０１だ。君がデジモンに進化するために必要な道具だ。右腕はバンチョーレオモン、左腕がダークドラモン、両腕を合わせるとカオスモンに進化可能だ。それに吾との通信装置もついているので吾とも通信可能である上に、転送装置もついているからいつでもここに戻ってくることが出来る」

「成程。便利な道具だな。それでは、行ってくる」

「無理だけはするなよ」

カオスの言葉に、ミレニアモンは応じる。
そしてもうミレニアモンには用は無いと判断したカオスは転送装置の上へと移動すると、別世界へと転送されて行くのだった。

『D―ブリガード』の建物の訓練室で、秀人が究極進化したウォーグレイモンと美藤龍之のパートナーデジモンの1体であるスレイヤードラモンが模擬戦をしている。

「スレイヤードラモン！！」

「龍之！！　コマンドを頼む！！」

龍之の叫びを聞いたスレイヤードラモンは答える様に叫ぶと、自身の武器である自身の武器である伸縮自在の剣―フラガラッハを握り締めながら、フラガラッハを下段から上方に向かって降り抜くことで、発生した剣圧―昇竜斬波を放つ。

「弐の型！！　昇竜斬波！！」

スレイヤードラモンが放った昇竜斬波は超高速でウォーグレイモンに迫る。

「フン！！」

それに対して、ウォーグレイモンは両手の間にエネルギー球を作り出すと、それを昇竜斬波に投げつけることで昇竜斬波を相殺した。しかし、その間にスレイヤードラモンはウォーグレイモンの背後へと回り込みながら右手に持っているフラガラッハから天竜斬破を繰り出す。

「壱の型！！　天竜斬破！！」

「その攻撃はもう見切っているぞ！！　ドラモンキラーーー！！」

スレイヤードラモンの天竜斬破を見たウォーグレイモンは左腕に装備しているドラモンキラーで防御しながら、右腕に装備しているドラモンキラーをスレイヤードラモンに向かって突き出した。

「そう来るとは！！　弐の型！！　昇竜斬波！！」

スレイヤードラモンは自分に向かって繰り出されたドラモンキラーをフラガラッハで弾くと、直ぐ様至近距離からウォーグレイモンに向かって昇竜斬波を繰り出した。

「くっ！ブレイブシールド！！」

スレイヤードラモンの放った昇竜斬波を見たウォーグレイモンは背中に装備されている翼の様な物を、両腕に装備して前面で盾の様に構えることで、スレイヤードラモンの放った昇竜斬波を防御すると、爆発が訓練室内部で起きた。

そして、スレイヤードラモンの昇竜斬波が収まると、突如としてウォーグレイモンの後ろにコマンドラモン軍曹が姿を現し、ウォーグレイモンに笑みを浮かべながら言葉をかける。

「今回の模擬戦はスレイヤードラモン殿の勝利だ」

「まさか必殺技のコンボで来るとは……」

「そうでもしないと勝てないよ……」

ウォーグレイモンとスレイヤードラモンはクールダウンをしながら会話をする。

『Ｄ－ブリガード』に来てから、二体とも強くなったことを確実に実感出来るようになっていた。

「お疲れ様、スレイヤードラモン」

「ああ、ありがとう。この調子で行けば、エグザモンにもジョグレス進化出来るな」

「そうだね。ブレイクドラモンも強くなっているし、負けてられないよ」

クールダウンを終えたスレイヤードラモンと龍之が仲良く話しているのを見たウォーグレイモンが元の姿である秀人の姿に戻ろうとしたその時、コマンドラモン軍曹がウォーグレイモンに言葉をかける。

「秀人殿、至急司令室に来てくれ」

「……僕は何かしたっけな？」

『さぁ……？』

コマンドラモン軍曹の言葉を聞いたウォーグレイモンは困ったような表情を浮かべながら、龍之とスレイヤードラモンに質問をしたが、彼らからは答えが得られなかった。
ウォーグレイモンは首をかしげながら司令室へと足を向けると、龍之とスレイヤードラモンも首を傾げながらもウォーグレイモンの後を追い、司令室へと向かい出すのだった。

『究極体デジモンの反応が消えた！？』

司令室でコマンドラモン軍曹の話を聞いたウォーグレイモンと龍之とスレイヤードラモンは驚愕した。
ブレイクドラモンはコマンドラモン軍曹のお手伝いをしていた。
これがなかなか有能だったりする。

「肯定だ。これはつい先程のデータだ」

コマンドラモン軍曹はコンソールを叩くと、ウォーグレイモン達にデータを見せた。
モニターには急に反応が現れると、十秒もしないうちに消失したのがわかる。
ブレイクドラモンは既に見たデータなので、彼らを気にすることなく事務仕事をしている。

「確かに消失していますね……」

「自殺した？いやいや、そんなことないな。なら一体……？」

龍之とスレイヤードラモンが口々に考えている時に、ウォーグレイモンの脳裏に自分に向かって不気味な笑みを浮かべる黒いオメガモンの姿が浮かんだ。

（黒いオメガモンの刺客……　確かに、僕に対抗するには究極体かアルカディモンといった特殊なデジモンでないと駄目だ……　でも、すぐに消えるというのが何か引っかかるな……）

ウォーグレイモンは心中でその反応について考えたが、すぐに消

えたという事実が彼を答えへの壁になっていた。
「私はダークドラモンとの関係があると考えた。よって調査の必要があると考えたが、何か意見はあるか？」
「軍曹殿。自分もそう考えました。私に行かせてください」
「自分もこのような仕事には向いているはずです。ご一緒させてください」
コマンドラモン軍曹の話を聞いて、ウォーグレイモンとブレイクドラモンが参加の意を表した。
「了解した。準備が出来次第、出発しよう」
コマンドラモン軍曹の後に続いて、ウォーグレイモンとブレイクドラモンは司令室から退出すると、準備を始めた。

それから三十分後、ウォーグレイモンがスライド進化したメタルガルルモンとコマンドラモン軍曹とブレイクドラモンは『Ｄ－ブリガード』から少し離れた荒野で調査活動をしていた。
なぜウォーグレイモンがメタルガルルモンへとスライド進化したのかと言うと、メタルガルルモンの鼻先にある４つのレーザーサイトからは不可視のレーザーを照射しており、赤外線、Ｘ線などといったあらゆるセンサーを使うことで対象物を分析することが出来るからである。
ブレイクドラモンの体の構造と同じようにこのような調査活動にはもってこいの能力を持っているのだ。

「そちらは何か見つかったか？」

「いえ、何も見つかっていません（匂うな……　人間の臭いが……
でも、デジモンの匂いもまた……　テイマーか？　それとも……
エイリアスか？）」

「こっちも何も見つかりません。恐らく、遠くに行ったのかもしれ
ません」

メタルガルルモンは目には見えないが、鼻先でかいだ臭いで誰か
がここにいた、もしかしてここにいることを既に理解していた。
メタルガルルモンの予測通り、メタルガルルモンとコマンドラモン
軍曹とブレイクドラモンを遠くから注意深く観察している者が存在
していた。

（メタルガルルモンとコマンドラモンとブレイクドラモンか。ミレ
ニアモンの言っていた通り、藤本秀人のいる世界に転送できるとは
……）

遠くから戦いの様子を観察していた存在ーカオスは、メタルガル
ルモンとコマンドラモン軍曹の姿を見ながら、ミレニアモンの頭脳
と技術に驚嘆していた。

（コマンドラモンは成長期なのに随分と高い数値だな。成熟期なら
一対一だと倒すことが出来る。それに、メタルガルルモンも数値が
高い。ブレイクドラモンもだ。これがエイリアスの特権なのか？）

カオスは、デジヴァイス０１でコマンドラモン軍曹とメタルガル
ルモンとブレイクドラモンの数値を測定すると、その数値の高さに

驚いていた。
実際には、コマンドラモン軍曹の場合は様々な戦場をくぐり抜け、様々な訓練を乗り越えたためで、メタルガルルモンは秀人が大切に育てたため同種でもずば抜けた力を持っているため、ブレイクドラモンは龍之の育て方と今までの経験が主な理由だった。

「さて……　様子見は程々にしてそろそろ任務を始めますか……」

そう言いながらカオスがコマンドラモン軍曹とメタルガルルモンとブレイクドラモンの方に歩み寄ろうとした時、カオスの目の前に一発のミサイルが着弾したため、カオスはその衝撃を耐えながら爆煙を防ぐべく両腕で顔を防ぐ。
爆煙が止んで両腕を下ろすと、そこには蒼色の機械狼―メタルガルルモンが立っていてカオスのことを睨んでいた。
メタルガルルモンは先にブレイクドラモンにコマンドラモン軍曹と共に戻るように伝えておいたのだ。

「おい、そこにいる人間。僕は既に君のことをわかっていた。名前を名乗ってもらおう」

「全くもって手荒い挨拶だな。私の名前はカオス。光も闇も超越した混沌の名を持つ者だ」

メタルガルルモンの言葉にカオスは答える。
カオスの言葉にメタルガルルモンは少し疑問に感じたが、それを表情に出すことなく淡々とカオスに声をかける。

「どういうことなのか説明してもらおう」

「お前は私のことを悪だと思っているが、私から見れば、お前は悪

だ。いつでも何処でも正義や悪、光と闇は存在しないのだ。自分は正義だと思っていても、他人から見れば悪の場合など腐るほど存在している」

「確かにその通りだ。僕達は自分たちのしていることは必ずしもいいことではないということぐらいは自覚しているさ。でも、そんな僕達でも何かやれることがあるから、こうして今戦っているんだ」

「フン。大口を叩いても無駄だ。何故なら、私は、お前の影なのだから……　光と影……お前が光ならば、私は影だ……」

メタルガルルモンのことを嘲笑ったカオスは意味深な言葉を口にした。

（影だと……？　一体どういうことだ？）

カオスの言葉を聞いた秀人は、疑問に感じた。
それに気がついたメルーガは秀人にカオスモンについて説明する。

（秀人、オメガモンとカオスモンの決定的な違いは“望まれて生まれたデジモンか望まれずに生まれたデジモンか”なんだよ）

（“望まれて生まれたデジモンか望まれずに生まれたデジモンか”……？　オメガモンは前者でカオスモンは後者だよな……普通に考えると……）

（その通りだよ。カオスモンは本来、デジモンの中でも珍しく有り得ない存在なんだ。まぁ、融合元であるバンチョーレオモンとダークドラモンの存在理由もあるんだけどね）

バンチョーレオモンは己の正義を貫く漢の中の漢、正に番長と呼ぶべきデジモンだ。
彼は少なくとも、悪のデジモンではない。
しかし、ダークドラモンはそのバンチョーレオモンを倒す為だけに『Ｄ－ブリガード』で生み出された生物兵器であるデジモンだ。
よって、彼らが融合することでカオスモンのその精神にズレが生じるのは目に見えている。
つまり、「正義」と「悪」、そして、お互いに敵対しあう物同士の融合、本来融合することの無かったデジモンの融合によって誕生したデジモン、それがカオスモンなのだ。
なので、カオスモンのその存在自体が世界を歪めてしまうのかもしれない。
それで、イグドラシルやロイヤルナイツによって排除される運命にあるのだろう。
故にカオスモンは寿命が短いという悲しさを持っている。
もしくは、不安定な融合のせいで体を長いこと維持できないこともカオスモンの寿命が短い要因の一つに挙げる事が出来るのかもしれない。

（成程……　だから、カオスは僕のことを光と呼んで、自分のことを影と呼んだのか……）

（そういう事だろうね）

秀人はメルーガの言いたかったことを理解すると、カオスの方に意識を向けた。
メタルガルルモンの視線はカオスに集中されている。

「恐怖……死……悲しみ……怒り……憎しみ……　それらが影だ……」

「確かに僕達の心にも影が存在している。だが……それは決して君を造った奴らなんかじゃない！！！！　メタルガルルモン！！！！　究極融合進化！！！！　ウオオオォォォォォォォォォォォォォーーー！！」

メタルガルルモンは叫びながら自身の体からオレンジ色と青色の光を発生させると、オレンジ色と青色の光の繭に包まれる。
そして、光の繭が消失した後には、後に“白銀の聖帝”と呼ばれることになる聖騎士オメガモンが立っていた。
オメガモンの姿を見たカオスは楽しそうな笑みを浮かべた。

「さて、こちらも進化するとしよう……」

カオスは右腕のデジヴァイス０１がオレンジ色に、左腕のデジヴァイス０１が青色に輝き始めたのを確認すると、デジヴァイスを頭の上で交差させた。

＞＞ＵＬＴＩＭＡＴＥ－ＪＯＧＲＥＳ－　ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ＜＜

「アルティメットジョグレスエボリューション！！！」

カオスは自身の体をデータ化させると、蒼色のデジコードの繭に包まれる。
そして、デジコードが消失した後には中から一つ目で全身がオメガモンに似ていて、右手がバンチョーレオモンを模していて、左手がダークドラモンを模している篭手を装備した、細身の騎士のような姿をした特異型デジモンーカオスモンが姿を現した。
お互いに見れば見るほど自分にそっくりなのでまじまじと見つめている。

「フッ！！」

オメガモンが左腕を振るうと同時にウォーグレイモンの頭を模していた篭手からグレイソードを射出させると、カオスモンを睨みながらグレイソードを構える。
カオスモンもそれに応じるように右腕のバンチョーアームからデジモン文字が刻まれた大剣―ＢＡＮ－ＴＹＯブレイドを射出させると、オメガモンを睨みながらＢＡＮ－ＴＹＯブレイドを構える。

「うぉおおおおおっ！！！！」

「ハアァァァァァァァッ！！！！！」

オメガモンとカオスモンは、お互いに視認する事が出来ないスピードで相手に向かって突進すると、オメガモンはグレイソードを、カオスモンはＢＡＮ－ＴＹＯブレイドをぶつけ合い、凄まじい火花を散らしながらグレイソードとＢＡＮ－ＴＹＯブレイドの応酬を始めた。
何合か撃ち合うと、オメガモンは突然右ハイキックを繰り出して、カオスモンの顔面を狙う。

「食らえ！！」

「何！？」

突如として自身に迫って来るオメガモンの右足に気が付いたカオスモンは、寸前の所でオメガモンの放った右ハイキックをかわした。
それと同時に、カオスモンはグレイソードを構えているオメガモンを睨み付けたが、当のオメガモンはカオスモンの様子には一切構わずにグレイソードの剣先を突き出しながらカオスモンに向かって突

撃する。
カオスモンは何とか避けたが、オメガモンは横に避けたカオスモンに向かって突き出したグレイソードから横薙ぎの斬撃を繰り出す。
「ハアァァァーーー！！」
「くっ！？」
カオスモンは右手のＢＡＮ－ＴＹＯブレイドで何とか防御すると、右足蹴りをオメガモンの胸部に向かって繰り出した。
「フンッ！！」
「グゥッ！！」
オメガモンは後方に吹き飛ばされるが、両足を地面につけることでブレーキ代わりにしながら吹き飛ばされるのを辛うじて抑えた。
オメガモンは右腕を、カオスモンは左腕であるダークドラアームを軽く振るうと、同時にガルルキャノンとギガスティックキャノンを射出させた。
２体は同時に巨大な大砲を相手に向けながら照準を合わせると、同時に必殺技を撃ち込む。
「ダークプロミネンス！！」
「ガルルキャノン！！！」
二体が放った必殺技は二体の中心でぶつかり合い、大爆発を起こした。
爆発の衝撃はお互いに平等に流れて来て、お互いにその場から移動

することで爆発の衝撃を回避した。
二体は一旦両手に装備している武器を戻すと、オメガモンは右手の篭手に凄まじい冷気を、左手の篭手に激しい炎を発生させた。
一方のカオスモンは右手の篭手に眩い光を、左手の篭手に深い闇を発生させた。
二体は両手を同時に大地に叩きつけることで氷と炎と、光と闇の二連撃を繰り出した。

「ダブルトレントッ！！」

「カオストレントッ！！」

氷と炎と、光と闇の二連撃は再度二体の中心でぶつかり合い、大爆発を起こした。
それによって発生した爆発の衝撃波を受けながらも、オメガモンとカオスモンは同時に煙を切り裂きながら、グレイソードとＢＡＮ－ＴＹＯブレイドを構えながら再度相手に向かって突撃する。

「ウオォォォォォォォォォッ！！！！！」

「ハァアアアアアアアアッ！！」

オメガモンはグレイソードに紅蓮の炎を纏わせながらカオスモンに向かって振り抜く。
カオスモンもＢＡＮ－ＴＹＯブレイドに極限まで高めた気合を集中させながらオメガモンに向かって振り抜く。

「グレイソーードッッ！！！」

「覇王両断剣！！」

お互いの武器がお互いの胸部を斬り付けたため、オメガモンとカオスモンはお互いに距離を取った。

「ダークプロミネンス！！」

ガルルキャノンから砲撃を発射しようとしているオメガモンに向かってカオスモンはギガスティックキャノンから暗黒のエネルギー弾を撃ち出した。

カオスモンの公式設定では、ダークプロミネンスは左腕のダークドラアームに装備されたギガスティックキャノンから自身のデジタル細胞を打ち出す技だが、カオスが進化したカオスモンのダークプロミネンスは融合元であるダークドラモンの必殺技であるダークマターをエネルギー弾として打ち放つ禁断の大技―ダークロアーの上位互換の技になっている。

「ムッ！！　オメガシールド！！」

自身に向かって迫って来るダークプロミネンスを見たオメガモンは回避出来ないことをすぐに悟ると、左手に光エネルギーを集中させながら突き出すことで光のバリアを形成してダークプロミネンスを防いだ。

「ウオォォォォ……！！　エボルレイ・ジェネレード！！」

オメガモンは左手に力を込めながら光のバリアを光のエネルギー弾に変換すると、カオスモンに向かって撃ち返した。

「グォッ！？」

まさか自分の技を防いだだけでなく撃ち返すとは微塵も考えていなかったカオスモンはエボルレイ・ジェネレードを食らうと、苦痛と驚愕がおり混ざったような声を上げながら後方へと吹き飛ばされた。

「おのれ……　喰らえ！！　ダークテンペスト！！」

カオスモンは苛立った声を上げながらギガスティックキャノンの砲口を真上に向けると、そこから先程のダークプロミネンスよりも巨大なエネルギー弾を発射した。
すると、巨大なエネルギー弾は無数のエネルギー弾に分裂して、オメガモンの真上から次々と襲いかかる。

「クソッ！！」

「させるか！！　ダークプロミネンス！！」

オメガモンは無数のエネルギー弾を見て避けようとするが、カオスモンはオメガモンの足元に照準を合わせると、ダークプロミネンスを撃ち出した。

「ハッ！！」

カオスモンのダークプロミネンスが自分の足元に着弾したことによって、オメガモンは動きを無理やり止めさせた。
それによって、オメガモンに向かって降り注ぐダークテンペストは次々とオメガモンに直撃して、大爆発を起こす。

「グワァァァァァァァァーーーー！！！」

オメガモンは爆発で発生した煙の中に姿を消して行きながら、苦痛の叫びを上げた。
ちなみに、ダークテンペストの一発一発はダークプロミネンスと同等の威力を持っているため、オメガモンからしてみればダークプロミネンスを何十発も喰らった気分なのだ。

「ウッ……ウゥ……」

ダークテンペストを喰らいながらもオメガモンは何とか立ち上がろうとしたが、ダメージによって体が思うように動かずガックリと顔を下に向けたまま倒れている。
それを見たカオスモンはオメガモンの首根っこを掴むと、持ち上げた。

「私が考えていたよりも随分と脆いものだな……　正直期待外れだ……」

「グゥゥ……」

物凄い力で首を絞められているためオメガモンは苦しそうな声を上げるが、カオスモンはそれに構わずにオメガモンのことを嘲笑う。

「私によって息絶え、この世界から消え去るがいい！！」

「私は……まだ……消えるわけには行かない！！」

カオスモンの言葉を聞いてオメガモンは声を上げながら光エネルギーを右拳に込めると、右ストレートをカオスモンの顔面に向かって繰り出した。

「ガフッ！？　くそっ！！」

「ハアッ！！」

微塵も考えていなかったオメガモンの反撃を喰らって光カオスモンは後ろに吹き飛ばされたが、立ち上がるとオメガモンに向かって構えを取る。
オメガモンも同様に気合を入れながら構えを取る。

「ハァアアアアアアアアアアーー！！！」

「ウオオオオオオオオオーーー！！」

オメガモンとカオスモンは武器を構えながら同時に突撃すると、再び剣戟を開始した。

「フン！！」

「クッ！！」

十合ほどお互いの武器を交えると、カオスモンはオメガモンの胸部に向かって右回し蹴りを繰り出すが、オメガモンはそれを受け止める。
カオスモンは今度はジャンプして右回し蹴りを繰り出すが、オメガモンは屈むことでそれを避けた。

「デェイ！！」

「ウォッ！！」

カオスモンはなかなか攻撃が当たらないことに苛立ちながらも左足蹴りをオメガモンの胸部に向かって繰り出した。
オメガモンはカオスモンの左足蹴りを喰らい、後退したが体勢を立て直してすぐにグレイソードを構える。
カオスモンもＢＡＮ－ＴＹＯブレイドを構えながら、オメガモンに意識を向ける。

「ハァッ！！」

「フン！！」

カオスモンはオメガモンに向かってＢＡＮ－ＴＹＯブレイドを突き出しながら突撃するが、オメガモンはそれを避けると、カオスモンの胸部に向かってグレイソードを振り抜く。

「クッ！！」

オメガモンへの攻撃を放った後だったため、カオスモンはオメガモンの斬撃を防御することが出来ずに胸部を斬り付けられてしまった。

「タァッ！！」

「クッ！！」

更に、オメガモンは先ほど斬り付けた箇所とは違う部分に向かってグレイソードを振り抜いた。
カオスモンはグレイソードを辛うじて防御したが、その隙をついてオメガモンは右ハイキックをカオスモンの頭部に向かって繰り出した。

「フン！！」

「グァッ！！」

オメガモンの右ハイキックを喰らったカオスモンは、頭に走った衝撃でヨロヨロと後ろに下がる。
それを見逃すはずのないオメガモンは右ハイキックを喰らったことで動きが止まってしまっているカオスモンの頭部に向かって左ハイキックを素早く繰り出す事で弾き飛ばした。

「ムン！！」

「グゥッ！！」

カオスモンはその事に声を漏らすが、弾き飛ばされた反動を利用して再び距離を取ろうとする。
だが、オメガモンはグレイソードに光エネルギーを集中させると、カオスモンの胸部に向かって強烈な突きを繰り出した。

「オメガセイバーーー！！！」

「グアッ！！」

オメガセイバーを喰らったカオスモンは胸を押さえながら後退する。
更にオメガモンは再度グレイソードに光エネルギーを集中させると、カオスモンに向かって鋭く振り抜いた。

「ロイヤルスラッシュ！！」

「グフッ！！」

オメガモンの斬撃を喰らったカオスモンは吹き飛ばさせると、地面に叩きつけられる。
何とか立ち上がったカオスモンだが、息を乱している。

「オメガレイ・シュトローーーム！！！」

「グアアアアーーー！！！」

そろそろ止めをさす頃合だと判断したオメガモンはガルルキャノンの砲口をカオスモンに向けながら、光エネルギーを集束させた砲撃を撃ち出した。
カオスモンは防御することが出来ずに吹き飛ばされるが、何とか立ち上がった。
本来のオメガレイ・シュトロームは究極体デジモンを確実に倒すことの出来る威力を持っているのだが、チャージの時間が足りないのと激しい戦闘でエネルギーを消費した理由から、カオスモンにダメージを与えることしか出来なかった。

「ハハハハハハ……　大したものだ……　最後まで諦めずに挽回したその勇気と実力……　それでこそ戦う意味がある……　また楽しませてもらおう……」

「ツッ！！　待て！！」

突如として消えたカオスモンに近寄ったオメガモンだったが、戦いの疲労とダメージで思わず片膝を付いた。
気がついたら、空には綺麗な夕日が存在している。

「ハァ……ハァ……ハァ……　カオス……　私と同等かそれ以上の強さか……　厄介な敵が出てきたものだな……」

オメガモンは息を整えると、『Ｄ－ブリガード』の方角に向かって飛び立った。

飛んでいる最中に、オメガモンはインペリアルドラモン・パラディンモードとの念話をしていた。

（オメガモン……　カオスモンと交戦したそうだな……）

「はい……　強かったです……　今回は何とか勝てましたが次はどうなるのか……」

（そのカオスモンだが……　君に確保するように言っていたダークドラモンが融合元として使われた）

「やはり……そうでしたか。抹殺するしかありませんね」

オメガモンが来る一か月前にダークドラモンはミレニアモンによって回収されて、同じ世界で捕獲したバンチョーレオモンを使って人造エイリアスを作り出す実験に使用したのだ。

その結果、カオスモンが誕生したがそれはミレニアモンの計画通りだったのだ。

「次の任務は一体？」

「カオス三将軍とカオスロードを倒すことだ」

「カオス三将軍？　それは一体？」

「カオスロードと呼ばれているカオスドラモンの部下であるカオスグレイモン、カオスシードラモン、カオスピエモンの3体のデジモンを指す」

オメガモンはインペリアルドラモン・パラディンモードの説明を聞いて納得したように頷いた。
彼の心中は初めての任務を達成することのできなかった悔しさで満ち溢れていた。

「わかりました」

（世界に着いた時に詳細を説明する。それでは）

オメガモンはインペリアルドラモン・パラディンモードとの念話を終えると、そのまま真っ直ぐに『D－ブリガード』に帰っていった。

三日後、オメガモンは『D－ブリガード』から旅立つことになった。
インペリアルドラモン・パラディンモードから連絡があったからである。

「また何かあったらここに立ち寄ってくれ」

コマンドラモン軍曹は敬礼をしながら、オメガモンに言った。

「はい。ブラックとも約束しましたから」

オメガモンも敬礼をしながら答える。

「秀人君。また会おう」

『またな』

龍之とスレイヤードラモン、ブレイクドラモンは手を振りながらオメガモンに言葉をかける。

「皆さん、ありがとうございました。また会える日を楽しみにしています」

オメガモンは飛び立つと、次元を歪ませてデジタルワールドからその姿を消失させた。
そして、オメガモンが消えた場所を、少し間、誰もが言葉を発する事無く見つめ続けるのだった。
ちなみに、後にオメガモンと龍之、スレイヤードラモンとブレイクドラモンがジョグレス進化したエグザモンが共闘してあるデジモンと戦うことになるとは、この時の彼らは微塵も思わなかった。

## 第7話　混沌の章　混沌の騎士、カオスモン襲来！！（後書き）

オリジナル人物とデジモン紹介

名前：カオス

容姿：『銀魂』に登場する伊藤鴨太郎に似ているが、メガネはかけていない。

性別／男性

年齢／不明

性格／一人称は『私』。自信家で相手を見下すことがある。
混沌の名前を持っているからか善と悪について独自の考えを持っている。

詳細：ミレニアモンが作り出したカオスモンの人工エイリアス。オメガモンこと藤本秀人を抹殺することが存在理由。実力はオメガモンと互角かそれ以上と思われる。バンチョーレオモンとダークドラモン、カオスモンに進化することが出来る。

名前：カオスモン

性別／デジモンに性別の概念は存在しないが、あえて言うならば男性

属性／ワクチン種

世代／超究極体

種族／特異型

必殺技／覇王両断剣、ダークプロミネンス

性格／カオスの時とほぼ一緒。

説明／通常、ジョグレス時には、２体のデジモン同士のデジコアが完全に融合し、新たなデジモンに生まれ変わるが、カオスモンは、ジョグレス前のデジモンのデジコアをそれぞれ保持し、非常に不完全な状態でその姿を維持している。カオスモンとは、「存在し得ない」デジモンのコードネームであり、デジタルワールドの“　セントラルドグマ”（中心原理）では絶対にありえない特異（バグ）である。極めて不安定な存在のため、寿命が非常に短く、デジタルワールドの管理システムが放つバグを排除するプログラムが走るために寿命が短くなってしまうと推測される。このカオスモンはバンチョーレオモンとダークドラモンがジョグレスして生まれたものと見られており、両腕にそれぞれのデジモンの面影を見ることができる。必殺技は、「バンチョーアーム」に装備された「ＢＡＮ－ＴＹＯブレイド」から繰り出される無敵の一刀両断『覇王両断剣』と「ダークドラアーム」に装備された「ギガスティックキャノン」から自身のデジタル細胞を打ち出す『ダークプロミネンス』だ。

詳細／カオスとバンチョーレオモンとダークドラモンの究極融合進化によって現れるデジモンで、本来ならば不安定で寿命が短いが、ミレニアモンによってそれらの欠点は解消されているため、オメガモンと同等かそれ以上の実力を発揮することが出来る。光と闇の力や、様々な技を持つ技巧派な一面がある。

オリジナル技の説明は次回以降にします。

次回予告

とある現実世界（リアルワールド）に降り立ったオメガモンは、デジモン達の存在を掴み、その背後の黒幕の存在に気づく。
そして、カオス三将軍の一体、カオスシードラモンとリベンジに燃えるカオスモンと死闘を繰り広げる。

次回、デジモンアドベンチャー　ΩテイマーＺＥＲＯ

混沌の章　究極デジモン海上決戦！！

蒼く広がる海上で、究極の戦いが繰り広げられる。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7304w/

デジモンアドベンチャー　Ωテイマー ZERO

2011年10月10日11時36分発行